



われわれは別の星界についても同様の推測をする。すなわち、それらの領域にはいずれも居住者が存在する。というのは、それらは、それぞれわれわれが住む世界と同じであり、ひとつの宇宙の特定の領域であり、この宇宙には星の数と同じだけ無数のそうした領域が存在するからである。

——ニコラス・クザーヌス

……ずっと以前に諸地球が存在し
この地球以前に人と獣が住んでいた、
その後別の地球が再び生じ
別の獣と別の人間が生まれた……。
別のアダムがかつて息を授かり
また別のアダムが何度も繰り返す
これは最後の大火でいつか消滅するに違いない。

——ヘンリ・モア

世界は最初から数のとても少ないものだったから、カズナが偶然死んでしまうことなんてなかったし、そもそも永遠に生きているなんてありえない。昼間の交差点で電話をしてみると、カズナは「誰ですか？」といつもの声で言うのだった。

電話をしたのは、以前を思い出せないくらい久しぶりのことだった。ずっと昔に一度だけ電話をした覚えはあるけれど、電話を通して聞くカズナの声を具体的に描けないから、もしかしたら別の人と混ざっているだけかもしれない。中学生のころに知りあって、もう四年くらいにはなっていた。その間ずっと電話をかけていなくても、二人にとっては仕方なかった。文字では足りないし、どうしても会えないときくらいにしか電話しない。そんなことは少なくとも、高校に入ってから一度もなかった。

いつのころからか、みんなのあいだで囁かれていた噂によれば、カズナが死んでしまったあれからもう一年も経つのに、カズナとそっくりな人が街を歩いている。髪も服装も似ている。見かけたと言う人はハルをはじめ何人もいたけれど、とっさに話しかけてみたりしたのは誰もいなかった。

七月のある日、夏休みのはじまる前の学校で、ハルは静かに喜んでくれた。ハルとは幼稚園のころから親しかった。乗っていた電車が止まって遅刻したから、一時間目の授業が終わって初めてハルに聞いた。数学の授業だった。カズナは駅前の信号をひとりで歩いていた。

「最初見たときはただのそっくりかと思ったけど、やっぱり違ってさ、なんだろう、歩くスピードがちょっと速いじゃん、カズナって。だから、そっくりとかじゃないなって、カズナだなんて思ったんだけど、びっくりしちゃった。他の人より半分くらい速かったし。

でもよかったじゃない、うまくいって。こんなことなら隠さず言ってくれればよかったのに。祝ってあげる」

その日は二人で帰らなかった。ハルは病院の予約をしていた。学校から駅までの途中にその病院があった。皮膚科だった。中から分厚い毛布のような上着をきたおばあさんが出てきて、その後ろを緑のワンピースを着た女の子がついてきたかと思ったら抜いた。一度も行ったことのない病院だった。ハルは小さいころに一度だけ行っていた。駐車場がなかった。

「なんの病気？」

「病気とかじゃないかもしれないんだけどね。

入院するかも」

ハルは予約の時間を四十分遅れていた。

わたしは駅でカードにお金を入れなかつた。昨日は覚えていたのに、すっかり忘れてしまっていたからびっくりした。

財布を見れば、一万円札しかなかった。いつも五千円ずつと決めていた。中学校にはずっと自転車で通っていて、高校は中学校とは逆の方角だったけれど、同じくらいの距離だから、二学期から自転車に変えるかもしれないなかつた。学校に通うだけでお金を使うなんて、そんなのは絶対に許されなかつたと思っていた。

券売機にカードと一万円札を入れて、お釣りが出るのを待っていると、十五秒くらい経ってから、お札の出る黒い部分が券売機の中へなんの引っかけもなく入っていった。そのままにも変化がないから、もしかしたら音楽を聞いているのはいけないんじゃないかと不安になって、イヤホンを外しながら横を見ると、隣で切符を買っていた登山できるくらい大きなリュックサックを背負った男の人が、わたしを見てからわたしの横を見た。眼鏡をかけていて、そういえば昨日もこの人を駅の構内の監視カメラ越しに見かけた。目を細めて路線図を何度も確認していた。つられてわたしも視線を向けると、わたしの横には小さく穴のあいたガラスの小窓があって、駅員の人がじっとこっちを見ていた。

帰るのに時間がたくさんかかったような気がした。学校の最寄駅から三つ先の大きな駅で乗り換えて、四つ先の駅で降りてから、まっすぐ坂を上っていけば左手に七階建てのアパートがあった。その三階の角部屋に、お母さんと二人で住んでいた。お母さんは仕事でいつも帰るのが遅くて、下校すると家で一人になるのは中学生のころからずっとだった。

鍵を開けて靴を脱ぎ、玄関から廊下、リビング、洗面所、自分の部屋と、順番に電気をつけていき、それから自分の部屋で制服を脱いだ。いつのまにかそれが習慣だったけれど、わたしにもよくわからなくなっていた。ほとんど事務的なんだろうな、と思った。体が自分からパチンパチンと電気をつけていくときに、わたしはぜんぜん違うことを考えたりしていた。なにも考えていないときもあったりした。今日もやっぱり家中を明るくしながら、そういえばハルの話を思い出していた。なんでハルがあんな冗談を言ったのか、わからなかつた。すごく当然の様子でいたけれど、わたしはカズナが死んだということをもともと知らなかつた。数日前もメールで何気ないやり取りをした。そのときもカズナはなにも言っていなかつた。それが別々の高校に入ってからずっと続いていた。

おとといはこんな会話ががあった。

「今日は靴を買いに行ったんだけど、ダメだった。歩いてる人の靴をずっと見てたらわかんなくなつた。形というか、そもそも靴以上に違いが無いような気がして」

「だって靴を見てたんでしょ？」

「なんでこんなにみんな同じふうな靴が歩いてるのかなって」

「うーん、歯磨きしてるとたまに歯があるって違和感しなくなるよね。あとからむりやり刺しこんで絶対に抜けないよう接着剤でくっつけてさ、それを必死にブラシで擦ってるなって、いつかは抜けるなって、手の動きではっきりわかっちゃったりする、そういうことだよ、きっと。」

「ほら、むかし言ってたじゃん、小学生のころ目を測ったんでしょ、定規で？ 自分のだけじゃなくてみんなの。いつも使ってる定規じゃどれも同じ大きさの目になっちゃうって、精密じゃないとダメだって、何度も聞いたよ」

「なにそれ、知らない」

そういつたすべてがメールの履歴によって残されていた。送信分と、受信分。

部屋着に着替え、ベッドに寝転がりながら、iPhoneのメールボックスを順番に辿ってみた。受信フォルダをいくつか見るだけで、すぐに嫌になるのがわかって恥ずかしかつた。自分のメールへの返信だと許しなかつた。ブログも日記も数ヶ月で残さず消してしまうし、小学生のときに授業で書いた遠足の感想も、

いつのまにか行方不明にした。メールの履歴はずっと残っていることに意識が向かなかっただけだった。

わたしは送信済みフォルダの中にあるメールを、すべて選択して削除してみた。すこしの間をおいて空っぽになった画面を見ると、できる限りそのままにしておきたくなった。これでわたしが誰かにメールを送れば、そのひとつだけが際立ってフォルダに入れられる。そのときはまた消してみても、そうやって何度も確認しては消すのを、これからもずっと続けていこうと思った。

夜が来たから、ひとりでお母さんの用意した魚の煮込みと、インスタントの味噌汁と、ご飯と、アーモンドを食べて、お風呂に入った。ベッドで音楽を聞きながら、会ったことのない四歳年上の女の人に Twitter で返事をした。たぶん四歳くらい年上だった。突然勧められたバンドの音楽を、とりあえず聞いたことにして感想を言った。

「すごくいいですね」

と言うと、

「反復がいいよね」

と言われて、きっとそうなんだろうな、と思った。詳しい人は本当にわたしよりずっと詳しくかった。

十時になると眠った。まだ眠くなかったけれど、一日を十時に終わらせるのがいいと知っていた。三年前からだ。雑誌ですごい人が、十時に寝て、四時に起きて、パンを食べてから水泳とランニングをしていたから、わたしはいつも六時に起きて、学校に行くと、健康になったような気がした。それは間違っていた。なかなか眠れずにベッドでじっとしていたら、ハルの言葉が七回聞こえる夢を見た。枕元にも部屋のすみにもいない、姿のはっきりした暗闇として、ハルが言った。

「よかったじゃない、うまく行って。祝ってあげる」

「なにを？」

「覚えてないの？」

「あ、わかった、すごく思い出した！」

なんで忘れてたんだろう？」

目を開いたときには、もう目覚めていた。時計を見ると、まだ二十分もたっていなかった。夢の中で思い出した内容が、夢なのかそれとも昔の記憶なのか、わからなくなった感覚を五分くらいかけて忘れた。

リビングでは、テレビの笑い声が聞こえて、お母さんは仕事から帰っていた。売れ残りの惣菜を食べていた。イカのフライと黒糖の蒸しパンと、わたしの残した魚の煮込みだった。テレビを見つつ、携帯電話でメールを打った。打ち終わると蒸しパンを食べた。昔から好きだった。

お母さんは服を売っていて、接客が家でのお母さんとほとんど変わらなかった。一度勤めている百貨店に呼ばれたから行った。店員として、お店の服を買って着ないといけなかった。

「これとか、どう？」

と白いブラウスを見せられた。

「いいね」

とわたしが言った。すぐ近くにある紺色のカーディガンの値札を見ると、わたしの誕生日に貰うお金の三倍だった。すごいと思った。

お母さんは松葉杖をついたお客さんが来て

「どうぞ御覧ください」

と言った。小学校のころの先生に、眼鏡や立ち止まり方が似ていた。髪型はぜんぜん似ていなかった。わたしは、いい先生だったから

「久しぶりね、大きくなって！」

と喜んでくれるのを待っていたのに、お客さんはこっちには構わず、白のジャケットの試着をはじめた

から、エレベーターで帰った。お店があるのは百貨店の西側の三階で、東側の一階がいつも登下校の乗り換えで使う大きな駅と繋がっていた。お母さんは車で通勤していた。わたしはここ一ヶ月くらい、お母さんが運転する車に乗っていなかった。運転がそんなに好きじゃなかったし、お父さんがいたころにはほとんど運転なんかしなかった。だからお母さんはとても疲れていた。テレビでおもしろい人が何人も海に飛び込むと笑った。携帯電話が鳴れば蒸しパンを食べのをやめて、メールを打った。おもしろい人が何人も港で手を振っていて、二十本くらいは振っていた。

「おつかれさま」

と言いに行ってもよかったし、本当なら言うべきだったのに、ベッドから出られなかった。寒かった。焦らなくちゃいけないような気がしたけれど、なんのこともよくわからなかった。眠れないし、カズナは起きてるかな、と思った。

枕元においてあったはずの iPhone を手探りで見つけて、部屋の明かりもつけないまま画面光だけをたよりにメールを送った。数分で返ってきた。いつも通りの文章だから、きっとカズナはまだ眠っていなかった。

「ねえ、街でなにしてたの？」

と打った。

「どうしたの」

と返ってきた。速かった。

「いいからさ」

「昨日ならエビだよ。大きなデパートがあるでしょ？ 駅を出て右側にある、本屋とか入ってるところ。百貨店の方じゃないよ。あそこの近くに熱帯魚の店があるらしくて、地下だけ行ってみるとすごく汚かった。魚とか少ないし、水が濁ってうまく中が見えなかったりするし、店員も笑ってた。エビはいたけど値段だけ見てきたよ。半分食われてた」

「熱帯魚飼ってたっけ」

お母さんがお風呂に入った。ニュースが流れていた。事故が多かった。メールが来るたび震える iPhone を両手で包み、眠っているふりをしてみた。七人の子どもが車に轢かれた。

「エビだよ？」

「エビだけ飼ってるの？」

「まだだって。熱帯魚は知らない。あんまり魚はいいんだ。ザリガニを十歳のころに飼ってて、ぼくの代わりに母親が水を換えようとしたのが冬だったんだけど、寒かったからお湯を入れたら死んじゃった。四十度とかで水槽に入れたら、ふわっとすぐに浮いたって学校から帰ってきたら言われて。ごめんねって言ってた」

「赤くなったんだね」

「最初からだよ」

お母さんが眠った。わたしも三十分して眠った。

カズナは中学生のときに、給食で出たエビをいつも隣の人にあげているわたしをからかった。すごく恥ずかしかった。エビは形のほとんど残っているエビが虫みたいでおいしく食べられずに、すり潰したものでならおいしくなくても食べられた。お父さんが箸で茹でられたエビをつまんでわたしに言った。

「エビを食べるとエビに乗っ取られるんだよ」

わたしが見つめているのを確認してから、殻のついたままのエビを口に放りこんでよく噛んだ。パリパリと割れる音が聞こえるような気がした。実際に聞こえた。お父さんはいつも決まってそんな具合だったし、お母さんは普通に食べた。

お父さんの運転する車で大雨の橋や高速道路を渡ってどこかの旅行に行ったときも、駐車場の自動販売機で喉の乾いたお父さんが飲み物を選びながら、わたしはコーラを飲んだらダメだと言った。

「コーラは石油なんだ」

「なにそれ？」

「毒のこと」

そうしてメロンソーダをわたしに買い、お父さんはコーラを飲み、わたしは炭酸が飲めなかったからお母さんが全部飲んだ。

お父さんの言うことはみんな本当だと思うのに、わたしはある日ふいに嘘だと知っていた。どうしてかわからなかった。友達が平気でコーラを飲んでいるのを見たときからか、それともゆっくり知識としてわたしは知ったのか、はっきりしたきっかけの出来事が思い出せなかった。もちろんショックなんて受けなかったし、変なお父さんだったな、くらいにしか思わなかった。

でも、コーラもエビも嫌いに思うのは、ずっと変わらないものとして残った。お父さんの言葉を否定する友達の言葉を信頼しようにも、体の底までおりてこない。入口のどこかでつかえてしまい、滞った声は池のように溜まっていった。それは水面が澱んでいてとても危なかった。

カズナの言葉をいつも通りだと考えるべきだったのに、会話が数ミリずれているような気がしてしまったこと、それも単に横へずれたのではなくて、一度消し、上からまた重ねるのに間違えてずれてしまったことは、絶対に嘘にならないといけなかった。それか冗談や錯覚にならないといけなかった。もしも間にあわず奥まで入ってしまったとしたら、いくら塗っても削っても、元に戻ることがないと思った。どこまでがつまり、どこまでが奥へと入っていくのか、わたしのことなのに自分でうまく見極められなかった。

週末に会う約束をしていた。写真集をカズナは返さないといけなかった。わたしは直接会ったら危ないずれもすぐに萎むか膨らむかして、ずっと抜け出すような一致におさまってくれると信じていた。自分の目で見るのが一番正しかった。

学校の先生が、
「エジプトの人は生死にあわせて動いたり止まったりする心臓を生命だと感じたし、中国の人は呼吸だと感じたし、それは直接見たり触ったりすることができるからです」

と言った。世界史の先生だった。一度も好きにならなかったけれど、そのときはすごく感動して、普段と変わらないところを一本だけ見ればいいんだな、と、カズナと会うのをめずらしく楽しみにしているのがわたしにもわかった。

週末のすごく混んでいる街中の喫茶店で、昼頃に待ちあわせた。よく来る喫茶店だった。十分たっても来なかった。いつものことだから、店内に流れるジャズみたいな音楽の拍子を、区切りつつ数えていると、三十八回目くらいになって、わたしのとなりの席に座る女の子がiPhoneにイヤホンを刺しながら店員にサンドイッチとホットコーヒーの注文をしていた。知らない制服の高校だった。きれいだった。髪の毛はわたしと同じくらい長くて、同い年くらいだったのに、わたしはカウンターじゃなくても席に座ったまま注文できるなんて、それまで見たことがなかった。

注文が終わって店員が離れると、女の子はジャズでない音楽をひとり聞きながら足を組み、革張りの手帖をカバンから取り出して蛍光ペンで線を引いた。それからうつぶせた。すごくカラフルだった。赤も青も緑もあった。わたしは女の子の背中の制服の皺を見ていると、何回数えたのかわからなくなったし、曲調が変わった気がした。同じ曲かもしれないなかった。カズナは遅れてしまうとメールで言った。後ろの席の男の人たちがうるさかった。六人はいた。

二十分くらいしてようやく喫茶店にやってきた人は、店に入ってすぐにカズナだとわかったから、小さく右手を振った。わたしは店の一番奥にいた。店の奥といっても、歩道に面したガラスの壁が縦長に続いている道沿いの店の奥は、奥という感じがあまりなくて、歩道を歩いているたくさんの人のなかにカズナかもしれない人がいたから、じっと目でたどっていると、店に入ってきたからカズナだった。カズナはふらふらと店の入り口に立ったままわたしを探せば、小さく手を振っている動きが見えたから、こっちに早歩きで来たけれど、わたしは近づくにつれて

「あれ、こんなんだっけ？」

と思った。もしかしたら人違いかもしれないなかった。服装も歩き方も、どこが違うのかはうまく言えなくて、でもはっきりとした不安が焦りになると、背中に汗がつたって冷たかった。黒いポロシャツを着ていた。絶対に間違えた。

「あー、あの……」

「ごめんごめん、前を歩いてる人が遅くて。何分遅れ？」

「えっと……、二十分」

目の前に座ったカズナは、少し日焼けをしていた。

店員が当然のようにやって来て、ご注文をどうぞ、と言った。カズナは借りていた写真集をわたしに手渡ししながら注文した。昔から苦手なはずのアイスコーヒーだった。少々お待ちください、と言って店員が離れていく数秒後になって、わたしはようやくそのことに気がついた。わたしもアイスコーヒーを飲んでいた。もう半分くらいなくなっていた。

机の上には薄汚れた黒のビンと白のビンのふたつ並んでいる写真集の表紙があって、店員はそれをちらちらと、見てはいけないもののように見ている。

「変わったんだね、システム」

「なんで？」

「前までは席にわざわざ注文聞きに来てくれたりしなかったじゃん」

「前からだよ？」

「え、知らなかった」

「そっか」

「うん……コーヒーさ、胃が痛むんじゃないの？」

「今日は大丈夫。というか最近かなり慣れてきた。なんで笑うの」

「ううん、写真集よかった？」

「あ、物みたいだった」

「どこが？」

「からだ」

「あの人のなかでも特別だと思う。普通は街とか撮る」

「すごい有名でしょ、名前。だから部活の人もみんな知ってたんだけど、見せたらびっくりしてた」

「へえ、見せたんだ。これを？」

写真部に入ったわけではなかった。わたしは写真は撮らないけれど写真集は好きで、カズナは写真集を持っていなかった。親戚のおじさんがカズナにカメラを貸してくれた。中学のときは写真なんて話さなかったのに話すようになったのは、違う高校に通うから話題がぜんぜん足りない。カズナは中学のころから野球部だけれど、野球がそんなに好きじゃないと言うし、わたしも野球は知らない。ルールは知っている。お父さんが野球を見るのが好きだった。

通っている高校についてわたしはよく話された。カズナの言うことを聞いていたらどうなっていたらこうと考えたりはしなかった。わたしとカズナは中学ではクラスもずっと一緒だったのが、高校はカズナは優秀な私立の高校に行き、わたしは近くの商業高校に行き、

「もうちょっとだけ勉強すれば行けるんだからもったいないよ」

と勧めてくれたのに、わたしはお母さんのためというより金銭一般を思って商業高校にした。学校は制服もなくてみんなすごく楽しいらしい。

「わたしは制服着るのだけ嫌だな」

と言うと、

「じゃあ来なよ、行こうよ」

とカズナが言うそれがいつも申し訳なかった。お母さんに言ったりはしなかった。

「授業中にテニスコートでテニスしてるのがいてね、それを窓際だから見てたんだけど、目があって、遠すぎたからそのまま見てたらあっちがさ、知ってるやつかもしれなくてこっちに向かって何か言ってる。授業中だからテニスの声も聞こえなくて口だけがこう、ね、それは見えるけど顔は見えない」

「誰だったの？」

「知らない」

「なんで」

「顔見えないって言ってるじゃん」

「目があつたのに？」

「最近目が悪くなって、すれ違っても気づかないから、あとでメールで言われる」

「それ、関係ないよ」

「そうかなあ、目が悪いのは間違いないけれど」

「まあね、昔からちょっと悪いって言ってたよね。

　　そういえばさ、エビってよく食べるの？」

「えっ？」

　カズナが思わず変な声を出したから、ストローをくわえていたのに笑ってしまった。タイミングよく店員がテーブルにおいたアイスコーヒーを一口飲んで、やっぱり苦い、と顔をしかめた。ミルクも砂糖も出してもらったのに入れなかった。それから、エビがなんだっけ、とようやく思い出したように言った。

「よく食べるの？」

「苦手な人いるよね、見た目が虫みたいで気持ち悪いって、同じクラスの人も言ってた」

「水槽のエビのこと」

「あ、うん、そっち？　これから買いに行く？」

「エビ苦手だし」

「そうだっけ、でもそれって食べる話じゃん」

「いっしょだよ！」

「えー、なにそれ。っていうか、まえ食べてなかった？　グラタンとか」

「ほんとに？」

「うん、食べてた食べてた。いっしょにいたじゃん。目の前で見たよ」

　　そう言いながら笑ったから、そうなのかもしれない。

　でも、重たいずれのようなものが、胃の部分の黒い影で震わせていくのも本当だった。カズナがゆっくりアイスコーヒーを飲むのと合わせて、胃の部分がみるみるうちに大きくなったかと思ったら、最初から大きく、欠けていながらそこをうごめくながか満たしていた。それは小さなエビが、数万匹も前後左右に食べては繁殖していて、もう何十年も前からどろりとした密度のなかで、エビたちは生きているのだった。

　そのうちなんだか自分の胃にも肺にも、エビの何匹かが感染したような予感が生まれた。痒かった。見ると、カズナよりもわたしの方がずっと大きかった。指が何本も入りそうなくらい広くて深いうごめきだった。なのにわたしは少しも気づいていなかったし、ちょっと笑って、視線を遠くにふらつかせながら言葉ごとに軽い相槌をうつだけだった。

　わたしはガラス越しに見える店の前の道路を歩いている、黒と白のチェックの帽子をかぶった若い女の人を見ていた。腕が三本あった。

　ぼんやり目で追っていくと、茶色の耳に半分だけかかったビニールみたいな髪の毛を、左肩の九十度正面にずれて生えた三本目の腕で撫で、その間も残りの二本は揺れるスカートの横を前後しているだけだった。ふたりがひとつの服を着て、ひとつの髪の毛を触っているようだったけれど、それとも少し違った。カズナに言わなくちゃいけない気がした。でも、わたしが間違っているかもしれない不安は残っていたから戸惑うと、あっという間に女の方は歩いて行ってしまった。当たり前だった。姿が見えなくなってからも、わたしはそのまま目で追っていた。

「誰かいた？」

「ん、どうしてそんなこと聞くの？」

　笑いながら、もうひとり三本腕の人がいるかもしれないと思い、探して確かめようとしたけれど、ガラス越しの雑踏のなかには人の種類が多すぎて、そこから一人を見つけるなんて時間がとてもかかると思った。雑踏の誰も驚いていなかったし、わたしもそんなに驚いていなかったし、わざわざ三本目の腕を通すための袖口のあるワンピースを着ていたことを考えれば、これまで会ったことがないだけで、他にも平気な顔

をして歩いているのがいたのかもしれない。それは、いかにもお父さんがわたしに教えてしまいそうなことだった。のら犬を何十匹も空から落とすのが、途中で大粒の雨になり、強風とともに街へと降り注ぎ、みんなが毎日飲んでいる。排水路を流れ、浄水場で洗われ、パイプを通して台所の蛇口から顔を出す。そんな辺鄙な想像を子どものころによくしていたけれど、あれはお父さんのものなのか、それともわたしがお父さんに話してみたことなのか、今ではよくわからなくなってしまった。

すると、さっきまで焦点を当てていなかったガラスの手前の席で、斜めに差し込む日光を眩しく思いながら、ナプキンに文字を書いたり齧ったりしている初老の男の人の左目が、一度も開かなかった。

「それよりさ、胃は大丈夫なの？」

「もう慣れたんだって。まだ痛くないだけかもしれないけど。意外と柔軟みたい」

「じゃあ、一生そうなんだ」

「わかんないよ、あと十秒で痛くなるかもしれない」

わたしはゆっくりとうなずいた。

アイスコーヒーを口に含み、飲み込まずにしばらく舌の上でころころと転がしながら、周りを見わたしてみた。店の中にも店の前の道路にも、人が一切いなくなっていた。

頭上を大きな飛行機が時間通りにさっと通っていき、突然の暗闇が、閑散とした駅前のロータリーを、バスが一台、タクシーが二台だけにして残りは消した。カウンターで注文をたずねる店員も、サンドウィッチを片手にパソコンの画面を見る短髪の会社員も、レジで並ばず家に忘れた財布を探す女の人も、みんな飲んでいたコーヒーや見ていたパソコンといった痕跡を拭いさって、薄っぺらなフィルターをかぶせられていた。

すべてが二重に見えた。カズナがいなくなったわけではなかった。カズナはそこにおいて、カズナの上からいないカズナが重なって座っていた。カズナが iPhone を眺めながらアイスコーヒーのグラスを触り、水滴が爪と指の間に入り込んでいるのと違って、どこにもいないカズナはなにもせずにもその場から素早く顔をあげた。iPhone を眺めていたカズナもこっちを向いた。四つの目がわたしの十五センチ前を見ていた。そこにわたしが座っていた。

「アイスコーヒーをひとつ」

店員が離れていくと、カズナは鞆から借りていた写真集を取り出し、薄汚れた黒のビンと白のビンのふたつ並んでいる写真集の表紙を、わたしはちらちらと、見てはいけないもののように見ていた。カズナは写真集をめくり、自動扉が開いて客が入ってきた。さりげなく額に指先を何本か当ててみると、額より指先のほうが熱すぎて、体温は少しもわからなかった。首筋や耳の後ろを触っても同じで、指先の熱がどんどんわずらわしくなっていくだけだった。わたしがため息をついた。カズナが少し笑ったような気がした。

背中から知らない声が聞こえてきた。

「すいません」

呼ばれたと思って振り向いた。隣の席の同い年くらいの女の子がコーヒーカップを床に落とし、目の前で割れてしまった。しばらくすると二人の店員が駆けつけ、箒で白い破片を集めて女の子に気がついた。

「お怪我はないですか？」

「いいえ、大丈夫です」

わたしは遠くから呟いていた。

女の子の右手の指の爪は二枚しかなかった。人差し指と小指についている赤いネイルをしたきれいな爪の方が、本当はそこにあってはいけない不釣り合いなものようだった。

わたしはなんだか苦しくなって、カズナの方を見ても、カズナは白いTシャツの胸元から下がびしょりと濡れていて、そこから真っ赤な塊がぼとりと床に落ち、砕けて一斉に小さなエビが散らばった。

すごく光っていた。

次の日の朝、いつものように制服を着て家を出てから乗った電車を、学校とは逆の方向へむかって走らせてみた。これまで毎日わたしが電車を待っていたホームを、同じ時間帯の自分が見つめた。反対側のホームだといっても、そんなに大きな違いがあつたりはしないから、もしかしたら反対ではない、学校へ向かうのに正しい側のホームに立っているんじゃないかと、少し不安になつたりもした。

それは電車に乗ってからもそうだった。通学や通勤をしている人たちの顔ぶれはほんの少しだけ違っていたし、風景も少しだけ違った。まったく違うことは車内のどこを探してもほとんど見当たらず、どんなものでも四分の一くらいしか違っているように思わなかった。駅の名前でさえそうだった。一時間ほどで車内に読み上げられた駅名は、海に近いものだと気づいた。子どもころ一度だけそこで降りたことがあつた。友達だつたと思う何人かで海水浴に行った。海岸についたときにはすでに波がまっしろに泡立つくらい激しく、泳ぎはじめて数分で遊泳禁止になつたから、砂浜で浮き輪を投げて遊んでいると、真っ青な水着を着たお婆さんの足にぶつかって、友達が謝つた。天気が悪くなつたわけではなかつた。電車が止まり、扉がしぼむような音とともに開くと、わたしは驚くくらいとっさに電車を降りて、海を見るために歩きはじめてしまった。

冷房で軽く清潔なおおいに変わつていた車内と違って、駅は朝なのに強すぎる日差しが空気をひたすら重くしていた。近くに学校も会社もないから、乗る人は数人いても降りる人はほとんどいない流れのなかを、灰色のジャンパーを着たおじいさんとわたしだけが逆向きに降りていった。おじいさんは駅のベンチに座ると金属の軋む音がした。

わたしは駅のすぐそばの踏切が鳴り終わるのを待って、いつもの半分くらいの歩幅で歩きはじめた。海がどちらにあるのかよくわからなかつた。道は山のある方向から一本だけ駅に伸びていた。かろうじて舗装されている細長い道の両側は、背の高い草がどこまでも途切れなく広がり、もしかしたら駅を覚え間違えていたかもしれないくらい、歩いてても歩いてても海は見えなかつた。子どもころにみんなで海まで歩いた道は、未舗装の砂利道だつたはずだし、どこまで行つても潮風や海のおいしさはなかつたし、そもそも駅から見える風景に見覚えがなかつた。

一面を強く押さえつけられたみたいに草むらが揺らいで、転がる空き缶の音を聞いたカラスが飛びたつた。後ろで包装紙にくるまれたような踏切が鳴り、熱を含んだ髪の毛が乾燥して視界を覆つた。道がゆっくりと右側に傾きながら伸びていくのがわかるころになって、友だちが「お母さんの子どもころにさ、溺れて死んだひとが一度にたくさん出たことがあつたんだって！ ニュースにもなつたよ」

と言つた。

それを聞いたわたしもみんなも、海につく前から疲れてしまった。言つたのはハルかもしれなかつたし、アヤナかもしれなかつた。アヤナは十一歳のときに転校した。ナツはアヤナの転校する数カ月前に転校してきて、八歳の冬からお母さんがいなくなつたからナツではなかつた。わたしはたぶん言わなかつた。海岸を歩きながら横たわる影を探してみたけれど、見つからなかつた。似たようなものは見つけた。すぐに波に吞まれて無くなつた。それを思い出したわたしは、せつかくここまで来たのに海には行けなくなつてしまった。行くべきじゃなかつた。

早歩きで駅まで戻ろうとして、わたしは道の先を見ると、灰色のジャンパーを着たおじいさんが草むらの影からこっちを振り向き、口を開かずに何かをしゃべつた。双眼鏡で海を覗くのが日課だつた。

目が合い、まばたきをする間も互に見続け、わたしが駅へと駆け出した瞬間に、こっちを見ながら後ろ

向きにすたすたと、海に向かって走りはじめた。

双眼鏡を握ったまま腕を振るのが、一步下がる度に大きくなっていき、歩幅も広がり、年寄りだからといって息がきれたりすることもなく、三百メートルくらいを走った。わたしからどんどん離れて、駅からも電車からも離れて、海岸が見えはじめたころにようやく、乾いた足が粉を吹きながら崩れてしまい、破けた皮膚から血が出そうにないのに出て地面についた。それでもおじいさんは走ろうとしたフォームが、いつもそうやっているみたいにきれいだった。

わたしは電車に乗って家に帰るまでを、瞼とイヤホンで塞いでいた。駅から家までの道のりも、歩道の中心に焦点を狭め続けた。イヤホンをして、寝息をたてても、車内アナウンスをわたしは聞いていた。歩道の先から自転車がふいにわたしの前をゆっくりと通った。立ち漕ぎをしていた。

お母さんが仕事に行っていて誰もいないアパートのわたしの部屋は、唯一の安全なんだと思った。ずっと下を向いていたら、アパートを通り過ぎて、次の曲がり角になっても気づかなかった。点検中のエレベーターではなくて、階段を使って四階まで上がった。扉の上を猫が今起きたみたいな格好で歩いてきて、男の子が

「顔がすごく小さい！」

と叫んだ。下を見ると、猫も男の子も遠くて、わたしには同じようにしか見えなかった。

救急車がアパートの裏から聞こえていた。

鍵は玄関の扉を開けると、最初からあいていた。めったにないことだった。靴を脱ぎながら玄関の電気をつけて、リビングの電気もつけたら、洗面所と自分の部屋の電気をつける前に、急いで全部の窓を開けなくちゃいけないくらい部屋が生臭かった。息を止めてしまうほどではなかった。お母さんが昨日、腐った卵をキッチンの生ゴミ入れに捨てた。賞味期限をよく切らしていた。窓を開けてから、風の通りが悪いと知った。扇風機をつけた。カーテンを揺らしながら犬の笑うような声がした。窓を閉めると、三秒くらいで止まった。

制服をまず脱ぐべきだった。床に脱ぎ捨てた。ぐっしよりと重かった。いつもよりきつく感じていたのは、汗のせいだと思った。子どものころ、汗をかくことがほとんどなかった。みんな汗まみれだった。わたしはベッドに寝転がった。まわりつく熱で気持ちが悪かった。目を閉じていると、いつ玄関の呼び鈴が鳴るか、電話が鳴るか、わからないこわさに耐える必要があった。

制服をハンガーにかけて、下着を洗った。洗剤がなかった。洗濯機にハンドソープを二十回出して洗濯した。すごくうるさく部屋中に鳴りだした洗濯機といっしょに、わたしは玄関の扉や窓の鍵が念入りにしまっているかどうか、何度も繰り返し指で押して確かめた。人差し指の第二関節あたりの皮膚が真っ赤になるまでわかってはいけなかった。

家中を六往復して疲れてベッドで眠った。洗濯機が静まるほんの少しのあいだに、隣の壁を硬いもので誰かが突ついた。二回鳴った。二回目の方が鈍かった。耳を澄ますと、すぐに洗濯機がまた動いて脱水をはじめた。がたがたと回転した。洗面所の歯ブラシが床に落ちるんじゃないかと心配になった。わたしの歯ブラシは緑色だった。ますます回転の激しさが増した。そして終わった。エアコンをつけるのを忘れていたから、途切れ途切れにしか眠れなかったけれど、それを我慢すればすべてがうまくいくはずだったから、じっとしていた。

昼過ぎにメールでハルから心配された。

「風邪らしいけど、大丈夫？」

「え？ 誰が言ったの？」

「先生だけ」

わたしは休むことを学校に電話していなかった。すっかり忘れていたし、たまに無断欠席する男子がい

るから、なんとかなるんじゃないかと思っていた。時計を見ると、ハルと購買でシナモンラスクを買っている時間だった。百六十円だった。いつもわたしと二人で分けていた。今日は一人だった。砂糖のたくさんついたラスクを齧りながら、先生も言っていたし、わたしは体が弱いから夏風邪だろうとハルが思った。今日は数学の先生の機嫌が悪くて、二時間目の授業で怒鳴ってばかりいた。宿題を忘れてしまった。地震の避難訓練がこれからあった。今日休むのはハルにとって羨ましいことだったから、もしよかったら、ハルはわたしのお見舞いに行くつもりだった。

「いいよ、元気だから。また明日」

午後の授業は一時半から始まった。iPhoneの画面を触る指がぬるついた。避難訓練のときには、廊下の先で地震の警報機がジリジリと鳴って、みんなが笑った。ハルも笑った。エアコンをつけると、首と肩のあいだくらいが汗で冷えてしまって身震いした。頭痛も強くした。昨日までがぜんぶ、ここ数分の夢かもしれない。わたしは夏風邪によくなった。ゆっくりと立ち上がり、壁伝いに歩きながら、シャワーをしたけれど、窓は開けなかったし、下着を干すときも風邪の治し方を考えるよう努力した。お母さんが帰った。その一時間前には眠っていた。

わたしがアルバイトに務めると、もう夏休みになっていた。

ファーストフード店で週に三回働きはじめることにした。古い動物園の奥にある汚れたコンセントみたいな店で、平日の放課後や、休日の朝から働き、夕方くらいに仕事が終わると、帰りながら一檻ずつ動物を写真で撮った。一日一匹でもそんなに大きくない動物園だから、すぐに一周してしまい、撮り忘れていたフラミンゴを撮った次の日には、また逆向きで一周をはじめた。全部でたしか三周くらいした。四周だったかもしれない。動物園という名前のフォルダに貯めていった。いつか一度に百枚くらいを見せたら、カズナも驚くだろうと思ったのに、結局言わなかった。

アルバイトの初日に、三歳年下かと思ったら同い年だったとわたしに言った先輩が教えてくれたレジを打っていると、落ちつけてよかった。ずっと打っていたかった。でもそんなことで生きてはいけないことも知っていた。ゴミ箱を片づけていると、飲み終わった紙コップを投げられたのが、肩に当たって制服が汚れた。オレンジジュースだった。ごめんなさい、と言って謝ると、大きい子どもが店の外に走って行った。両親がすごく小さかった。足しか見えなかった。

「よくあることじゃん」

先輩が言った。

「そうなんですか」

とわたしは言った。

小学生くらいの男の子が、動物園で自分より厚みのあるスーツケースを持たされていた。車輪がうるさかった。大繁盛の動物園では、みんなが道をあけ、遠くから見るとなにかペンギンの引越しやうさぎの散歩をやっているみたいだったから、人がどんどん集まり、男の子だとわかると、また離れて次の人が覗き込んだ。両親のような男の人と女の人もときどき立ち止まって振り向いていた。男の子が笑っていた。遠くから旅行に来たのかと思った。

「そうそう、あのね、混んだ電車のなかでスーツケース抱えて邪魔だなーって人は、ほとんど旅行者だけど、全部が旅行のためのスーツケースじゃなくて、スーツケースはたくさんの物が楽に運べたりするから、わたしの友達のおばさんはバーゲンとかにスーツケースを持って行って、絶対着ないくらいたくさん買った服をつめて帰るの。入り切らないけれど。だからスーツケースが旅行者ってわけじゃないの」

「知らなかった」

「でしょ？ わたしき、いつもスーツケースで旅行するときに空港へ行ったり帰ったりする電車とかバスのなかでみんなから、『あいつが旅行に行くのに俺は会社に行くんだよな』とか、『昨日の夜は旅行だから楽し

みで眠れなかったんだらうな』

とか思われてるってすごくわかるし、わたしも思うから嫌なんだけど、でもスーツケースで生活したら楽しいかもなっていうふうにも思うんだよね。小学生のころからずっと。遊園地の近くに住んでる人が、公園みたいに使っちゃうって話があるじゃない、『今日はあそこのホットケーキを食べましょう、昼ごはんだけ』って。それみたいにさ、学校もスーツケースで行って、廊下をころころ引っ張って歩くの。階段はがんばって背中に背負って、汗だくになりながら、『わたし散歩してるな！ 外だな！』って感じるのがいいんだけど、どう？」

「たぶん、一度やったことならあります」

「学校行ったの？」

「あ、タイヤのついた鞆を廊下で運んだだけです。運べって言われて、階段を上ったり。スーツケースは持ってないです」

「じゃあそれは？」

「これ、スーツケースじゃないです」

「スーツケースほしいなあ」

先輩はわたしより身長が高くないけれど、なんだか高いように感じてしまっていたし、先輩もそう感じているようだったから、先輩と呼んでいた。

「名前はなんなんですか？」

「〇×だよ」

「本名はなんなんですか？」

「本名だって！」

そう言って笑った。誕生日はわたしの方が二ヶ月半くらい遅くて、わたしは十七歳だった。先輩は十六歳のときにここで働きはじめたときから、みんなに十八歳と言っていたし、今は十九歳と言っているけれど、それは冗談で、本当は十七歳だった。

先輩は幼稚園のころから動物園に行っていた。門をくぐってすぐ左のところに白塗りの焼却炉みたいな建物があって、そこはヘビやワニやカメやオオサンショウオがいる爬虫類のための建物で、出口の近くになると、フクロウやコウモリも室内が暗いからいた。本当に静かだった。先輩の走る足音だけがガラスに響いていて、フクロウが真っ赤な目で暗闇からそれを見つめた。今はもう爬虫類が好きでも嫌いでもなかったけれど、家族といっしょに来たときは、まず最初にその建物に入って爬虫類を見た。ヘビもワニもカメもオオサンショウオもぴくりとも動かないから、兄と二人で動くまで眺めて、動いたら

「歩いた！」

と言った。本当に歩くことはなかった。ワニは泳いだし、フクロウは飛んだ。コウモリは探しても一度も見たことがなかった。

先輩は幼稚園の遠足で動物園に来た。

「じゃあみんな、きちんとはぐれずについて来てね！」

と先生が言うのに、最初に爬虫類の建物へ行かないのがどうしてかわからなかった。建物がなくなったわけじゃなくて、新しくも古くもならず、先輩の知っているままそこにあった。先生はまるでそんな建物なんてどこにも見えないように動物園の奥へ進もうとしたから、

「どうして？」

と聞いた。先生は

「最後にね」

と言った。

「動物園はあなたのためになんか、消えたり動いたりしないから」

先輩は最後に爬虫類の建物を見たことなんてなかった。三人の先生がみんなを誘導し、先輩と一人の先生が、入園してすぐの場所で、先輩が爬虫類の建物を諦めるまでじっと待っていた。ずっと泣いていた。それからどうなったのかを、先輩は覚えていなかった。象の檻の前の広場で、みんなとお弁当を食べたのは覚えていた。卒園アルバムに写真もあった。すごく嬉しそうに笑っていた。

写真の場所には三年後にファーストフード店ができた。十年も経たないうちに先輩が働きはじめた。十九歳になったときやめた。すっかり爬虫類の建物に行っていなかった。アルバイトをやめた日、久しぶりに爬虫類の建物へ行った。気づくともう出口の近くにいた。遠くの方に夕方の動物園の客たちが大勢帰ろうとしていて、フクロウが短く鳴いても小さくさえ聞こえなかった。まだ帰りたくなかったから、振り向いて、明かりを背に奥へと走って行った。

曲がり角を曲がれば、途端にコの字形の通路が見えた。出口から入口へ進んでいた。いつもの下り坂ではなく上り坂になっている通路は、いつもと変わらないくすんだ緑色をしていて、周囲をヘビやオオサンショウオやカメが住んでいる水槽が並んでいた。通路に囲われた中央には、大きなワニの水槽が二つあった。でもそれはもう違っていて、今ではワニの水槽のうちの一つは、ワニじゃなくて馬くらい大きなカバが住んでいた。水槽がカバには少し小さそうだった。餌としていっしょにひまわりが生えていた。ひまわりはニワトリより安く手に入った。

久しぶりだから、すごく目を大きくして笑ってしまった。息を切らしながら、小部屋とその手前に掲示されている説明を見比べると、一つも間違っていなかった。動物園だから当たり前だし、やっぱり半年に一度くらいは来るべきなんだと思った。そのころは週に三日働いていた。働きはじめたすぐには三日だったけれど、一年経つと週に二日になり、アルバイトをやめる直前の三ヶ月も、週に三日働かないといけなかった。お母さんがまだ仕事をしてなかった幼稚園のころは、二ヶ月に一度行っていた。でも順番を逆に見て行くのは今日が初めてだった。これだと懐かしさが嘘かもしれないと思った。カメがいてヘビがいて、ワニがいてオオサンショウオがいる先に、フクロウとコウモリがいるその順番で走り抜けなといけなかった。閉園時間も迫っていたから、急いで説明を読み、入り口までたどりつくと、また最初からカメを見てヘビを見てワニとカバを見た。それから兄が

「オオサンショウオが歩いた！」

と言った。見ると、オオサンショウオが一步だけ歩いていた。

涙が出そうになった。

歩道に五十本くらいの消火器が三列で並んでいた。使い終わったものかもしれなかった。歩道が広いからほとんどの人は通れたけれど、狭かったら通れなかった。歩道に面する建物から、青いはっぴを着た男の人が出てきて、消火器を二本増やした。文房具店だったのに使ったことがなかった。きれいだったから、iPhoneで写真を撮って、Twitterにアップした。先輩は今住んでいる街へ引っ越す前に住んでいたマンションで、お父さんが廊下に金魚を飼っていた。おじいちゃんとおばあちゃんの家に泊まって、夏祭りに行ったとき、お母さんに金魚すくいをしてもいいよと言われたけれど、あまりしなくなかった。プラスチックの容器に子どもたちが集まっていた。いところ二人ですくった。

横長の容器に、水面からあふれそうなくらいたくさん金魚がいて、ほとんど泳げていなかった。どれをすくうか考えていると、まんなかに真っ黒な出目金が見え隠れしていた。ジャムのビンくらい大きくて、本当に死んでいるようだった。男の子はみんなそれをすくおうとがんばっていた。他の普通の金魚が多すぎるから、無駄な努力だった。一人三匹はすくった。いところは八匹すくった。ぜんぶくれた。そのうちの二匹が、マンションの廊下におかれた水槽で、お父さんに引っ越すまで育てられた。他の七匹はみんな、エビのような小さい寄生虫に殺されて、一匹が生き残った。

四年くらい経ったとき、引っ越し先にまで持っていくつもりはなかった。お母さんが「川に帰してあげなくちゃね」

と言った。お父さんも

「そうだね」

と言った。今では金魚すくいですくった大きさの八倍にはなっていて、金魚用の水槽がかわいそうに見えるようになった。先輩は緊張した。自分の住む場所が、今とは違う極端に広々とした建物に変わり、そこから一生出られないような気がした。その日の昼にはもう、お父さんは車で山奥に行った。まだまだ先に行くのかと思ったら、急に止まって

「ここにしよう、ここがいい」

と言った。

「川なんてどこにもないよ」

と言うと、

「ほら、こっちこっち」

と手を引っ張り、赤い塗装の半分くらい錆びついた橋から、下を流れるすごく細い川を見るように言った。岩が尖って水面にぶつかったり、裂かれたりしていた。お父さんは持ってきた水槽をひっくり返そうとして手を滑らせ、水槽ごと金魚は川に帰った。

「今日ってお祭りでしたっけ？」

と聞いてみた。はっぴを着た男の人が

「いや、来月とかじゃないの」

と言った。去年までを考えてみれば、たぶん再来週くらいだろうな、と思った。男の人はまた店に戻り、消火器を二本運んできてため息をついた。暑かった。消火器がどんどん熱せられて、アスファルトの表面と同じ温度になった。

すごい猫背で登山家の格好をした七十歳くらいのおじいさんが、隣を歩く五十歳くらいのおじいさんと話しながら、白い毛長の犬をちらりと見ると、斜めに激しく飛び上がった。散歩をしているおばさんが、首

にくくりつけてある赤い紐を必死に引っ張った。学校帰りの夏服の男子高校生が、四人笑った。二人は見
てなかった。笑っただけで、なにも犬について言わなかった。

先輩は閉店してもう五年にはなるクリーニング店のガラス扉に向かって、着ていた赤と灰色のパーカー
のずれをなおした。風が強かった。その日は夜から雷になったけれど、九時までにはほとんどおさまって、
月が半分見えた。そのせいで、かぶっていた白と黒のチェックの帽子の縁が何度もめくれ上がり、飛んで
行きそうになったから、ずっと左手で押さえていた。帽子は脱ぎたくなかった。

電車に乗って街中の駅まで行くと、隣に女の子が座った。八歳くらいだと思った。扉が開いて乗ってき
たその一瞬しか全身は見られずに、あとは正面のガラスにぼんやりと映る姿しか見られなかったけれど、左
右の反転した黒いTシャツにジーパンを履いた、セミショートの幼い顔立ちだった。目が丸かった。鞆を
持っていない片手に一冊の本を持っていた。漫画だった。次の駅を確認するふりをしてきよろきよろと車
内を見まわしてみても、女の子の親や友達のような人はいなくて、大学生のカップルが二組と、ベビーカー
に幼稚園の年長組くらいの大きさの、眼鏡をかけた女の子を乗せた母親がいた。母親は、お母さんと同じ
くらいの歳だった。

女の子は座ってすぐに漫画を読みながら、ジーパンのポケットに入っていたマスクを取り出して片手で
つけた。漫画は、どのページも色が黒くて澱んでいるホラー漫画だった。自分の知っている漫画だとい
うことを、二つの駅を通過してからようやく思い出した。中学二年のときに、テレビでやっていたホラー映
画が怖かったと言ったら、友達が
「そんなのよりもっとやばいよ！」

と名前を教えてくれた。貸してはくれなかった。友達はいとこの家の本棚においてあるその漫画が、背
表紙だけですごく怖く、でも気になったから恐る恐る手に取って少し読むと、最初の数ページで、キッチン
の流しにおいてあるコップの中にたまった水の底から女がこっちを睨んでいた。
「え？」

と思いページをめくろうとしたら、いとこの階段を上がる音が聞こえて、すぐに本棚に漫画を戻した。そ
れ以降は一度も読んでいないけれど、名前はしっかり覚えてるよ！ と友達はわざわざ紙に書いて渡して
くれた。大切に持って帰り、机の引き出しに入れた。小学生のときにもらった星の砂や、化学の本に付録で
ついていた石ころのような恐竜の化石といっしょだった。とっくの昔になんという名前だったか忘れてし
まったけれど、コップの底の女の子の話は今でもずっと覚えていて、それが女の子の読んでいる漫画にあっ
た。少し斜視気味の目が女の子を見つめていた。誇らしくなってきた。友達に電話をしたかったけれど、三年
生のときに絶交した。

女の子はじっと動かないでいるのが怖いのか、ページをめくる度に頭を前後に揺らし、もっと怖いとき
には、全身を座席にどすんどすんと押しつけながら読む振動が、ほとんど遅れなく伝わってきた。電車が落
ちついて走ることなんてないから、絶えず先輩も女の子もぐらぐら揺れていた。駅に止まる前にはブレー
キで大きく二人は揺れた。停止すると止まった。漫画は目や口を極端に描いて驚かすだけの、高校生には
そんなに怖くない漫画だったのに、少し怖くなってしまった。

線路が高架橋を渡ってゆっくり右に傾くと、三両編成の電車の連結部分が、軋みながら伸び縮みした。前
の車両の窓から見える風景が、先輩の乗っている車両の窓から見える風景よりも先に進んでいた。車両ひ
とつ分よりもずっと建物が近くにあって、看板の文字も、インクの細かな擦れまで拡大して見えた。

先輩が降りる街中の百貨店と併設してある駅の一つ前の駅で、電車が扉を開けた拍子に、女の子が驚いた
ように顔を上げ、漫画を閉じて慌てて電車を降りた。母親とベビーカーも降りた。その代わりに赤いリュッ
クサックの男の人が乗った。一人だけ駅に立って左右を見まわす女の子は、黒いハイヒールにピアスをし
ていて、セミショートの小柄で、マスクを外し、八歳にはとても見えない十四歳くらいだった。

赤いリュックサックは、本当は入れてはいけないんじゃないかと思うくらい重たい物が入っているらしく、底が沈み、肩紐が千切れそうになっていた。男の人も、電車に乗ってきたそのままの姿勢で扉の近くに立って、座ることもつり革を握ることもせず、直立不動で赤いリュックサックの重みに耐えなければいけなかった。青いビニール製の上着のファスナーを、下から上まできっちりしめていた。頬骨が皮膚を押し上げ、頭から額にかけての上半分が、頬から顎にかけての下半分よりも低いというか後ろだった。そんな暑そうな格好をしていても、汗は顔には一滴も流れていなくて、赤いリュックサックだけが電車の発進で左右に揺れた。

男の人はこっちを見ずに、窓の外の電線を見ていた。電線が上下に往復した。電線が揺れたのではなくて、電車が走っていた。だんだん速くなった。三羽のカラスが電線にとまろうとするのが一瞬で過ぎていった。電車に向かってまったく同時に三羽が鳴いたのを、線路の両脇のアパートや住宅に残った電車の反響がこすり消してしまった。

赤いリュックサックは絶対に見覚えがあった。どこかで出会ったはずなのに、男の人の名前を思い出すことができなかった。先輩が次の駅で降りた。男の人も降りた。改札を抜けても後ろには赤いリュックサックがついてきていて、どれだけ歩いても離れることがなかった。人ごみの中でも目立ったし、身長がすごく高くて、大股でゆっくりと歩いていた。街にいる他の誰も赤いリュックサックを気にとめたりしなかった。先輩もほとんど気にしていなかった。電車を見たことさえもすっかり忘れてしまっていた。

信号が赤になって、スクランブル交差点を車が何十台も走った。バスも白バイもクレーン車もいた。先輩は赤いリュックサックの前に立ち、片側三車線の道路を挟んで向かい側の歩道で、信号が青になるのを待っていたわたしを、赤いリュックサックがじっと見つめた。たしか駅前でハルと待ち合わせるつもりだった。冗談で言ったカズナについての話を、ハルは突然謝った。

「まさか信じるとは思わなかったからさ、スパゲティ奢るよ！」

わたしは、最近できたデパートの中の手頃なイタリア料理店に行こうと思った。

デパートは十五歳のとき、百貨店のすぐそばの空き地に立てられた。高校の友達みんな新しいし、綺麗だし、若者向けで楽しいデパートには行くのに、百貨店に行くことはほとんどなかった。今にも潰れそうな百貨店を経営している鉄道会社の人たちは、電車がなくなると同じように、百貨店もなくなると信じているとお母さんが言った。わたしも潰れないと思った。それから七年して建物は変わらずに、百貨店でなくてショッピングセンターになった。電車は同じ線路を走り続けた。わたしは牡蠣のトマトソーススパゲティが食べたくて、ハルはシーフードリゾットを別の友達とその店で食べたことがあった。おいしかった。そのあと二人でカラオケに行きたかった。

わたしは十時に寝て六時に起きるようにしていたのに、少しだけ寝不足だった。両目を交互に擦って、車がひっきりなしに右へ左へと通過していく先に見え隠れする横一列に並んだ信号待ちの歩行者の中に、顔も服装もよく見えないけれど間違いなくカズナがいた。

「あ、いるじゃん」

と声に出して、手を振りそうになった。なにか赤いものが後ろにいると思ったら、カズナは赤いリュックサックをしていて、そんな赤いリュックサックを見たのは初めてのことだった。こっちに気づいているふうではなかったけれど、カズナの視線がこっちに向いていた。パトカーが目の前を二台連なって通り過ぎ、どちらもサイレンを鳴らしていないのにランプだけが赤く光っていた。咄嗟に iPhone を取り出した。左耳に当ててしばらく待つと、いつものカズナの声がした。

「誰ですか？」

「え、もしもし？」

声は iPhone からしっかり出ていたのに、うまくわたしには届かなかった。声が逆の耳から漏れているよ

うな気がした。右耳を手のひらで押さえて蓋をし、うつむき加減になりながら

「もしもし？」

と何度も言った。カズナは同じ速さで

「誰ですか？」

と何度も言った。

どうして電話なんかしたんだろうと思った。もっと静かな、誰も入ってこない部屋で電話したかった。道路の向こう側のカズナを見ると、iPhoneで電話をしていた。やっぱりこっちに気づいているようではなかった。電話の先から街のざわめきが聞こえなかった。

「カズナだよな？」

「あ、どうしたの？」

「今ちょうど信号待っててさ、目の前にいるんだよね」

信号が青になった。銀色と黒の車が競うように赤信号を走った。黒の方が遅かった。それを合図に歩行者が一斉にスクランブル交差点を渡りはじめた。わたしは青信号がうるさかったから、一層うつむいて、カズナの声を逃さないように歩いた。でもカズナはわたしの目の前にもいるはずで、顔を上げると赤いリュックサックが近づいていた。追われるみたいに速歩きだった。

「目の前って、外？」

カズナはイスから立ち上がり、急いでカーテンを開けて家の前を見ると、なにか動くものがあった。

「いたいた！」

と言ったら、転がってきたゴミ袋だった。

「え、いた？」

風がすごく強いのに、そこまで勢いよく転がらなかった。カズナの後ろで机の上においたままのヘッドホンから音楽が流れていた。青いヘッドホンだった。家の外の風が鳴る音はそれより鋭く大きくて、音楽は流れていないようだった。

「どこにいる？」

先輩が帽子を両手で押さえなくちゃいけないくらいの風が一瞬だけ吹いて、目を閉じると、前から歩いてくるスーツ姿の男の人とぶつかった。目を閉じていた先輩は、誰とぶつかったかわからなくて謝った。赤いリュックサックはみるみるうちに先へと進み、わたしの目にもはっきり映りはじめたら、まるで似ても似つかない人が赤いリュックサックを背負っていた。わたしと目がしっかり合いながら、iPhoneに向かって喋った。

「どこかで待ち合わせてたっけ？」

「いやそうじゃないんだけどね、街にいるんだけどね、カズナって赤いリュックサック持ってたっけ？」

「持ってるよ、小学生のころだけ」

「そっか」

スクランブル交差点の混雑の中で、カズナとわたしはすれ違った。はっきりと別の顔と背丈をしていた。わたしもそうだし、カズナもそうだった。二人は少しだけ歩みを緩めると、互いを念入りに上から下まで確認し、後ろから同じ速さのままで歩いてくる人たちが、わたしの背中にぶつかってわたしを見れば、ぼんやり上の方を見ていた。その先には街頭ビジョンも商品広告もなかった。夏だった。八月だった。スクランブル交差点でふいに歩みを緩めたのはわたしだけで、誰もそんな迷惑なことはしなかった。

「君はシャライだろう？」

赤いリュックサックが言った。

「え？」

わたしにはなんのことかわからなかった。

「シャライだろう？」

「誰ですか」

「シャライだろう？」

「違います！

知りません、本当に知らないんです」

わたしは立ち止まって、必死に説明しようとした。必死にわかろうとした。先輩が横断歩道を渡り終えて、道沿いの喫茶店に入った。先輩はわたしのすぐ側を通ったけれど、まだそのころはわたしがアルバイトをはじめる前だったから、わたしのことなんて知らなかったし、わたしも知らなかった。ハルの乗った電車が駅に到着し、その一時間前の同じ電車にわたしが乗っていた。朝早くに家を出て、ハルと会う前に本屋に行ったけれど、欲しい本はどこを探しても見つからなかった。カエルの図鑑だった。恐竜の化石の図鑑を代わりに見た。買わなかった。赤いリュックサックが右手を差し出して言った。

「これをあげなくちゃいけない」

「なんですか、これ」

「公園だよ」

するとわたしのいた場所を、六本の車列が次々に拭っていった。信号は青から赤に、赤から青に変わって、どこにも赤いリュックサックはいなかった。カズナは電話を切った。ハルが電話をしても通話中だった。

目覚めたから朝だと思ったのに、室内はとても暗く、オレンジ色の薄明かりの豆電球が灯されているだけの夜中だった。見覚えのある部屋だけれど、わたしの部屋ではなくて、それはわたしの子どものころに住んでいた部屋で、子どものわたしが手足の細長い大きなカエルのぬいぐるみといっしょに眠っていた。古い倉庫のようなにおいがした。埃がつもっていた。

扉が音もなくほんの少しだけ開いた。扉の外も室内と同じくらい暗かったから、光が差し込んだり、わたしが目覚めたりすることはなかった。お父さんが入ってきた。ベッドの横に膝をつき、わたしをじっと見つめながら、叫ぶように話しはじめた。顔は影に隠れて見えなかったし、声もあまりに尖りすぎてうまく聞き取れなくても、わたしに話していないように話そうとしているのはすぐにわかった。独り言でも嘆きでもなかった。生まれてからずっと親しくしてもらった誰かに聞こえるよう話していた。

わたしはお父さんに気づいてもらえていなくても
「わたしだよ？」

なんて絶対に言わなかったし、言うとならばわたしが死ぬときだと思った。でも、もうとっくの前に死んで今ここにいるのかもしれない。そうだとしたら言ってもいいのかもしれないけれど、言うとお父さんは悲しむから

「わたしだよ？」

なんて絶対に言わなかった。

お父さんは身動き一つせずに話し続けた。一時間ほどたって部屋を出るときも、叫ぶような話し声は壁や机に反響し、表面だけでなく内側や中心、裏側にある隣の部屋や室外機まで震わせているままだった。それが終わるまで一度も寝返りをうたなかった。

室外機が空白に耐えきれず、へこんだ音をたてるのがあまりに大きすぎて、聞き間違えたのかと思った。実際に誰も驚いたり振り向いたりはしなかった。朝になってもカーテンはしめられたままで、焦げ茶色の遮光カーテンだから、縁の淡く透けて光っている明かりだけが、窓際のベッドを照らしていた。

なるべく音をたてないようにそっと扉を開き、室内に入って、ベッドとは反対側の壁に体の左半分を押しつけながら、体操座りで隠れた。ベットには誰かが眠っていた。

隣の部屋では今まで見てきた中で一番ひどい夢を見た。行ったことのない地下通路の中華料理店を見て
「懐かしいな、だいぶ古くなったな」

と思ったわたしは確かに十七歳だったのに、今では六歳くらいになってしまった。店前で白いワンピースを着た女の人が、朽ちかけた木製のイスに座り、ビニール傘の骨を一本ずつパキンパキンと折っていた。そこから黄色い液体が小さな玉となって湧き出て、白いワンピースを汚した。お父さんが

「ほら、はやくはやく」

と急かすのが怖くて、自分の部屋に逃げこんだ。電気もつけずにもたれかかった壁を通して、廊下の音や玄関の音が耳に入った。お父さんが

「行ってきます」

と言うと、妹が

「行ってらっしゃい」

と言った。妹はこのまえ十七歳になった。妹の制服が黄色い液体で汚れてしまった。妹なんていたことがなかった。十七歳になったばかりのわたしだった。

「どうして平気で見せられるの？ 最低だよな。」

もういいけれど」

ベッドで眠ったままのお母さんが言った。今ではかけていない眼鏡をかけていた。眼鏡をかけたまま眠ったことがなかった。わたしは必死に壁へ体をすりつけながら、頭を伏せて隠れた。はやく学校へ行かないといけなかった。

だからそこは確かに、子どものころ住んでいた部屋だった。

四歳の誕生日に買ってもらったカエルのぬいぐるみは、分厚い卵のような形をした胴体が、まだ小さいわたしと同じくらいの大きさだった。細長くぶらぶらとした手足を伸ばせばわたしよりずいぶん大きくなって、カエルは毎晩わたしに抱きついて眠っているようだった。目はプラスチックの黒を赤が縁取っていた。この前ひさしぶりに押入れから見つけると、歯型がたくさんついていて、左目だけが傷で真っ白に濁ってしまった。叩けば埃も舞い上がりそうだったから、ベッドにおいてまた一緒に眠るようなことはなかった。でも今は横でカエルが眠っていた。もう眠気はすっかり取れていたのに、朝になったわけじゃなかった。部屋の明かりはついていて、カーテンの向こうは真っ暗だった。

起きあがって見てみると、八歳くらいのころの部屋だと思った。勉強机の上には、赤色の揃いかかっているルービックキューブと、ものすごく古い人生ゲームが広げられ、丸みを帯びたオレンジ色のデスクランプも灯されていた。デスクランプや勉強机は今でも同じものを使っていたけれど、ルービックキューブは引っ越しのときになくしてしまった。人生ゲームは捨てられた。どちらもお母さんの子どものころに、おばあちゃんが誕生日プレゼントであげたもので、わたしはすっかり忘れていたくらいおもしろくもなんともなかったのに、お母さんは

「ほら、いっしょにやろう？」

と、雨が降るたび二人で人生ゲームをやりたかった。お母さんはわたしのお金の管理もした。ルーレットも回した。だからわたしは一度も負けたことがなかった。

気になって手のひらを見ると、柔らかい八歳の手のひらじゃなかった。かけ布団をめくり、足の長さを指で測れば、十七歳の長さが十分にあった。右足の膝には皮膚の濃い茶色になった怪我の跡もあったし、それは十三歳のころにできたものだった。学校の遠足で行った海岸の岩場で、誰かに後ろから押されてころんだら皮膚が抉れた。全身をごつごつとした岩にぶつけて、すごく痛くて、目の前で青黒いフナムシが一斉に岩と岩の隙間へと逃げて行った。何にそんなに驚いているのかわからなかった。でもその動きだけですごかったし、こうやって世界は巡っていくんだな、と思った。

顔を上げて振り向くと、すぐ後ろには誰もいなくても、少し離れたところにはみんながいて、わたしには気づかず、足元ばかり気にしながら、海とは逆方向へとスキップするように帰っていった。陸地だった。その中に、ハルを見つけた。ハルは三ヶ月後の運動会の前日に、二人で帰っていたら

「カズナのことはどう思ってるの？」

と聞いた。わたしは、あのとき背中を押したのはハルだと思った。

「別に、どうして？」

何気ない様子で答えていた。

「理由とか、そういうのないんだけどね」

ハルも笑って言っていた。その通りに、ハルとわたしとカズナは、何事も無く中学校の三年間を親友として過ごした。毎日のようにいっしょに帰り、いっしょに出かけ、卒業式の日もいっしょに写真を撮ったのが三人の携帯電話に残っていた。

ハルがメールでカズナに告白したことを、わたしは知ろうとしなかった。知ってもきっと喜んだりしなかった。

痺れが収まるのを待って、全身をくまなく確認してみると、膝から流れた血液が岩の側面を伝って海水

を濁し、塩分と混ざった。急いで拭かなくちゃいけないと思ったけれど、拭くものはなかった。岩と岩の隙間に手が届くほど、わたしはもう小さくもなかった。ゆっくりと起き上がった。岩場には誰も残っていなかった。

じゃあなんで十七歳のわたしがここにいるんだろう、と思った。わたしは八歳でも、十歳でも、十二歳でもなかった。

黒い漆塗りに見せかけた化粧合板のダンスの上には、ひまわりの絵が飾られていた。九歳の夏休みに宿題でポスターや花の絵を描かなければいけなかった。その横に、赤いランドセルがたてかけられていた。使い古されたランドセルは、小学校の高学年になったみんなは、ランドセルがかっこ悪いからリュックサックにしてしまい、ランドセルはどこにいったのか、今では誰も覚えていなかった。少なくとも十一歳のころにはまだダンスの上にあった。

机の横には赤いリュックサックがかけられていた。夏には小学生のころ、日差しにとっても弱かったから、わたしだけが被って通学していた麦わら帽子も、机の横にかかっていた。みんなは麦わら帽子と赤いリュックサックを見れば、顔を見なくてもすぐにわたしだとわかった。中学生になると恥ずかしくてやめた。カズナはずっとわたしの麦わら帽子を知らなかったし、わたしが引っ越したことがあるのも、やっぱり知らなかった。

中学生になった春に、同じ街の別の家に引っ越した。

扉が勢いよく開くと、先輩にそっくりな看護師の女の人が、粘り気のある歩き方で入ってきた。わたしはまだ先輩を知らなかったから気づかなかった。まっすぐ勉強机の方に近づき、広げられたままの人生ゲームのルーレットを回した。からからとした音が止むと、駒をいくつか進めて、またルーレットを回すのを三回繰り返した。そんなことを見るのは初めてだった。最初は戸惑ったけれど、すぐにわたしは言った。

「入院ですか？」

「いいえ、大丈夫です。覚えてないんですね」

看護師の女の人が言った声まで、先輩にそっくりだった。

「倒れましたか、わたし」

「倒れてなんかいませんよ。眠ってたじゃないですか。本当になにも覚えてないんですね」

看護師の女の方は心の底から悲しんだ。先輩なら泣いていた。

「え、ごめんなさい」

「いいんですよ、そうやって迷惑をかけることはよくあるから」

看護師の女の方は、ルーレットを全部で十回まわすと、人生ゲームをやめて扉の方を向き、また粘っこく歩いてドアノブに手をかけた。でも、すっかり忘れてしまっていたことを思い出して、ダンスの中から下着を何枚か掴み取ると、わたしを一度も見ることなく部屋を出て行った。人生ゲームの駒はまだ半分も進んでいなかった。わたしがゴールするまでルーレットを回すと、あっというまに終わった。

一時間くらいを眠ろうとして、眠れずに過ごした。わたしは八歳の夏に着ていたパジャマと同じ模様、同じ色、同じ形のパジャマを着ていた。白のシマウマの半袖。まったく同じ匂いがした。しばらく腕や膝や胸の、いろんな部分に顔を押しつけずくまっていると、ポケットにずっと入っているなにかに気づき、見てみると公園だった。柔らかいのに小さかった。

手のひらに包んでそっと息を吹きかけないように覗いた。正方形の、ちょうど学校の教室を一回り大きくしたくらいの広さで、向かいあうように入り口は二つあった。周囲をぐるりと煉瓦造りに見せかけた花壇がめぐっていた。何も植えられてはいなかった。だからといって冬の公園でもなくて、夏の透明すぎる日差しは、公園の内側の隅々をあますことなく反射し、一方の入り口の近くでぽつんと取り残されたように立つ背の高い真っ黒な時計はもちろん、四つの角にそれぞれ配置された遊具を触れられないくらい熱し

ていた。左回りにそれらは、極端に縦長の青いすべり台と、鎖の錆びついたオレンジ色のブランコと、砂浜のように白くて細かな貝殻の混じっている砂があふれた砂場と、陶器製のトラやゾウやカバやパンダやゴリラがあった。動物たちの側に立つ小さな公園には不釣り合いなくらい大きな木が、日差しの角度によっては動物たちを冷たい影で包みこみ、そこだけ風化する時間は、硬いゴミの挟まったように甲高い音をたてて速度を遅めた。

もちろん遊具で遊ぶ子どもなんて今ではほとんどいなかった。ブランコを気まぐれに漕いでみたりするのが少しあるくらいだった。そうやって友達が来るのを待っていた。立ち漕ぎをすると涼しかった。もっと高く、もっと速く地面から離れて飛ばなくちゃいけない気がして、膝を曲げたり伸ばしたり、体の中心が前後に広がって空に伸びた。黒く背の高い時計よりもずっと上にいた。時計の針は待ち合わせの時間を十分過ぎていた。その下にはいつのまにか友達が集まって地面の一カ所を囲んでいた。誰も何かを言おうとしなかった。ブランコをやめて駆けつけてみると、みんなの中心には、焦げ茶色の小さなおもちゃがあった。カブトムシの頭だけが、二本の前足をバタバタと交互に動かして地面を引っ掻いていた。

「遅いよ、なにしてたの」

友達が二メートル後ろを指さしたところには、下半身がこっちからどんどん離れるように歩いていて、切断面が乾いていた。空っぽだった。はっとして顔を上げると、カズナがベッドのかたわらにいた。わたしは慌てて公園をポケットに隠し、目を閉じた。

「眠ってた？」

「ううん」

「起きるの待ってた」

「うん」

「いい部屋だね」

緑の蛍光色のパーカーを着ていた。レインコートみたいだと思ったのに、雨の音はほとんど聞こえなかった。

「そう、懐かしい。窓から消防署が見えたの。朝は毎日ラジオ体操みたいなことしてて、学校に行くとき、みんなで挨拶してた。消防車の点検とかしてたりするんだよ、試しにランプを光らせてみたり、サイレンを鳴らしたり。でも、もうわたしの部屋じゃないよ、ここ。カズナは知らないかもしれないけれど、中学校に上がる春に引っ越したの」

カズナは大きさにびっくりしてみせた。

「え、そうなの？ 知らなかったなあ。でも実際に今いるわけだから、間違った部屋じゃないよね。だってほら、夢でも見てるっていうの？」

「わからないけど、夢っていうか、見てるっていうか、同じ季節じゃない気がする。帰るのに時間がかかる気がする」

「うーん、そうかなあ。別におかしなところに来たわけじゃないよ。朝になったら外に出て、通りをずっと歩いていけば駅があるし、電車が来るし、電車に乗れば街中の駅にだって行ける。百貨店にもデパートにも行けるよ。お母さんも働いてるし、小学校も中学校も高校もある。今住んでるアパートだってある。だから変なところなんか来てないだよ」

カズナは事前に用意しておいたセリフをしゃべるように目の動きがなかった。気のせいかもしれないかった。

「そっか、そんな気もする。」

「そういえば、身長伸びた？」

カズナは、わたしの身長が低いから目立たないけれど、高い方だった。それがもっと高くなったような

気がした。たぶんわたしがベットに座っているからだった。

「えー、もう伸びないよ、二十歳になるんだし。誕生日ってこわいよね」

「二十歳って？」

「あ。そうだよ、二十歳だよ」

「わたし、まだ十七歳だけど」

「違うよ、なに言ってるの」

カズナがみるみるうちに早口になっていた。

「でも、十八歳にも十九歳にもなったことないよ。

死んじゃったのかな、どこかで」

「え？ なにそれ」

「ほら、実はずっと前に死んでて、それに気づかず街をふらふらしてるって映画、なかったっけ……」

お父さんが好きだったから、よく見ていた。

「ぼくが？ やっぱりそう思う？」

「え、いや、そうじゃなくて。冗談だけど、わたしが」

「それはないよ、絶対に」

そう言うと、おかしくてたまらないといった風に、笑いを顔中に貼りつかせながら、全身が引きつっていた。それを見たわたしは、肺の底から沸々と、苦味のある笑いがこみ上げてくるのがわかったけれど、本当に笑おうとはしなかった。

「ここ最近ずっと、今もそうだけれど、なにかずれてて、ぼく以外のものはそれなりに正しいと思うけれど、ぼくだけは間違っただけに進んで、そのままぼくとぼくじゃないぼくがどんどん離れて行ってしまう感じがあって、同じところをぐるぐる回ってるのがわかるんだよね。ぼく以外のもの全部が、ぼくじゃないぼくを引き連れて先へ先へと進んでるんだ。そんなのってないでしょ？」

「うん、ほとんどない」

「やっぱりね、そうだよね。どうしよう」

「ごめんね」

そんな風に思っていたなんて考えたこともなかったから、よくわからなかった。でもカズナが笑ったから、わたしも笑った。

「いや、いいよ。気にしないで。ぼくの方こそ、ごめんね。

そうだ、これ食べなよ。食べるのがいいから。もらってきたんだ。

また来るよ」

カズナがズボンのポケットから出した手には、割れたビスケットかと思ったら、黒ずんだビーフジャーキーが握られていた。おいしくなかった。すごく硬くて、顎が疲れた。カズナが部屋を出て行くと半分くらいを吐いて捨てた。でも、せっかくだから公園にあげたらよかったと思った。ティッシュに包んだ噛みかけのビーフジャーキーを差し出すと、やっぱり残さず食べてくれた。それを見れば、わたしは安心した様子でまた眠れた。公園は相変わらずパジャマのズボンのポケットで、子どもたちが缶蹴りをする缶を探していた。ゴミ箱がなかった。

カズナは夢の中で、殴りたいなら皮を剥がなければいけなかった。誰かに言われたのではなくて、そう思った。カズナが男を殴る代わりに、わたしが全身の皮を自分で剥いでいた。狭い地下室の薄暗い光の中で、わたしはするすると鎖骨の裏側からナイフを刺しこみ、痛そうな顔を少しだけしながら

「腕も剥ぐ方がよりよく殴れるかな」

と言うと、男は

「もちろん」

と答えた。男は安っぽい洋画に出てくる、若い短髪のアジア人だった。彫りが深くて、にやにやと笑い、日本語を喋っていなかった。

「なんでこんなことをさせるんだよ」

とカズナは掴みかかったのに、男は

「殴るのは本当に難しいことだから、お前は殴れない」

と言う通りに、カズナは殴れなかった。

殴らずに済むには起きるしかなかった。皮を剥ぐのを見たくなかったし、殴りたいと思うのも嫌だった。カズナは起きてすぐに、隣にいたのは昨日自分が会った人だ、昨日もおとといもその前も会ったし、これからもきっと会う、十二歳のころからの友達だとわかったから、誰かを殴らないといけない時がいつか来た。夢なんかじゃなかった。それまで隣でわたしが自分で自分の皮を剥ぐのを止められないくらい難しい殴るという行為がどういうことなのか、カズナにはわからなかった。誰かを殴る力のあり方や痛みや触感を想像するのが、例えば自分の腕や足や顔を切り取って食べるくらいは想像できるけれど、そこから先はできなかった。カズナはわたしに話すとなんを言われるかさえもわからなかったから、言わなかった。でも確信があった。

「体調はどう？」

「変わらない」

「よかった。退屈してない？」

「うん、人生ゲームがうまくなったから絶対カズナには負けないよ」

「本当に？ 今度やろう。」

はい、これ今日の分」

カズナはまたポケットから取り出した手には、ビーフジャーキーがあった。ここに来てずっと、朝日が上ることなく窓の外には夜が続いているけれど、枕元の目覚まし時計が八周したから、もう四日にはなっていた。まだビーフジャーキーがおいしくないことを言っていなかった。

「ありがとう。なにかわかった？」

「あ、ごめん。そうだった、すっかり忘れてた。」

やっぱりぼくは死んでたみたい。ハルに聞いたんでしょ、ぼくが死んだって」

「聞いたけど、あれ、嘘だよ」

「嘘なんかじゃないよ。証拠もたくさんある。じゃないとこんなこと言わないよ。」

ハルのこと、信じられないの？ 友達なのに？」

「信じるよ！ 信じるけど、でも」

「親友なのに？」

「信じる、信じる！」

「うん、ぼくも信じるよ、友達だから。」

それでぼくは死んでるってことになるんだけど」

「わたしも死んでる？」

「え、それは知らないよ！ 聞いてみないと。ぼくは少なくとも十九歳のときに、線路が脱線して死んだみたい。ちょうど一年くらい前に。ここじゃない都会の方らしいから、心配しなくて大丈夫だよ。ぼくが死ぬだけでハルも誰も怪我一つしないで済むってこと。お父さんもお母さんも怪我一つしない。安心した？」

「まあ、ちょっとね……」

「くわしくはさ、しゃべっているとよくわからなくなりそうだったから、文章に書いてきたんだ。っていうか、いつ書いたのかぼくも忘れちゃったんだけど、メールボックスの下書きのフォルダにいつのまにか保存されてて、せっかくだからメールで送ろうとしたんだけど、アドレス変えた？ 届かなかったよ」

「変えてないよ？」

「まあいいや、ほら、これなんだけどさ」

カズナはポケットから取り出した iPhone を操作すると、これこれ、と言いながらわたしに手渡した。白い iPhone の左下に、カエルが張り付いている格好のシールが貼ってあった。かわいかった。目がちかちかした。

カズナはその文章で、大学に行くための電車に乗っていた。朝だった。少し早めの電車だった。お腹が減っていなかったから朝ごはんを食べずに家を出た。電車は遅れていた。駅が人でいっぱいだった。みんな焦っていたし、運転手の人も焦っていたけれど、いつものことだから、カズナは家を少し早めに出たのを後悔していなかった。

満員電車の三両目だった。窓際に押しつけられながら、外を見ていた。たくさんの人が交差点を歩いていた。朝なのに蒸し暑かった。もうすぐ夏だった。五月だった。隣のスーツ姿の男の人も、麦わら帽子をかぶった女子高生も、杖を振って踊りだしそうな外国人も、みんな家を出てすぐに汗がたくさん服に染み込み、今日一日をそのままの状態でもごさなくちゃいけないのがつらそうだった。怒っている人もいた。カズナはそこまでじゃなかった。電車はどんどん速くなっていった。時速百十キロを超えていた。風景が一個一個は区別がつかないけれど、ただ一方向に流れているのだけはわかった。横長の模様がうねうねと街の中を動いていた。

いつも通る柔らかい右向きのカーブの直前で、さっきまでなにも見えていなかったはずの風景に、四階だてのアパートの屋上を歩く犬がいた。飼い主も他の犬もいなかった。一匹だけがふらふらと、屋上をうろつきながらお腹を空かせていた。どうやって屋上に上ったのかは、カズナにも犬にもわからなかった。元々は白いけれど、泥とか糞尿にまみれたのが乾いて、茶色くびしょ濡れになったように見えてしまう毛並みを凍えさせながら、ふと遠くを走る電車を見つけた。街に一本の定規を引いているみたいできれいだったから、しばらく眺めていると、電車が線路を外れて、なにもかもが剥がれ落ちるような音をたてて、カズナが潰れてしまった。三両目なのに潰れてしまった。それくらい電車は速度を出して走っていたし、たくさんの人が乗っていた。悲しかった。ひどいと思った。百人以上が線路沿いのマンションの一階に突っ込んで、壁と速度の間に挟まれて、尖った薄っぺらな車体になった。マンションの四階で朝ごはんを作っていたお母さんとお父さんと子どもが、爆弾の爆発する音を聞いた。カズナも聞いた。運転手も聞いた。犬も聞いたけれど、音より火薬の匂いの方が大きかった。

すぐに駆けつけたレスキュー隊の人が、その夜、がんばってカズナの死体を拾いあげたのに、ライトに照らされた体は、三歳の時にお母さんが使っていたミシンに人差し指を入れて縫われてできた怪我の跡でしかわからないくらいぐしゃぐしゃで、顔も耳も目も足もほつれていた。みんな同じ死体になっていた。ただひとつ人差し指の傷のおかげで、カズナが死んだのがわたしにもわかった。顔や身長や声ではわからなかつ

た。服装でも持ち物でもわからなかった。カズナのことをどれだけ知ってる人も、カズナでさえも、わからないくらいになっていたから、人差し指の傷だけだった。これがないとカズナは絶対にわからなかった。

わたしは iPhone の画面を、さっと手のひらで一度撫でてから返した。カズナがポケットにもどしたあと、iPhone で時計を見ればよかったことに気づいたけれど、遅かった。

「もう一度、指、見せて？」

「いいよ」

カズナが差し出した左手の人差し指の第一関節に、一・五センチくらいのぷっくりと膨れた皮膚の部分が、指と平行に浮き上がっていた。そっと触れようとすると、熱いものを触ってしまった反射みたいに左手を引っ込め、傷跡を前歯で少し強めに齧っていたから、ちょっとびっくりした。

「ねえ、本当にカズナだよ」

「え？　なんで今ごろそんなこと言うの。そう思うでしょ。」

「そう思わないの？」

カズナはまるで申し訳ないと思っているかのような声の震わし方をしていたから、わたしは思わずビーフジャーキーを口にくわえて

「おいしい、おいしい！」

と言った。心の底から言った。

カズナが部屋を出ると、急いで唾液といっしょにビーフジャーキーを掛け布団の上に吐いた。ポトポトと、細かい繊維がほつれて丸まった湿り気のあるビーフジャーキーが、水色の掛け布団に丸い唾液の染みを作り、それにポケットから這い出てきた公園が近寄った。見れば昨日より少し成長しているのが感じられた。錯覚や嘘をついているわけではなかった。定規で測ってみるとはっきりした。うれしくて思わず iPhone で写真を撮って、Twitter にアップしようとしたら、圏外だった。

学校の教室より一回りくらい大きかった公園は、今ではもう地方のコンビニの駐車場くらい広がっていた。遊具も、すべり台やブランコや砂場や動物だけじゃなくて、シーソーやうんていやジャングルジムがあった。すべり台は登り棒や揺れる梯子や縄でできた登れる網が組み合わせられ、すべり台そのものも、まっすぐすべるものはもちろん、くるくると二周しながらすべるものや、斜面がローラーになっていて、すべるとガラガラガラガラうるさい音がするものもあった。全体的にカラフルな、赤や黄色や青の色彩に満ちているすべり台の頂上に、オレンジ色の円錐の形をした屋根があった。下から内側を覗くと、誰かがマジックでいたずら書きした「死ぬ」や「名前」や「相合傘」や「電話番号」が傾いたり重なったりしながら、びっしりと書かれていた。こういったものを見るたびに、わたしがいないときにもこの公園で遊んでいる子がいるし、もしかしたらわたしが産まれる前からここで遊んでいるのかもしれないな、と思った。

ずっと昔、この街ができたころから公園の遊具があることを知っていた。砂ぼこりをかぶり、子どもたちの怪我した血液をかぶり、汗をかぶり、雨風が混ざりあって公園の隅々にまで広がっていった。ジャングルジムやうんていは、長い月日がたって腐る肉や水分が土へと染み込んでしまい、今では塗装の剥げ落ちた骨格だけになった重たい動物の死骸のように見えた。もしかしたらマンモスや恐竜の仲間なのかもしれない、それが公園にいるのかもしれない、だとしたら会いたい。会って背中に乗りたい。街を歩きたい。博物館で恐竜の骨を見ていつも興奮していた。図鑑を何度も見た。かっこよかった。

公園は晴れていた。雨が降っているところを想像できなかった。子どもたちも元気だったし、わたしも元気そうだった。二日に一回は缶蹴りをした。缶蹴りは好きだった。缶蹴りのための缶が見つからなかったら、どろけいをするようになっていた。

学校で毎日昼休みにどろけいをしていたから退屈だった。二人組になってじゃんけんをした。勝った方が泥棒に、負けた方が警察になった。泥棒は動物の遊具が並んでいる大きな木の下を影を牢屋にして、バ

タバタとあちこちに逃げていく。警察は三十秒待ってから、四人が追いかけて、二人が牢屋に残る。じゃんけんや相談で選んだりしたわけではなかった。勝手に残る人が残っていた。わたしはよく泥棒だった。ぼんやりと大きな木のでっぺんを見ながら、同い年だった女の子が、早く帰りたいな、と思っていた。風でざわざわしていた。少し涼しかった。泥棒になると、そういう落ち着きができないからうらやましかった。捕まったら少しできるけれど、捕まるのは嫌だった。

時計は三時を指し、家に帰るのは五時のサイレンが聞こえるころだった。塾のある子はいつも途中でいなくなっていて、今は十一人だけれど、四時になれば三人減って八人になるから、またじゃんけんをして泥棒と警察に分かれた。

逃げるとき、公園を囲んでいる歩道だけは行ってもよかった。それ以上公園から離れるとだめだった。二つある入り口の牢屋から遠い方を出ると、二匹のトイプードルを散歩させている白いランニングを着た頑丈なおじさんが急に目の前に出てきてびっくりした。すごく睨まれた。ぶつからなかったけれど、怒られそうだったから、おじさんが見えなくなるまで走って、花壇のそばに隠れた。

花壇には、ひまわりが植えられていた。公園の近所のおばあさんが、せっかく公園のまわりを囲む花壇なのに、なにも植えないのは寂しいな、と思って、春先の五日間に植えたのが、あまりに大きく花を咲かせて太陽に向かって伸び、おばあさんも梅雨どきに死んだから、夫のおじいさんが一人で毎日世話をするのが大変そうだった。年だから、汗もかけなかった。次の年の冬におじいさんが死ぬと、ひまわりもぜんぶ枯れて、その三年後に、小さなラベンダーが植えられた。誰もひまわりが植えられたことを覚えていなかった。わたしも忘れていた。ひまわりのおかげで、しゃがむと警察から見つからずにすんだ。こっちは茎と茎の間から動物たちにまたがる二人の警察が見えたから、安心できずに、口の中が貼りつくくらい乾いてしまった。二人の泥棒がいっしょにいた。息を潜めた。それを信号待ちしている白いワゴン車に乗った作業着姿の男の人が見ながら、煙草を二本吸った。むせた。対向車線をパチンコ屋の宣伝車がゆっくりと走ったけれど、うるさい宣伝は流していなかったから、聞いていた野球中継を邪魔されなかった。

警察の中でも一番足の速い身長も高い男の子が、一番小さい男の子を捕まえて牢屋に来た。逃げられないように、右の二の腕あたりをずっと握っていた。痛そうだった。パンダにまたがっていた女の子は、面倒くさいなと思った。牢屋に入ると、また身長の高い男の子が弾けるように駆け出し、公園を出た。右に四分の一の周したところで、こっちを見つけ、目が合い、うわあ、と叫んだ。足が遅いから、三人の泥棒の中でも一人だけ狙いをつけられた。身長の高い男の子があっというまに近づいて、右肩を強く掴み、「いちにさんしごろくしちはちきゅうじゅう！」

と唱えるあいだ、男の子の手を振りほどけることなんてありえなかった。ぐらぐらと揺さぶられる感覚に笑ってしまった。これで逃げるのから解放された。

わたしは一回り大きな白いTシャツを着ていた。いところがライブに行つて、ファンだからTシャツを買ってきて、小さいサイズしかなかったと言って、わたしにくれたけれど、お母さんが、大きすぎるから着てはだめだと言った。落書きみたいな顔と猫と定規が描いてあって好きだった。こっそり着た。でも、男の子が強く掴むから、肩の部分が伸びそうだった。牢屋で見ると、そこだけ汗でじつとりと透けていた。疲れていた。逃げるつもりがなかった。カバの背中にだらりと横たわり、ものすごく熱かったから飛び上がると、隣の女の子が笑った。ライオンにまたがっていた。名前は忘れた。最後から二番目に捕まったハルは悔しいから、ハルを捕まえた身長の高い男の子に

「こけろーこけろー」

と呼びかけていた。そういえばこの男の子の名前も忘れていた。

身長の高い男の子が、最後の一人の男の子より足が速いのは間違いないのに、なかなか捕まえられなくて、終わったころには四時半をまわっていた。二人ともぜーぜー息を吐き、陽射しが弱まる夕方の涼しい

時間帯に、二歳や三歳の子どもを遊ばそうと、お母さんたちが公園に行くためにベビーカーを押しながら家を出た。ハトがぐしゃりと潰れたようにいろんな場所で座りこんでいた。何羽もいた。わたしたちだけだった公園には、いつのまにかたくさんの人々が訪れはじめていた。学年の二つ年下の子もたちが「変化球！」

と言いながら、空気の抜けた黄色いボールを投げあい、紺色のカーディガンを着たメガネのおじいさんが、ほとんど膝を曲げずに笑いながら誰かを追いかけるけれど、どの子どもを追いかけているのかわからなかった。長い髪の毛を頭の上でひとつにまとめた、サイズの明らかにあわない緑の大きなTシャツを着た少女が、ベンチに胡坐をかきながら、一心不乱にスケッチブックに色を塗っていた。イヤホンをした男の人が、ビールの空き缶を片手にベンチから立ち上がり、公園の中心に向かって歩いていった。隣のベンチでは茶色いショートカットの女子高生が、スカートの足を組みながら、新聞を広げて念入りに読んでいた。公園は、木製のベンチが五つもあるような大きさに変わってしまっていたのに、わたしたちは気づかないふりをして遊んでいた。広かった。野球ができそうだった。父親の誕生日だから家族で夕食に出かける友達が一人減って七人になり、どろけいは五時のサイレンが鳴るまで泥棒と警察を選び直して三十分間続けられた。わたしはまた泥棒だった。ハルは警察でわたしを捕まえた。やっぱり逃げるつもりがなかった。身をかがめて笑いながら

「ちょっと、きちんと逃げてよー」

と言われた。きちんと逃げないつもりもなかった。

ハルと別れて家に帰る途中に、行儀よく信号待ちしている野良犬を見つけたけれど、首輪があった。赤色だった。信号が青になると、野良犬はきれいな姿勢で横断歩道を渡り、すれちがったときもこっちを見つめていた。小さいから子犬だと思った。でも、十年は生きた大人の野良犬らしかった。子どもも四匹いた。どこにいるかは知らなかった。

街中が黒っぽい青に満たされはじめた夕方と夜のあいだを歩いて、公園にたどりつくとも誰も遊んではいなかった。お腹が減っていた。最後に食べたのは二日前になっていた。ゴミ箱の中には、雨で濡れて萎れた雑誌が投げ込まれてあるだけだったし、ハルがおいていったアイスの包装を舌で舐めるとコーラの味がした。蟻が野良犬の舌にくっついたまま、三匹飲み込まれた。砂場の方から肉の匂いがして近寄ると、思い切りなにかにぶつかった。砂場は黒いフェンスに囲まれた砂場だったのが、夜になってきたから見えなかった。半年前から工事が行われて、あっという間に完成したフェンスだった。なんでこんなことをするのかわからなかったから、友達に聞くと

「看板読めないの？ 犬はだめだって書いてるじゃん」

「なんで犬はだめなの？」

「穴掘るからじゃない」

「穴掘っちゃだめなの？」

「床に傷つけたら怒られるしね」

鼻の皮がめくれて血が出たけれど気づけなかった。匂いだけを五分くらい嗅ぎ続けた。肉が埋まっていた。むかし子犬のころに、八歳くらいの男の子に飼われていて、男の子は牛肉が食べられないから、焼いた牛肉をこっそり食べさせてくれた。牛肉が嫌いというより怖かった。ニュースで病気に感染していると言われて、お母さんが

「うちの牛肉は大丈夫だからね」

と毎日のように言いきかせても、男の子にはこの牛肉は危なかった。食べたら頭が膨れてしまった。犬なら食べても大丈夫だった。だって人間じゃない犬なんだから！

「こら、そういうことするから早死にするんだよ、だめだめ！」

もうあの子は高校生になるのだろう、十歳のときに、父親から引っ越すから河原に逃がしに行こうと言われて、男の子がショックを受けているのがかわいそうだったから、こっそり家を抜け出したのが七年前になっていた。男の子は引っ越した先で、新しいミニチュアダックスフントの子犬を、父親が会社の同僚から譲り受けて飼いはじめたのがすごくかわいかった。毎日散歩に連れて行った。成長するにつれて、クリーム色から茶色に変わり、子犬のころのしつけがうまくいっていなかったのか、男の子が出かけようとする素振りを見せた瞬間、ものすごい形相で吠えはじめる声が、五十メートル離れたバス停にいても聞こえた。八年後に死んだ時には、大学進学とともに上京して、一人暮らしをしていた。母親が「ほらほら、元気ですよー」

と言うインターネットのビデオ電話で見た犬は、母親の呼ぶ名前に目だけをちらちらと振りながら、ソファに横たわって、今まで見たことのない口の開き方を繰り返していたのが悲しかった。数日後に死んだと言われたときよりも、死ぬんだということがわかった。遺骨はリビングの棚の上に、写真といっしょにおいてあった骨壺の中に入れられ、夏休みに帰省した男の子は、家を出る素振りを見せたら吠えるかもしれないと気をつけてから

「そういえば、もうそんな必要ないだった」

と思い、小さな骨壺の横の遺影を見た。画面いっぱい鼻を近づけ、目が寄っている、今では死んだ犬の写真の撮ったのは、もちろん十七歳のときの男の子だった。写真が好きでプロの写真家になりたかったけれど、結局なれずに、道路を作るための土地を買い取る公務員になった。死ぬまで写真は趣味だった。親戚のおじさんがむかし記念撮影用に使っていた三十年前のフィルムカメラを貰って、使っていたのは子どもころだけで、大学生になったら初めて喫茶店のバイトで稼いだ二ヶ月分のお金を費やし、二年前に発売された一眼レフのデジタルカメラを買った。レンズの内側にまでカビが生えていたり、撮るたびに現像代を気にしてシャッターを切れない間に被写体がどこかへ行ってしまって、男の子が取り残される不安のなくなった生活がうれしかった。これで毎日熱心に撮り続ければ、いつかは本当にすごい写真が撮れるし、プロにもなれるし、誰もが男の子を写真家として尊敬するだろうと考えるようになったころには、もう牛肉でできたハンバーガーも、ローストビーフも、焼肉も、平気で食べられるようになった。むしろ好きだった。すっかり嫌いだったことを忘れてしまった。

五十歳になれば息子も就職し、娘も希望する大学にこの春入学した。プロの写真家になった自分は、価値ある子どもころの夢として思い出され、土日には朝早くから一人でカメラを持って電車に乗り、降りたことのない駅で突発的に降りて、写真に撮れそうなものを探した。夕方から雷雨になると言われたけれど、雲ひとつない五月の空は、冬のように低くないし、夏のように高くない、青が地面にまで滲んできて、道路も木々も建物もそこかしこに青が混ざっていた。

降りた駅は、若い男の駅員が一人だけいる小さな駅で、壁には雨だれの茶色がべっとりと染みついた、乾燥していないところの見当たらない質感が、そのまま寂れた街並みにも感じられた。こういう風景をもう何度も見てきた。何枚も写真に撮ってきた。もしかしたらこの駅には一度来たことがあったのかもしれない。駅の名前には見覚えがないけれど、忘れていたような気もするし、それを否定する根拠がどこにもなかった。駅前の商店街だって、営業しているのだろうけれど、ガラス戸が白く曇っていて客は誰一人いない、いたところを見たことがないクリーニング店には絶対にいつか入ったことがあった。たたみ三畳分くらいの店内には、左右の壁にそって隙間なくビニールに包まれたスーツがハンガーにかけられ、てかてかと光る分厚いカーテンのように見えるのを、はっきりと覚えていた。

入るとカウンター奥に、緑色のエプロンをした白髪のおばあさんが、扇風機に当たりながらこっちを見て、流していたラジオの電波をくるくると調整してから右手を差し出すと、脱水されたようにくしゃくしゃな手のひらの奥で、ラジオは聞いたことのない言語で話す女の人の声を響かせた。今思えば英語じゃ

なかった。おばあさんは無言のまま服を受け取り、代わりに渡されたのは、ピンク色の厚紙に大きく日付の書かれた引換証だった。もうぼろぼろだった。男の子は砂埃でざらついたベンチに腰かけて、財布を確かめると、あふれるレシートや使わないカードの中に、引換証は見つからなかったけれど、子どものころに使っていた財布は今とは違う。大人になってからも三回変えた。そっちの財布に入っているのなら、この財布に入っているはずがなかった。中身を移すときに間違えて、カードや書類をたくさん捨ててしまった。だから、男の子のスーツは今でもあの塊のようなスーツの並びの中にあるのかもしれない。おばあさんが死んでからは、クリーニング店は誰も客が訪れていなかったし、そういう個人営業の店はいくつもあった。店主のいなくなったカウンターには埃がつもり、店内を蛍光灯が霞ませるように照らしていた。

よく見ればこの街並みの酒屋も八百屋も洋品店も文房具店も、電気はついているし看板も降ろされていないのに、店内には店主がおらず、それもここ数日のことではなくて、十数年もこの状態が続いているから、商品には錆びついたり黴びたり賞味期限が切れたりしたものが少なくなかった。こうやって長らく続いているのも、繁盛していた時にたくさんの人が訪れ、たくさんの商品が売られていき、たくさんの商品を売れるものと見込んでまた入荷する繰り返しを経たから、回転運動が止まらない街全体が写真で残すよりはるかに効率よく残っているのは明らかだった。

「でもそれで本当にいいのかな、嘘だったりしないのかな。」

なんで明らかだと思ったんだろう？」

シャッターを切ろうとする指が止まった。ファインダーの四角が、わずかに右へ傾いてしまった。レンズの先には、歩道のすみに横たわる野良犬の死体があつた。夜のうちに大型トラックに轢かれ、朝になると転がっている死体を目にした道沿いの家に住むおばあさんが、交通の邪魔になると思って、ピンク色のゴム手袋をはめた手で引きずりながら、歩道のガードレールの下まで運び、前輪と後輪の二箇所タイヤで二度も轢かれて、ぐしゃぐしゃに潰れた野良犬の顔を、昨日の新聞紙を被せて、通行人の視線から隠したまま放置されていた。道路には血液や肉片や毛皮が赤黒い塊のように付着し、すでに乾燥しているにもかかわらず、そこだけが光を反射するくらい湿っているように見えてしまう中に、何度も繰り返し通行車両に轢かれて、薄っぺらになった赤色の首輪があつた。

男の子は五メートルくらい離れた場所から、車道とガードレールと野良犬の全身を斜めから収めるよう、ギリギリまでズームしてピントを合わせていたけれど、視界の右下、つまり手前から急に大きな影が歩いてきて、野良犬に近づいた。びっくりしてカメラをおろすと、小柄な女の子だった。黄色のワンピースを着た髪の毛の肩よりずっと下まで伸びた女の子が、カメラを構える男の子のすぐ横を通つた。野良犬の前で立ち止まり、しばらく見ていると、しゃがんで野良犬に触ろうとした。レンズ越しでなくなっても距離が離れるだけで、女の子はそこにいた。野良犬の背に触れた。ゆっくりと右に左に、指先で落ち着かせるように優しく撫でた。思わず男の子は、むかし飼っていた犬を思い出した。それは十九歳の時に死んでしまったミニチュアダックスフントの記憶で、十歳の時に逃げてしまった犬についての悲しみや懐かしみは、もう一生思い出せないことだった。

女の子は慎重に両手を野良犬の体の下に差し込み、重たそうではあってもふらついたりはずせずに、持ち上げ、立ち上がると新聞紙が不安定に揺れ、落ちなかった。そして歩きはじめたから男の子は、これは写真に撮るべきだと感じたし、実際に男の子はカメラをなんの戸惑いもなく構え、女の子を覗いた。女の子の顔は未だに見えないまま遠ざかっていくのを、レンズ越しに追いかけてながらピントを合わせ、光量を確認し、これ以上離れると満足いく写真でなくなると確信が持てた瞬間、野良犬の顔にかかった新聞紙が十センチくらい跳ね上がり、前後に首を振ると、野良犬の鳴き声が響いた。閑散とした家々の間を震わす昨日の新聞紙が、野良犬の顔の形をともなって、空に向かい六度吠えた。女の子の視線が吠える顔を確かめて、男の子には聞こえない声で諭すと、犬は女の子に抱かれながらまた大人しく眠つたのを、男の子は写真に

撮ることがなかった。後悔することもなかった。もう既に世界は壊れる、壊れると思ったら、本当にガクガクと壊れはじめていたのだった。

劣化した映像データに似ていた。空が穴のあいたように落下し、街の表面がざらついた粒子に覆われ、青と赤が混ざって分離する小刻みな点滅が、あらゆる輪郭を水平に歪ませた。〇・五秒進み、〇・五秒戻る、そのほとんど停止に近い反復の瞬間の切り取りは、どこか意図的であると思っても錯覚でしかない、偶然の互いにぶつかりあう結果としての傾向で、全体で見れば、事前に用意された図版に従い進められているようでありながら、細部にとっては、その場にありえた可能性のわずかな提示に過ぎなかった。その運動の蓄積範囲内で、野良犬は鳴き止むことなく顔を振り、線路はネジが外れて浮き上がった状態のまま大きく振れるように横にずれ、排水管が風に揺れる電線と同じくらい地面に埋まったまま弾けるのを、街が何重にも分厚く反響させることで、彼らの選択として許した。男の子はアスファルトや看板や傾斜や側溝のような、街の構成要素のありふれた一つとして用いられ、細胞も血液も骨格も沸騰し、絶対に蒸発することがなかったし、女の子が野良犬の顔にかかる新聞紙を取ってあげると、今まで見てきたなかで一番かわいかった。

まだ轟音はおさまっていなかったものの、これから生涯おさまることがないし、そもそも始まってすらいない最初から低く流れていた基調音だったから、街の滞りなく進む速度にずれや崩れを見てしまう車も人もいなかった。もう帰らなくちゃいけない時間だった。多くの人が仕事を終えて、夕食を考えながら家までの毎日を辿り、時計と太陽を見比べて

「ほら、もうこんなに夏になってきたから、まだ明るい！」

と騒ぐのが一年一年を測っていった。女の子とすれ違った自転車に乗っていた太った女の人は、スーパーで今日の夕食と明日の子どもたち三人に持たせるお弁当のおかずとして、冷凍食品の餃子とお好み焼きとミニハンバーグを選び、トイレトーパーを買い、自転車のかごに無理やり乗せたいつもの帰り道に、汗だくの表情でペダルを漕ぎながら、今日がわたしの誕生日だと思った。本当は明日だった。短パンのおじいさんが歩道に水をまいていた。サングラスの少女がサングラスを三秒外してまたかけた。犬を抱えた女の子を抜きぎわにちらりと見て

「散歩してたのが疲れて歩かなくなったのかな」

と思った男子高校生は、友達から散歩の途中に、犬がゼーゼーと荒い呼吸を始めたのに気づかず紐を引っ張ると、漏らした尿が後ろ足を伝ってアスファルトの地面に細長く垂れていたのに笑っちゃった、と小学生の時に言われた。つられて笑った。

「もうじいさんだよ、昔は外に出したら走り過ぎて走り過ぎて、首が締まって顔も後ろにぐによつと引っ張られて、絶対苦しかつたらうになー、それならもっと落ちついて走ればいいのに。ほんといころびそうだった。」

今はその逆」

男子高校生は猫を飼っていたから、犬を飼っていなかったし、どちらかといえば犬の方が飼いたかった。そんなことも女の子は知らなかった。友達の犬は七年前に死んだ。

単線の線路沿いを歩き続けた。女の子の前をモヒカンの男の人が歩いていて、自分のモヒカンをすごく触っていた。郊外電車と三回すれ違った。向かい側から電車は来ても、女の子を追い抜くような向きで電車が走ってくることがなかった。電車には、ガラスにびっしりと皮膚の貼りついているのがわかるくらい大勢の人が乗っていた。重みで左右に揺れた。女の子は金網のフェンス越しに電車を見なかった。ずっと女の子の抱える野良犬を見ていた。野良犬はとても元気そうで安心した。女の子は小柄なのに疲れていなかった。

自転車のすれ違いあえないくらい細い踏切を渡って、自宅を改装したカントリー風の喫茶店と、廃業したガソリンスタンドと、二つのコンビニの前を横切り、一台の赤い軽自動車しか止まっているところを見たことがない広々とした駐車場で、プラスチックのバットとゴムボールで野球をしていた子どもたちに

「ほら、これ見て！」

と野良犬を見せようとしたのに、ホームランを打てない子どもたちは夕方の五時のサイレンだけが聞こえた。あと五分歩けば消防署がある角を左に曲がり、左右を高い塀で囲われた細くうねっている上り坂を進めば、古いアパートがあった四階の右から三番目が女の子の家だった。お母さんは今日はカレーを作っていた。お父さんがあと一時間もすれば帰った。

エレベーターは前後左右に体をぶつけながら、登ったり降りたりする老朽化が目立っていた。重そうなスーパーの袋を両手に持ったおばさんが乗り合わせ、女の子の犬をまじまじと見ると、新聞紙には小さく天気予報が載っているそれがいつの天気なのか、どこの天気なのかは見えなかったけれど、灰色と青しかな

かったからここ数日じゃない、ここ数日は全国的に雨が降っていないし、晴天の夏が続いて水不足だった。昨年も断水した。この街はダムがあっても毎年干上がり、ひび割れた湖底の写真が新聞に載っても驚かない、テレビのニュースで取り上げられても驚かない、女の子の抱える犬に被せられた新聞紙に、湖底の写真があるのをおぼさんが見つけても、昨年のもなのか今年のもなのかわからないのは、この街にとって仕方がないことだった。

お母さんは女の子が生まれてすぐの、今から六年前にあった大規模な断水を思い出し、あの夏はこの街を出ようかとすら思った。一日に決まった数時間しか水道が使えない、給水車は来ない、バケツに貯めた水で風呂も洗濯も料理もトイレも流すから、女の子のミルクを作るのが最優先だった。母乳がうまく出なかった。あのころと比べれば食事はとても楽になった。好き嫌いが多くても、お母さんが食べるものを女の子が食べるし、女の子が残したものをお母さんが食べる、母乳を飲むなんて一生ないことだろうし、お母さんがお父さんのために作ってあげたものでも、女の子はほとんど食べられた。カレーはお父さんと付き合っていたときによく作ってあげていた味で、女の子はカレーがあまり好きじゃなかった。

「お母さん、これ見て！」

甲高い声が玄関の方から聞こえた気がした。火を弱めて鍋に蓋をしてから玄関に行くと、誰もいなかった。玄関の電気をつけ、ドアを開けると、子犬を抱いた女の子が

「飼っていい？ いいでしょ？」

と笑った。

「どこで拾ってきたの？」

「公園！ じゃなかった、公園の前の道路！」

「箱に入れられてたの？」

「ううん、寝てた。ねえ、飼っていいでしょ？」

「だめに決まってるじゃない、アパートなんだから」

「なんでアパートなの？」

「そういう決まりなの。お母さんもお父さんも、犬とか猫とか飼わないから住んでるのよ、わかる？ お隣の人も飼ってないでしょ？」

「そうなの？」

「そう。だめなの」

「じゃあどうするの？」

「返してこなくちゃ」

「どこに？」

「公園でしょ？」

「えーなんでー」

「いいから、行きましょ、ね。」

あ、ちょっと待ってなさい」

お母さんは慌ててキッチンに戻って火を消すと、鏡で服装と髪型を確認し、玄関にもどったら、女の子は「もう、もどしてきちゃった」

と言った。

お父さんが少し早めに帰ってきた。三人でカレーを食べた。おいしかった。

リビングでお父さんはニュースを見ていて、お母さんと女の子は洗濯物を畳んでからトランプをした。神経衰弱だった。八時になればお母さんとお風呂に入った。前歯が少しぐらぐらしていることを言うと

「早いねえ」

と褒めてくれた。指で触ると、確かに十日後には抜けそうだった。抜けたら下の歯は屋上に投げに行くし、上の歯はアパートの下の公園に投げに行った。

歯磨きをして十時にはいつも眠っていた。女の子は自分の部屋のベッドでごろごろ転がった。カエルのぬいぐるみに抱きついた。お母さんは八歳まで女の子と一緒に寝てあげようと思っていた。遮光カーテンの隙間から、街の夜景が白く曇ったように見えた。女の子の家は山の方の少し高台にあった。街の向こうには海が見えるはずなのに、どれだけ晴れた日にも見えたことがなく、暑かったから窓を開けようと思ったけれど、女の子の力では開けられなかった。ドアが開いた音がして、お母さんかと思い、振り向くと、カズナが部屋に入ってきた。

女の子は一瞬、お父さんかと思った。

「誰ですか？」

「え？」

「誰ですか？」

「いや……」

「お母さん！ お母さん！」

何度も呼んだけれど、返事は女の子には聞こえなかった。あまりにも尖った声で叫ぶから、カズナは戸惑った表情をしてしまった。入院患者のような白くゆったりとした服を着ていた。その下にはなににも着ていなかった。

「ほら、これこれ」

女の子を慰めてから、差し出されたのは iPhone だった。映像が停止していた。女の子が縦向きに持ってしまうと、画面がそれにあわせて回転し小さくなり、カズナが横向きに持ち直させると、大きくなった映像を再生した。

「シャライのために持ってきたんだ。もうそろそろいいんじゃないかと思って」

「シャライ？」

「そうだよ。そうでしょ？」

「うん……」

カズナと女の子がベッドに並んで座り、映像を見ていた。最初は薄暗い画面で、映像が暗いというより、映っている場所に電気がついていなかった。音楽が後ろから聞こえていた。隙間から零れるように小さい、でも音自体は激しいドラムやギターだった。どこかで聞いたことがあるのに、思い出すのが難しかった。

引き戸が開いて、あらわれた男の人の影と一っしょに薄い光が、画面の左側から広がると、暗かったのは、玄関と台所のある短い廊下だった。そこを斜め上から見下ろしていた。アパートの一室だった。

玄関から入ってすぐの右側に小さな台所があって、左側には二つの扉が並んでいた。手前側が浴室、もう一つがトイレ、廊下のつきあたりにある引き戸を開けると室内に入った。音楽はいつのまにか聞こえなくなっていた。それはさっきまで机の上の iPhone で、ロックバンドのプロモーションビデオが再生されていたけれど、友達が好きだと言っていたから聞いてみても、あまり好きじゃなかったから聞くのをやめてしまった。そういうことはよくあった。カズナはロックは好きでも、激しい曲調は好きじゃないし、歌詞はなるべく聞き取れるのがよかった。歌詞ばかりを音楽で聞いてしまって、

「この歌詞がいいよね！」

と友達に言うと、

「そうだね、うん」

と曖昧な笑顔で返されるばかりだった。逆にカズナに歌詞のあまりよくない曲を教えると、曖昧な笑顔で返されるから、歌詞があまりよくないんだな、とすぐにわかった。どんな歌詞がいいんだろう、どんな歌詞

をカズナはいいと思うだろう、と思い、カズナにおすすめの曲をたくさん聞いて、たくさん集めたから、iPhoneにはカズナの好きな人たちの名前が並んでいたし、カズナのiPhoneにも同じ名前が並んでいた。

引き戸を開けてあらわれたのは、だからカズナだった。こっちが本当なんだと思って、すごくうれしかった。

部屋には、なるべく物を置かないようにしていた。一人暮らしをする前に住んでいた実家では、幼稚園に通っていたころから小学校、中学校、高校にあがるまでのそれぞれの季節に使っていた服や文房具や教科書が、タンスや机や本棚に重なって、寝ている間も雪崩のように降りかかってきた。少しずついらぬ物を選んで捨てるのは、部屋をどんどん狭くしていくようでつらかったし、一息に切り離して閉じ込めてしまうのが一番よくて、それを望んで一人暮らしをはじめたというよりは、大学生になったらいつのまにかそうになっていたのによやく気がついた。

小さな白のカラーボックスに、好きな本だけを入れ、テレビはパソコンで見られるけれど見なかった。大きめのベッドが窓際におかれ、焦げ茶色の遮光カーテンが片側だけしめられていた。壁際の机は合板の白の背丈が低いのは、高いものだといすをおかないといけなくて、そうなれば床に傷がつくのを避けるため、イスにあったカーペットを選ぶのが嫌だった。細長い机の上に、持ち運びできるくらい小さなパソコンと、赤色の揃いかかっているルービックキューブがあり、右のすみに丸みを帯びたオレンジ色のデスクランプも灯されていたけれど、全体的に薄暗かった。それだけだった。鞆も鏡もパンに塗る蜂蜜も、クローゼットの中にあった。

爪を切っている最中だったから、デスクランプの下のあたりには、銀色の爪切りと、切ったあとの爪が散らばっていた。きれいだと思った。まだ右手と、左手の親指しか切っていなかった。喉が乾いてしまった。右手を切り終えたときに、あと一本切れれば水を飲もうと思った。

この前に切ったのは先週の今日だったのに、爪が長すぎて学校の授業を受けているときも痛かった。昨日までなんともなかったのが、ちょっと伸びてきたかな、と思った瞬間、痛みが止まらなくなった。爪と皮膚の境目を支点として、爪の先端が下に押されると、根元が上に引っ張られ、爪が剥がれてしまうんじゃないかと思っていた。小学四年生のときに、隣の席になった女の子が、もう名前も忘れてしまったけれど、「ほら、これ見て」

と言われたから見ると、足の爪が四本なかった。爪って剥がれるんだな、と思った。知らなかった。「ちよっところんだんだけど、すごくない？」

恥ずかしくなって、すぐに靴下を履いた。算数の授業だった。爪が剥がれたことなんて一度もなかった。野球部に入っていたから、強いボールをキャッチすると、親指の爪と皮膚の間が裂けて、血が出てしまうのはあったのかもしれない。そういうときは絆創膏を二重にはるんだ、横と縦の二重にね、と言っていた覚えがあるけれど、カズナじゃない違う人かもしれない。でも、今日の朝から痛むのは、順番がいつもと違った。爪からじゃなくて、左手の人差し指の第二関節からだった。

動かすと軽い金属を擦らせる音が聞こえた。気のせいかと思ったけれど、耳を近づけたら本当に聞こえていた。動かしづらいようなことはなかった。ズキズキとした痛みではなくて、どこから先が痛むのか、どんな風に痛いのかわからないから、腰のあたりや踵や手首もふいにギシギシと痛んだりした。そのときも軽い金属の擦れる音が聞こえた。見ても青くなったり赤くなったり腫れたりはしていなくて、昨日どこかでぶつけたのかもしれないと思った。

でも居心地が悪くて仕方がなかった。右手で触ったり、握ったり、シャーペンの先でつついてみたりすると、呼吸が少し落ち着いた。そのせいで、指先の方も痛んだ。爪は、関節と違って、中央あたりが丸く赤に染まっている気がした。かなり伸びていた。爪を横から強く右手の指でつまんだ。真っ白になったあと、指を離すと見たことがないくらい真っ赤になっていった。なんで今、学校で授業なんか受けてるんだろう、

早く帰ればいいのに、と思った。夕方からの授業に一つ行かないことにした。いつもは簡単に休むのが、今日に限ってすごく休むべきかどうかを悩んでいた。

電車のつり革につかまりながら、手の甲までぎこちなくなってきた。もうすぐ痛くなる、と考えたら痛くならないのに、考えなかったら痛くなる、なんて都合のいいことはなかった。いつ痛むのかわからなかった。隣に立つ人の携帯電話が何度も鳴っていた。茶色の杖を二本、右手と左手についたおじいさんだった。足がグラグラ震えていたけれど、電車が曲がり角で大きく揺れても、絶対に倒れたりとはしなかった。

ピリリリ、ピリリリ、と鳴っているのを気づいてないのかと置いていたら、カズナが降りる駅の一つ前の駅に止まった瞬間、ポケットから携帯電話をとった拍子に前のめりに倒れた。杖の片方が、座っていた女の人の足にあたった。かなり痛そうな音がした。女の方はゆっくりと立ち上がり、床に落とした携帯電話を拾うと、携帯電話が鳴り止んだ。その代わりにカズナのiPhoneが震えた。とっさにポケットに手を入れたら、骨と肉の間がちぎれるくらい痛んで、カズナが顔を歪ませるのがわかった。

メールは迷惑メールで、たくさんの数字が書いてあった。おじいさんはカズナが電車を降りたあとも、ずっと床に倒れたままだった。

家に帰ると、アパートの共同ポストの手前の細い通路に、朝まではなかったゴミ袋が置かれていた。中には赤いフェルト生地の断片や、薄暗くプリントされた写真が何枚も入れられていた。その上や周辺には、白い歯ブラシや女性ものの手提げカバンや、茶色い毛布や黒い手袋や革張りの日記帳や、茶封筒や有名な宗教団体のビデオテープが散らばっていて、塊だった。一度立ち止まり、ゆっくりと大きく足を上げて通路の端をまたいだ。黒いセーターの袖口を踏みつけた。酸味のある臭いが漂う気がしたけれど、無臭だった。今日の朝は燃えるゴミの日で、ゴミ収集車の男の人が二人、どうすれば時間通りにアパートの住人がゴミを出すのか、怒っていた。定年退職で人の数は減っているのに、増えるゴミに応じて給料が上がらないのが不満だった。この前、同期で入った宮本さんもやめてしまった。どうしようもないな。窓を閉めて、扇風機をつけると少しも聞こえなくなった。暑かった。もうすっかり夏になった。

部屋に帰ると、すぐにエアコンをつけた。すごく綺麗な部屋だった。カズナの部屋は二階の道路側で、アパートの正面から見て右側の部屋だった。カズナのお父さんが、新築のマンションより内装をリフォームしたアパートの方が、綺麗だし安くて済むんだ、と言った。面倒だったから父親に任せていたら、この部屋になっていた。二階に住むのは初めてだった。もっと広い部屋にいつか住みたかった。十分広いと思うけれど、満足できないようなら、自分で働いてお金を稼がないといけなかった。カズナは船の解体のアルバイトを夏からはじめた。街外れの港の解体作業場で、遠くの海からやって来る大きな貨物船や観光船をバラバラにして、お金をもらった。左手の人差し指は、そこでの怪我かもしれないと、裁断した鉄板を素手で担ぐときに指をぶつけてしまった跡がまだ出てこないだけなら、きっとすごく痛いだろうと思った。

お腹は減っていないけれど、朝から何も食べていなかった。レトルトカレーを買っていた。鍋を火にかけ、レトルトカレーを温めているうちに、四枚切りの食パンを三センチ角に切って、少し底の深い真っ白のお皿に敷いた。耐熱皿には見えなかった。でも、レトルトカレーをパンの上にかけて、チーズをパラパラとのせ、瓶に入ったパセリを振り、レンジのトースターグリルで十五分焼いたグラタンみたいだった。おいしそうだった。こういうグラタンは、お母さんがよく忙しいときに作ってくれたから、カズナも作るんだと思うと、いっしょに食べているみたいでうれしかった。小さなスプーンで食べた。吐いた。残りは食べきれなくて捨てた。女の子が

「だいじょうぶかな」

と言うと、偽物のカズナは、何も答えずに黙って画面を見ていた。

どうせ何も考えていなかった。

カーテンをしめるのを忘れていた。外は夏なのにもう暗くなっていた。もしもカズナの部屋を見上げた

人がいたら、ベランダ越しに壁の白さがはっきり見えた。ベッドと蛍光灯とデスクランプが見えた。カズナが一人で立っていた。

電車を降りて家に帰る道のりは、夕日が街を分厚く照らしていて、建物や標識の影が何層にも道路を切り取った。暑さも影に従って暑くなったり、涼しくなったりした。排水溝の金属の網目の奥から、地下鉄の風が舞い上がってきて、生ぬるかった。地下鉄にはほとんど乗らないから、地面の下が地下鉄だということをつっかり忘れていた。地下鉄の駅からこっちが見られるかな、と思った。スーパーの袋を両手に持った、お腹に赤ちゃんを吊るしているお母さんが、赤いエプロンをした自転車のおばさんとすれ違った。こんにちは、と互いに頭を下げたら、赤ちゃんがぐらんと逆さまに揺れて首が潰れた。

レトルトカレーを温めはじめたのが七時だったから、あれからもう二時間半たっていた。グラタンを食べることしかしていなくて、びっくりした。街中はやっぱり時間がたつのが速いな、と思った。食器を洗おうとしたら、スポンジを泡だてる指に思わず声が出るくらいの痛みがあつて、爪を切らないといけないのを思い出した。少し青紫色になっていた。食器を洗っている間、忘れてしまわないように口でリズムをつけて呟いたから、忘れなかった。

iPhoneにメモしておいたバンドの名前で検索し、見つけたプロモーションビデオを再生しながら、いつもは左手の爪から切っていたのを、今日も左手から切ろうとしてやめた。爪切りを左手に持ち替え、右手の親指から切った。左手の人差し指を使わないように、左手の中指と親指で切るのは大変だった。切るたびに振動だけで痛かった。右手の全部と左手の親指を切ったところで、カズナが立ち上がり、台所に行ってコップに水道の水を注ぎ、一息に飲んだ。もう一杯飲んだ。そしてコップを水洗いしようとして、コップを持つ左手に水道の水があたったら、左手の人差し指がちぎれて落ちた。なにかが外れるような反動が手から腕にまで伝わって、ステンレスの流し場にぼとんと大きな音がした。さっきまであった痛みが、すっと取れて軽くなった。血は一滴も出たりはしなかった。蛇口を捻って水を止め、水流で排水口に吸い込まれそうになる指を右手で慌てて捕まえて、タオルで優しく水気を取ると、爪が剥がれてしまった。どうしよう、と思った。

この映像の繰り返しを、何度も見たことがあると思った。

そうだった。子どものころだけけれど、あれから神経質になってしまった。いろんな天気予報を逃さず見ようとするくらいだった。天気図と一時間ごとの天気と、気温と湿度と週間予報が地名ごとに折り重なったのが、把握できない速度で番組ごとに違っていくのを許せなかった。全部の動きを見ようとしていたら、いつのまにか日付が変わってわからなくなった。外を見ても天気がわからなかった。

寝る前にエアコンの電源を十回、点けたり消したりを繰り返し、クローゼットの扉が少しでも開かないように何度も閉めた。それから眠った。クローゼットの扉は、いま思えばどこかが歪んでいたのか、いつのまにか勝手に数ミリだけ開いていた。ベッドに入っても五回は起き上がって確認した。三回に一回は閉まっていた。クローゼットの中には数えきれないくらいの絵本があつた。いどこか知り合いの子にぜんぶあげた。

仲のいい二匹のカエルの話も、いじめられて屋根に上るヤギの話も、電話で時報を告げるカバの話も、みんな読むことなんてもう絶対になかったのに、あげるのだけはダメだと思った。そんなわがままを言って怒られたから、許してもらいたくて何時間も謝ると、お母さんが「静かにして！」

と叫んでお風呂に入った。

どうしたらいいのか必死に一人で考えて、お風呂の扉越しに、「嫌がらせてごめんなさい」

と言った。何度も言った。水面の揺れる音が聞こえたけれど、返事がなかったから、聞こえていないと

思った。お母さんはお父さんに相談したかった。お父さんはどこかに行っていなかった。

夜にテレビでやっていたホラー映画のワンシーンかもしれない。目をつぶっても、お父さんの腕に隠れても、音が聞こえるから映像もはっきり色つきで見えた。

おそろおそろ画面を見つめた。見たことがあるのか不安になった。

傷口は白い骨が中心に通っていて、こんなに真っ白だなんて思わなかった。皮膚や肉の断面は、手よりも人差し指の方がずっと黒ずんでいたのに、骨だけは手も指も変わらない綺麗さのまま、指の根元から覗いていた。きっと時間が経てば黄ばんでいった。

爪と指をタオルにのせたまま、そっと運んで机の上においた。爪の切り屑をひとまとめにしてゴミ箱に入れ、とりあえず左手の指、それから足の爪を切った。膝を抱えて切る体勢が苦手だから、足の爪は二回に一回しか切らなかった。左手の人差し指を動かそうとしてみると、骨が手の甲の皮膚を押し上げたりもどったりして、傷口から骨の先端がちらちらと見えた。

iPhone で何度か言葉を変えて調べてみたけれど、指はそんなに簡単にはちぎれなかった。もしも運が悪くちぎれたときには、手を心臓よりずっと上の方に持ち上げて、清潔なガーゼをあてるべきだった。指を洗わずに、そのままビニール袋に入れる。ビニール袋の外から氷で冷やす。冷蔵庫で冷やす。適切に急いだ処置をすれば、目立った問題もなく指はつながる。カズナは書かれている通りに従った。もっと調べると事故で指のなくなった手の画像がたくさん表示されて、ほとんどは傷口の丸まった治療後だった。指が全部なくなった画像が三枚あった。男の人や女の人や犬の笑顔が六枚あった。

隣の部屋から壁を叩かれたからじっとした。冷蔵庫の音がエアコンの音と別々に聞こえて、道路の清掃車が走り、壁は一回で鳴りやんでくれた。

しばらく検索を続けていると、七十個目くらいに動画があった。二つ並んでいた一つは飼っているエビの産卵動画で、もう一つは真っ黒な画像だった。数字の羅列が名前だった。再生時間は二分ほどで、開いてみると、指の一本欠けた手のひらが映されたから、女の子が iPhone の画面をぐっと覗き込んだ。カズナかと思った。それは左手の人差し指ではなくて中指だったけれど、でも画面が少し引いて視野が広がると、カズナの横顔が左から現れた。

カズナも最初は意識しないまでも、すぐにカズナであるとわかったようで、思わず後ろを振り向いたら、こっちと目があってびっくりした。少し視線から身を逸らそうとしてしまった。後ろにはもちろん誰もいなかった。女の子は気づいたら、自分一人だけで映像を見ていた。横にいた偽物のカズナがいた痕跡はなかった。iPhone に視線をもどすと、すでに再生が終わって動画の情報が表示されていた。投稿者名は syarai で、アップロード時期は一年以上前、再生回数は三回だった。コメントがなかった。

関連動画として真っ黒な画像と、やはり数字の羅列の名前、投稿者もまったく同じユーザーがとめどなくアップロードしていた。その内のひとつをまた開けば、今度は右足の小指が削れていて、次は左耳、次は下顎、次は右目と、そうやって連鎖的に再生を続けてみていた。時間はとっくに日をまたいでいて、明日は朝から授業があった。お母さんの来る心配がなくても、女の子は飽きずに iPhone を握った。いつもはぐっすり寝入ってから二時間くらいはたっている時間なのに、今日はなぜか眠たくならなかった。

いったいいくつあるんだろう、と思った。ユーザー名で検索すると、同じ真っ黒の画像に、同じ再生時間、名前の数字の並びだけが違う動画がありすぎて何度読み込んでも途切れることがなかった。次の読み込みで最後に行き当たるんじゃないか、本当はあと少しじゃないかとばかり考えて、いつまでも読み込むと、アプリが強制終了してしまい、慌ててもう一度開くと最初からになっていた。

それらは二分間を様々な部位の欠如にあてていて、一見同じようだったとしても、実は数ミリずれた場所がちぎれて失われていた。すべてが一年前のアップロードで、女の子が見ている動画も一年前のアップロードだった。数えきれない量のカズナが自分の体の至るところを失い、それに痛みを感じるというより

は戸惑ってこっちを見つめていた。一年前の現在に、同時にたくさんの欠如が生まれて、それを再生するための情報を探したけれど、みんな平等の立場だった。自分たちはちぎれてしまった肉片を冷蔵庫に入れておいたのに、眠ると朝には腐って変色し、綿のようになった指をどうしても食べたい。目を食べたい。舌を食べたい。骨盤を食べたい。

口の中で柔らかくしなるものもあったし、硬くて顎が疲れてしまうものもあった。わかるのは、ただこれまで一度も食べたことがないから、おいしいような気がしてしまっていることだった。昨日はカレーのグラタンを食べたせいで、胃がもたれていて、一口でもお腹がいっぱいになった。栄養が消化器から板のように水平な順序で上下へ通過し、皮膚の輪郭を揺らがせて更新するのが一瞬のことだった。一人暮らしをはじめた時に買って以来、一度も使っていなかった包帯を傷口に巻き、外に出ると夜のうちに雨が降ったらしく、蒸し暑くて、Tシャツがあつという間に汗ばみ、そのまま一日を過ごした。街の風景が新しいものとして記憶されながら、それがずっと前からの続きであることも正しかった。細胞のひとつひとつの隙間に蝉の声が入り込み、蝉を探したら、鳴き声が言葉として動きの関節のようになっていくのが、なにより夏だったと何年後かにこの時を思い出すと思った。その時間も感覚も、動画として隈なくアップロードされていたし、対応して他のデータもわずかずつ変わっていった。

翌日も翌々日も気温は三十度を超え続け、記録的な猛暑の夏になり、室内は帰るたびに体温が冷たく感じられるほどだった。夏休みになった。台風が三つ連続で街を通過した。土砂崩れでの死者や川の氾濫は、幸運なことに起きなかった。それでも街路樹は道路に隙間なく枝葉を敷き詰め、川は塊になって茶色の飛沫をあげた。朝起きて窓を開け、ベランダの物干し竿にピンクと黄色のハンガーが二つなくなっていて、水色のハンガーしかなかった。洗濯機の上にたまっていた砂埃もすっかり雨で流されてきれいだった。肌がべとつくから今年の夏から朝にシャワーをした。高校のころは七時には家を出ていたから、そんな余裕なんてなかった。髪の毛をドライヤーで乾かしながら、そういえば指が生え変わっていた。カズナもようやくそのことに気づいてまじまじと見つめた。左手の人差し指の長さが中指よりも爪半分くらい長くなっていた。それは失敗だから、このカズナの映像の録画は終わり、他のデータと統合された。そうやって複数の蓄積が何度も繰り返されながら、でも動画を最初から最後まで見ることもないし、カズナも一度しか二十歳の夏を過ごしていなかった。全身の部位の欠如と再生は同じ時間に、同じカズナがバラバラな体験をした結果、重複を伐採しながら得られるもので、指の形が違和感なく、それで一日を患うことなく生きられるなら問題ないから、内臓や血管が少しくらい元通りでなかったとしても別によかった。健康に生きられる安心が樹形図のような形の軸としてカズナを立たせれば、生まれる前の子宮で一から体を組み上げる種類の精密さは必要なかった。本物のカズナだと思えたらそれでよかった。

包帯を外し、家を出て、電車で二駅離れた街の中心の駅まで歩いて行った。レンタルビデオ店の前の自動販売機でコーラを買った。二本出てきた。一本をそのままにした。次に買った人がよろこぶと思った。

iPhoneの現在地測定を使いながら、何度も道を間違えつつ、高架の上を線路が走る脇の裏道に入っていくようだった。人通りは少なく、自転車が折り重なるように並んでいて、茶髪の似たような服装をした男の人が、別々に三人歩いていた。一人は口笛を吹き、二人はタバコを吸っていた。その内の一人とすれ違う時に水草の匂いがしたから、飼っていたザリガニを思い出した。

入り口に黒いゴミ袋が積み上げられているビルの三階までのぼって、奥から四番目の扉を開けた。埃っぽい体育館の倉庫のような空気の奥に、とんぼのような顔をした、知らない男の人が座っていた。カズナは顔見知りのように、男の人が前歯を見せると、小さく頭を下げた。すごく痩せていて、肩幅が広く、唇の薄い、赤いリュックサックの男の人にそっくりだった。藍色の作業服を着ていた。妙に室内は明るかった。「おつかれさまです」

と男の人が言った。声もとんぼみみたいだった。

「いや、別になにも……」

とカズナが言った。男の人のすぐ側にあるパイプ椅子に座ると、ものすごく甲高い金属の軋む音が出て、とんぼみみたいな人が少しビクツとした。ノートパソコンを一台置くだけでいっぱいになるこじんまりとした机と、二人の座っている椅子がふたつと、ドラム式洗濯機に大きな望遠鏡が並んで壁際に置かれてあるだけで、不必要なくらい広々としたここは、ずいぶん涼しかった。

「そんなことはありませんよ、おつかれさまでした。一通りの過程はもう終了なんですから」

「そうなんですか？」

「体に関しても過多や欠如なく、十分に主観的な健康体です。

なにか支障でも？」

「えっ、なんですか」

「不満そうだからですよ」

「いや……、だって本当になにもしてないし、待ってもいないし、そもそも変わってないですよ」

そう言うカズナの方を一切向かずに、机の上のパソコンのキーボードを指でたどったり、部屋のすみに取り付けられた監視カメラの角度を気にしながら、とんぼみみたいな人は早口ではっきりと話した。

「変わりましたとも。ここは別の場所になっているはずですよ。あなたにはわからないでしょうが、わたしよりはまだわかるはずですよ。わかってはあまり意味がないのですが、ご存知の通り、この作業はあなたの信頼がなければ成り立たない。そこに他の人の信頼が補助として加えられる。わたしは作業が成功し、終わった、と言うんですから、あなたは信じている。もちろん最初からではなく、何周もの繰り返しによる遠心力が働いているようなものですけど。パーンと飛び跳ねた先ですよ。今のあなたが。この街も、この会話も」

「じゃあ、もどれないんですか」

「はい。そもそも、あなたはどこにも行ってないから、もどりようもないでしょう。違いますか？ それでいいんですよ？ あなたはそう言いましたよ」

パソコンの画面で、カズナに契約書を見せようとしたけれど、何度も頷いて断った。

「それにしても変わった名前ですね」

「なにがですか？」

「シャライですよ」

「ああ、ニックネームだったと思います」

「だったって？」

「さすがに本名じゃないですよ。いつもそう呼んでいたんですけど、忘れたんです、由来。一年前に死んじゃって、本人にもなかなか聞けなかったから。今さらでしょう？ 電車の事故だったんですけど、ぼくが代わりに死ぬのが正しかったなって、そうあるべきだったなって、あれからずっと変わらずに思っちゃって」

男の人は途端に、退屈そうなとんぼの顔をはじめた。

「まあ、どこかに家を建てて、好きなことと好きな人だけをつれて行って暮らしていたら、すぐに死んでしまうでしょうからね。怖いことがあるからこそ長く生きられるし、一秒を長く感じられるんですよ」

「へえ」

「こうやって当たり前に死んだ人と生きた人が同じように歩いていて、けっこう頻繁にあなたみたいな人がやってきて死んだ人によるデータの介入を依頼する、そういうプログラムを最初に作った人が自分から長く生きたのかどうかくらいは知りたいですね。つまり他の人の家に住んでいるのか、それとも自分の家に他の人を住まわせているのか、どっちなんだろうという。

とはいえ別にどっちでも悪いことではまったくないから、いいんですけどね。矢印の先端の問題なわけ

で。どっちがどっちを向いているか。さっきの、好きなこととだけ暮らしていたらすぐに死んでしまうって話も、わたしのものじゃないですし。伝聞です」

カズナは代金として、船解体のアルバイトで稼いだ半年分のお金を支払い、また契約書を入力させられて、部屋を出た。今日は早起きをしたから、まだ時計を見ても午前中だったけれど、太陽はほとんど真上に来ていて、肌がギシギシと締めつけられる熱気があった。さっき買ったコーラを飲もうとしたら、もう飲み終わっていたから新しく買った。

来た時と同じ道を逆方向に歩いて行き、近所の公園のベンチに座った。隣では下半身の無いサラリーマンが発泡酒を飲んでいて、子どもたちがいろんな種類のすべり台や登り棒のあわさった遊具で、鬼ごっこをしていた。大きな犬もいっしょだった。金属の部分が日光でとても熱いから、触るたびに「うわあ！」

という声が聞こえた。犬が吠えた。すべり台を横から登ろうとする男の子の腕は三本あった。はやくに死んで親が生き返らせたんだな、と思った。でもそんなことを子どもたちは気にしていなかったし、みんな楽しそうに鬼から逃げるために走って跳んだ。犬が滑り台をすべった。

黒いノースリーブの背の高い女の人が、髪を振り乱しながら公園を対角線上に歩いて行った。野球のバットとテニスボールを持った中学生くらいの男の子が一人でやって来て、野球をするスペースは十分にあるくらい広い公園なのに、球技禁止と書かれた看板を見つけたらすぐに帰った。隣のサラリーマンがいつのまにかいなくなり、発泡酒の缶だけがベンチに二本残されていた。

暑さで皮膚の表面が内臓にまで染み込んだ。パチパチと弾ける熱が汗といっしょになって流れ出し、太陽の光が凍えるように感じられ、もっと耐えれば耐えるほど空気も体も同じ温度になっていくのがわかった。木製のベンチの釘の部分に触ってしまった。そこだけがなぜか冷たくて、指があまりの冷たさに関節とは逆の方向へ引きつったけれど、目をつぶっていたから気づけなかった。

サイレンがけたたましく鳴って、子どもたちは一斉に帰っていった。公園には誰もいなくなり、蝉の声だけが途切れなかった。もう正午をまわって昼食の時間だった。ベンチにも遊具にも人がいない公園はほんの少しだけ涼しくなったけれど、また一時から子どもたちが集まってきて最高気温は三十三度を超えた。

たぶん昨日の食パンが二切れ残っていたから、どこにもよらずに帰った。アパートの部屋ではわたしがピザソースとチーズを使ってピザトーストを作っていた。カズナが帰ってきた時にはもう焼きあがり、ベットに腰かけてぼんやり公園を見つめていた。

「ごめん、はやく焼きすぎちゃった」

「いいよ、夏だし」

エアコンをきかせていたから、汗が冷えて鳥肌がたった。わたしはずっと部屋にいたからちょうどよかったけれど、設定温度を一度だけ上げてくれた。下げなくていいよ、とカズナが言った。

うだるような暑さはスイッチが入ったように変わらず街を重たくさせ、道路のずっと先をきらきらと揺らがせていた。八歳のころ友達に、あれは蜃気楼なんだよと言うと、本当に揺れてるに決まってるだろ、と怒られたことがあった。今日もカズナは午前中の大学の授業が終わって、海の方に向かう電車に乗った。三日前から北の地方の島と島を結んでいた古い連絡船を解体していた。夕方には解体自体の作業は終わり、少し内陸にある市場に部品を半分運んで夜になった。高く売れそうなものはなかった。二十年前のレーダーとエンジンくらいだった。家につく八時ごろにはくたくたで、お腹もほとんど減っていなかった。

「だいじょうぶなの？ 食べた方がいいよ、やっぱり」

とわたしが言ったら、

「まあ、そうだね」

と言って、シャワーをしてからミートソースのパスタを食べた。全部食べて、半分だけ嘔吐した。暑くて扇風機の風に直接あたりながら眠った。それでも朝起きると汗でベトベトになるからシャワーをした。それからキウイフルーツを二人で食べた。

「シャライはさ、どこも痛んだりとかしてない？」

フォークでスライスしたキウイフルーツを刺しながら言った。

「どうしたの、突然」

「いや、べつにどうってことはないんだけどさ」

「だいじょうぶだよ」

「ならいいや」

今日もまた午前中の授業に一コマ出て、それからバイトに行く日だった。わたしは掃除機をかけて、一週間ぶりに部屋の隅々まで雑巾がけをした。デスクランプの上につもったほこりが気になっていた。台所も掃除した。コンロのまわりが油で汚れていた。空気の入替えのためにエアコンをつけずにいたのが十時まで続いたから、全身汗だくで、蝉の声しか聞こえなくなり、掃除が終わるとすぐにエアコンをつけてからシャワーをしても、浴室の中で蝉の声が聞こえていた。全身すっきりして着替えると、寒いくらい密閉された室内で、何もやることがなくなった。部屋にはわたししかいなかった。

九時半にはカズナが慌てて家を出た。いつもの時間で行けば、十分の遅刻だった。何気なく掃除機を止めて見送ろうとすると、昼はコンビニでサンドイッチを買うから安心して、と言われた。きっと買うとしても栄養補助食品のゼリーくらいなんだろうな、と思い、

「きちんと食べてね！」

と言って手を振った。カズナの手はドアノブを握ったままだった。

朝の授業では端の方に座ってほとんど眠っていた。宗教の授業なのに脳科学の映像を見せられた。とても古い映像だった。七時間も眠ったのにまだ眠いなんて笑ってしまった。

授業が終わると駅前のコンビニで買ったコーラを飲みながら電車を待った。駅構内には同じ大学の生徒しかいないようだったのに、人であふれかえっていた。電車に無理やり押し込められ、つり革さえも握らずに立っていると、四つ目の大きな駅で大半の人が降りてくれて、カズナは座席に座れた。また眠って、そのまま海につくまで眠っていたら、カズナと同じ場所で働く人たちが少しずつ電車に乗り込み、降りる人はほとんどおらず、海につくころには最初と同じ満員になった。

電車のアナウンスで起きると、目の前に見慣れた赤と白のスニーカーにジーパンが見えていた。ツヅキだった。

「また寝不足？」

「すごく寝たんだけどね」

「たまってるんだよ、今までのツケが」

「なんのことだよ」

電車が停車してカズナもツヅキも、一齐に乗客が降りていった。眠ったままの人は駅員に起こされて、感謝を言う暇もなく電車から追い出された。空っぽになった車両はすぐに路線を変え、さっき走ってきた線路を走っていった。ここが終着駅だった。次の電車が駅にやってきて、カズナが乗っていたときよりもずっと多い人数が開いた扉からこぼれ出た。カズナは徒歩で五分の距離に仕事場があったけれど、船解体場は海岸をどこまでも埋めつくすほどたくさんあり、一番大きな解体場では名前も聞いたことのない国から持ち込まれた新品同様の豪華客船が、設計ミスによる浸水の不安で、先端から垂直に切り崩されていた。

どこの解体場がどの船を買い取るかは、週に一度開かれる合同競売会で決められた。こんなに価値のある客船は年に一度あるかないかだったから、船解体場の人たちだけでなく街のすみずみで話題になった。当日は二つの解体場が争って一方が破格の値段で買い取り、三日後には郵便受けに客船のやってくる日時を知らせるビラが入っていた。屋台が並んだり、格安で船の部品が買える即売会が開かれたり、救急ボートが当たるビンゴ大会も開かれて、大にぎわいのイベントだった。カズナはわたしを誘おうかとも思ったけれど、わたしはあまり船が好きじゃないのを知っていたから、わたしの前で話題に出すことはなかった。「あんなにばかでかくイベントみたいなのをやられたら、恥ずかしくなっちゃうよな」

とツヅキが言った。四日前の大騒ぎは嘘のようにおさまり、海岸にはいつもより廃油で汚れていない海と、散らばったままの屋台のゴミが残されていた。カズナはかき氷の容器を踏みつけると、赤いシロップが容器の中で散り、バキッと音をたててへこみ、金属の破片を踏みつけたかと思って慌てて足を跳びあげた。ツヅキが笑った。この前わたしが買ってあげた黒と青のサンダルを履いていた。よく間違えて金属を踏んでしまい、足がすばっと切れたり錆が傷口から血液に入って足が腐った。

「あの日はさ、行ったの？」

ツヅキが船を焼き切るバーナーの準備をしながら聞いた。海に浮かぶ廃油に引火すれば火が海を覆った。

「いや、シャライはああいうの嫌いだからね。そっちは？」

「行ったに決まってんじゃない、というかむしろ連れてかれたよ」

「だと思った」

ツヅキは街の中心から少し西側にずれたあたりの、線路そばの古い一軒家に住んでいた。親戚が安くツヅキに貸してくれた。木造で、電車が通るたびに食器棚が揺れ、一ヶ月に一回は食器棚が倒れる。食器はぜんぶ漆かプラスチックにして、陶器は最初に買っていたものが残らず割れてしまったからもうひとつもない。魚の絵が描かれた白い器も去年の十月に割れてしまい、いっしょに住んでいる〇×さんはお気に入りだったのに悲しかった。ツヅキはうまく慰められずに次の日、二人で新しい食器を買いに行った。庭に植えるビオラの苗も六つ買った。黄色と白と紫が二つずつだった。〇×さんは

「パンジーとビオラって、同じ品種だけれど大きい方がパンジーで、小さい方がビオラなんだよ」

と言っていた。庭は日当たりが悪く、水はけも悪いから横長の鉢植えに植えて、大抵すぐに枯れてしまった。太陽が出ているときにだけ咲き、太陽が沈めばしぼむ赤いポーチユラカの花も、一度も咲くことなく草のまま枯れた。でも〇×さんは水をあげ続け、苗を買い続けた。朝起きると庭で水をやる姿を毎日見かけた。〇×さんには耳が片一方なかった。そのせいで電車が近づく音にあまり気づけなかった。

〇×さんは自転車で学校から帰る高校のときに、左折した小さい車に轢かれて死んだ。左耳が道路に叩きつけられて飛び散った。大きい破片が一つと細かな破片が三つになった。ツヅキは偽物の耳をつけられた〇×さんを葬式で見て、事故処理の人が拾った耳が欲しいと思った。カズナが生き返らせた〇×さんに

は耳が左だけなかった。○×さんはほとんど気にしていなかったし、ツヅキも今ではもともと耳なんてないと思っていた。慣れれば逆に鏡を見るのがうれしくなった。

もちろんあった方がかわいいと思って、葬式のときに片耳を欲しいと考えていたわけじゃなかった。逆に耳がたくさんあるよりかはいいと思っていた。そういう、体の部分の多い人は少なくなかった。むしろ健康に生まれてくる方が珍しくはなくても幸運に近くて、街を歩いていたら腕が三本ある人や、足がタコみたいになっている人をこの前も見た。すれ違う人はなにも違和感がないことはなくても、そんなにわざわざ反応しない。服は三本腕用のTシャツを着ているし、ズボンは丈の長いスカートみたいだった。どれも普通にデパートで売っていた。バーゲンの時期になると値下げもしていた。

数十年前に死んだ人を生き返らせるプログラムが発明されてから、街には死んだことがないと言える人の方が少なかった。大きな交通事故にあった経験のある人や、昨日の記憶がとびとびになっている人、夢の中で知らない過去を思い出してしまう人などはもちろんのこと、一度だって怪我をした覚えのない人や、長生きが自慢の人、生まれてすぐの赤ん坊だって、もしかしたら生き返ったかもしれない体に組み替えられてしまったし、それがイヤでイヤで気持ちが悪く、わたしたちをゾンビと呼ぶ人たちが集まって暮らしている場所も世界にはあるらしかったけれど、行ったことはなかった。このゾンビやろうめ！ プログラムは生き返らせるその人の体よりも、生活する街の方に強く働きかけるらしいから、もしも自分が少なくとも一度、場合によっては何十回も死んでいるかもしれないことを考えると、自分の体を決して捨てられないように、街を出ていくことも許されたりしなかった。この街で死に、また生まれ、今でも歩き続けていると誰もが信じていた。カズナも自分が死んでいるのかもしれないしなかった。わたしもだったし、ツヅキもそうだった。

きっとツヅキがいなくても○×さんは誰かに生き返らせてもらっただろうと、カズナは思っている、そんな誰かが一人だって思いつかなかった。それ以前に、カズナは○×さんが死んだことの証拠も確信も持っていなくて、ツヅキは○×さんが死んだなんてほとんど思っていないし、わたしは○×さんと何度か駅ですれちがっていたけれど、左耳がないわたしと同じ年くらいの女の子が麦わら帽子をかぶってベンチに座っていても、左耳が帽子の影に隠れて見えないし、直接会ったことがないから○×さんだと信じることができなかった。電車が来ても○×さんは電車に乗らずに、真夏で熱せられた青いベンチに座ったまま、冷たいラムネを首元に当てて涼しそうだった。

「年上だっけ？」

と家に帰ってカズナに聞いてみた。

「同じ年じゃないの？」

神経科学の本を読みながら言った。小さいころからそういう本が好きだった。

「じゃあツヅキも？」

「あー、そうだっけ。いや違うや、ツヅキは一歳年上」

「高校の同級生じゃなかったの」

「そうだけど、あれ？ いやでも○×さんは同じ年なはず」

「ツヅキがどこかで遅れたのかな。それとも○×さんが早くなった？」

「○×さんはぼくらと同じ年なんだから、ずれたとしたらツヅキだと思うけど」

「なんで？」

カズナはそんなふうになんか言っていたのを思い出して、今から年上の人に対しての言葉遣いにしたって仕方がないのだろうけれど、ようやく慣れてきたのにまたツヅキに対して気まづくなってしまった。ツヅキはカズナと同じ時期にこの仕事についた。すぐに親しくなったカズナが一歳年下だとわかって、妙に気をつかわれるのはイヤだから、ツヅキは

「同じ年だと思っていいよ」

と言った。カズナは

「そうですね」

と口元だけが笑って言った。次の日には同い年のような言葉使いに変わっていたけれど、少し気を抜けば敬語を使ってしまいそうだった。ツヅキはすごく自然な会話ができうれしかった。冗談も言った。今では他の人にはほとんど言わない〇×さんの耳のことまで言っていた。〇×さんはカズナについての話を聞いて、

「仲のいい人がいてよかったね」

と言った。本当にそうだと思う。なるべく右側に語りかけるようにしていた。ツヅキから見て〇×さんの左の顔に向かってはっきりと口にした。時々そのことを忘れて右の顔に小さな声で話すと、カエルのアイロンビーズにニス塗っている〇×さんは真剣な横顔で筆を細かく動かしているだけだったから、その度に〇×さんの右隣に近づいて、もう一度なげない表情で言った。するとなんでもなかったかのように〇×さんが筆を止めてこっちを向いた。

「ほら、ニスを塗ったからたぶんまた壊れたりしないよ」

「そうだね、前のやつ、すぐに折っちゃってごめんね。くれるの？」

「そのためにやってるんじゃない！」

ツヅキは抱えるバーナーに点火して、船の甲板の白い塗装のはがれたフェンスを右から順番に切断しはじめた。カエルは焦げ茶色のウエストバックの外ポケットに、携帯電話といっしょに入っていた。火花が船の一箇所を輝かした。カズナは船から外れたフェンスを水面に落とすと、水しぶきが船の赤い側面の中央あたりにまで高く跳ねて、貼りついてたフジツボの群れにかかり、オレンジ色の野球帽をかぶったアルバイトの学生が黙々とフェンスを海水から引き上げた。いつもなら満潮の時間帯を見計らって全速力で船を浜辺に陸揚げし、それからの解体になるのに、今回は別の班が解体している漁船が手間取っていて浜辺が使えず、仕方なく浅瀬の方で解体することになっていた。まだ干潮だからいいものの、満潮に近づくと解体したパーツを海に投げ込んで引き上げてもらうことが難しくなってしまう、ペースも著しく落ちてカズナが帰ってくるのが遅くなる。時給での支払いでもないから、日給が変わらずに毎月振り込まれる。わたしとカズナの生活にはそこまでお金がかかっていないけれど、そのうち新しいカメラのレンズが欲しくなるし、わたしは靴にもうすぐ穴があいてしまうし、お気に入りのカフェの玄米カレーが毎日食べたいし、何十年もそうやっていることはたぶんすごくつらい。

この船も四十年くらい前には最新型の連絡船として、行き場のない島の人々の生活手段になるため、造船所で組み立てられて、進水し、はるばる島までやって来た。それ以前にも当然、一世代前の連絡船は港と港を行き来していて、一日に二十回以上往復した。学校は比較的大きめの方の島にしかなく、小さめの方の島の子どもたちは通学するために船の定期券を買った。子どもたちは電車に乗ることが一度もないまま高校生になることも多いから、島の外の街の高校に通うとき、電車の乗り方がわからないんじゃないかと思ってこわかった。実際、改札口で切符を渡したり通したりする意味がわからず、体の動きとしてはもちろん真似できても、高校を卒業するまで結局その仕組みが理解できていなかった。もしも島と島を結ぶ交通手段が船じゃなくて線路が走り、電車が通っていたならどれだけいいだろう、港に駅員がいて、海水を弾きながら走る車内で停車駅のアナウンスを聞き、切符を握りしめていたらどれだけいいだろうと思ってしまった。電車は壊れかけのエンジンをガタガタと鳴らす年寄りの連絡船よりも数倍かっこよくて、速かったし、無駄がなかった。決められた最短直線距離をまっすぐ走っていき、途中で降りることさえできた。なにより電車はたった一車両しかないことなんてなかった。そのかわり一度でもなにかを轆くとしばらく止まった。

この前も、大学の最寄駅で地下鉄が人を轆いて、一時間も駅が立ち入り禁止になったから大学に遅刻した友達がいた。使ったことのないバスを使うと、同じように不慣れな人たちでバス停はごった返して、

タクシーが行き交い、渋滞の中ずっと車内でつり革に掴まっていた。後ろの方から汗の染み込んだバスタオルみたいな臭いがして、男なのか女なのかわからない汚れたスーツ姿の人がぼつんと座っていた。きっと腐ってるんだ、と友達が思った。死んだことを誰もが認めてしまった体は、関節から少しずつほどけて落ち、痛みもないから包帯で隠していると、湿気がたまって緑色に変色し、見れば指先は動いているのに肘のあたりが溶けてなくなっている。慌てて病院に行っても戸籍情報が見つからず、ますます街からも自分からも棄てられて骨格さえゆがむ。眼球が穴の中でころころと歩く度に転がり、舌が口から流れ出そうになるのを必死に唇で抑えた。でもそんなことをしても次の日には、かすれたガラスの染みとしてその場に付着し、色素はいつまでも雨風に晒されることなく残り続ける。バスの座席の染みは、路線をぐるぐると巡って、そこに座る人のズボンやスカートの繊維に入り込み、一生洗っても取れない皮膚の体温の赤みにまで成長する。だからあれ以来、二度目のバスには乗っていない。

それは地下鉄も同じで、授業が終わって帰るその一時間前にはもうすでに死体の掃除や機器の点検が終わり、数分の遅延はあるものの、いつも通りの速度と間隔で地下鉄の運行が回っていたけれど、改札をくぐる前から緊張していた。Twitter で人身事故があったこと、それが大学生の女の人らしいことが騒がれた。名前や年齢のような具体的な情報があまりにないから、たぶん噂でしかないのはわかって、誰かが死んでそのことが街中の人々に知られつつあるのは間違いなかった。

階段を降り、電車のくぐもった車輪の音が聞こえ、空気が出口に向かって勢いよく舞い上がると、飛び散った肉片の臭いが髪の毛や鞆の内側をすり抜けた。駅構内には多いどころか、むしろほんの少しだけ閑散とした人々が壁際にもたれかかりながら、携帯電話で事故に関しての情報を調べていたけれど、ほとんど見つからなかった。重力が左にぴったり十五度傾いた。一番奥まで見えないくらい長々としたホームの中央あたりまで歩こうとして、頭上には監視カメラの映像が三つあり、右側の画面に映っていた青いTシャツにサンダルを履いた眼鏡の男の人が、腕を組みながら歩いてきて、大きくなったかと思ったら画面を外れた。真ん中の画面の奥からまた小さく歩いてきたから、友達はそのまま倒れてしまいそうなくらい気持ちが悪くなってしまった。

ここで人が碎けて死んだのを生き返らせようとする人がいた。でも死んだのを、この地下鉄の駅も電車も、見たくなかったのを見ていた。大勢の乗客はぶつかった衝撃を受け入れたし、電車を待っていた人々は、もしかしたら電車が人を轢いてしまったのかもしれないと思う数分後には、電車が人を轢いてしまったと Twitter で話した。すべての時間の絡まり合いを一つずつほどいて炎症をおさめるのに、どれだけの繰り返しと健康な体が必要なのか、それを自分から望み、自分から提供する人が今ここにいるのかどうか、線路に落ちそうなギリギリの場所を綱渡りのように歩きながら向かいのホームを見ると、体のほとんど腐った女の人が立っていた。髪の毛を銀色に染めた、毛糸のカーディガンをはおった小柄な女の人だった。左右を向かず、前後にゆっくりと揺れながら、もうバランスが取れずに線路に落下した瞬間、電車がブレーキをかけながら通過し、はじめから碎けていた体は碎けた音を発しなかった。するりと液体に近い組成に変わり、線路の鉄が斑点模様で錆びついた状態でぐるりと震えた。乗客が降り、その倍くらいの数の人々が電車に乗り込んだ。

そのうち友達の正面からも電車がやってきて、電車の前面をじっと見つめていると、こっちからはガラスが黒くぼやけて見えるだけなのに、運転手からは車体に当たりそうなくらい線路に近い場所を歩く友達が見えて、警笛を鳴らした。全身がぐらりと傾きそうになるのをホームの側にとどめたから、電車と友達の進む距離が線路上で交わることなくすれちがった。運転手の体が影のように浮かび上がり、電車の車体の向こう側から悲鳴が聞こえたけれど、ブレーキ音が強すぎて友達には聞こえなかった。電車の窓際に座っていたわたしがこっちに向かって写真を撮った。カズナのカメラだった。見た目からするとあまりに重かった。

海岸から少し街の方へあがったところにある海岸と並行な形で走る道路は、解体場から運ばれてくる船の部品が毎日絶えることなく売られる店舗が両脇を連ねていて、大きな市場だった。二キロを超える距離を、たくさんのバラックと、五つに一つくらいは新築のプレハブが並び、中には三階建ての小さなデパートのような店舗もあった。昔からある今にも崩れそうなバラックは、船解体業者からすれば損しない金額で仕入れても、長い付き合いだから許される店舗もあれば、なんの抵抗もなく店をたたみ、路頭に迷った店主は線路脇の雑居ビルの一室に十数人単位で押し込められ、足の横に顔をおきながら床で眠り、その日ごとに課せられる、陸橋の上のゴミ拾いであったり、道路標識の設置であったりをしていただけれど、それも時間の問題だった。来年には今よりもたくさんの新しいプレハブが組み立てられて、その倍の数のバラックが着工から二日で更地になっていき、船解体業者との昔からの付き合いも、念入りに計算された仕入れルートには見劣りしてしまう。

なにより不衛生だった。長年の知識の積み上げは、生活するための第一なのだから、体の節々に毒として染み渡ることがうすうすわかったとしても、ネットで検索すればすぐにわかるようなことでも、これまでやってきたことなのだから昨日と同じ生活を続けるだけだと考えて繰り返しやり過ごせる。わたしがさっき前を通り過ぎたバラックは、黄色い塊に飲み込まれていた。五十センチ四方の布が何十枚も重ねられて紐でくくった一セットが、山のようにいくつも積み上げられているそれは、船の断熱材だった。あご髭の真っ白な、タンクトップ姿のおじいさんが地面に落ちている断熱材のかけらを両手でかき集め、包むように拾い上げて、足元の、雨に萎れた段ボール箱の中に入れて、ふわりと埃が舞い上がり、紙と紙をこすりあわせるような薄い咳が出た。断熱材としてアパートや自動車に再利用されるけれど、五年前くらいから首のあたりの調子がおかしいし、体に悪いのはわかっていた。内臓の内側のひだに絡みつき、変色させるという噂を客から聞いたその日からずっと咳が止まらない。おじいさんをまた生き返らせてくれる人なんてもういないのに、内臓を腐らせる話を聞いてしまったのを後悔しても、一人では淡々と受け止めることしかできなかった。

隣の店先には洗面台や便器が山積みになっていた。トラックの荷台に積んだ発電機が、カタカタと鳴りながら横を走っていった。学校帰りの女子高生が iPhone を見ながら歩いていた。その後ろには男子中学生が三人並んでアイスを食べていた。青と白と茶色だった。もう六時半を過ぎているけれど、明るい夕方だと思った。わたしはカズナのカメラを鞆にいれて、久しぶりにカズナを迎えに来ていた。ひどい夕立が来ると予報されていたのに、カズナは傘を持っていなかったから、わたしが傘を持って行くと言うと、「じゃあいつもの店で、ごめん」

とメールが届いた。

橋を渡った。川の下流の水辺には、くすんだ赤の救命ボートが細い紐で三十艘くらいつながっていた。白いものや黄色いものもあった。見慣れた光景だけれど、写真を撮った。短髪の女の人が一艘一艘を確認しながら上を飛び移っていき、後ろに向かって

「いくらですか？」

と大きく叫んだ。どこかから男の人が返事をした。はっきりと聞こえなかった。

錆びついた鎖や錨の山が道にまで広がっている店の中から、小さな子どもが二人走って出てきた。男の子なのか女の子なのかわからなかった。鉄の山に登って、頂上で指の輪っかをふたつ作り、双眼鏡のようにして海の方角を見つめた。豪華客船はすでに三分の一の大きさにまで解体されていた。母親が店から出てきて知らない言葉で子どもたちを呼んだ。わたしには叱っているように聞こえた。

「錨の先で指を切ったら腐る！ 危ないから降りる！」

鉄は溶かして、建築資材として再利用された。店の裏では、父親が泥だらけの船解体業者の男三人からリヤカー二台分の鎖を買いつけていた。そのままでは使いづらい、一度加工しないと再利用できない種類の商品を扱う店舗は、きれいなプレハブの建物が担っても仕方がないから、雑貨のようなものを扱う店舗よりも、新しい業者にとって変わられる不安が少ない気がした。もちろん、本人たちからすればそんなことは関係なかった。

コンビニにそっくりな店の中から出てきた二人の女の子の一方が、
「家でずっとヘルメットかぶっとくわ、明日」

と言って楽しそうだった。

約束の店には駅から二十分くらい歩いてやっとたどりついた。うまくしゃべれない若い女の人が店番をやっている雑貨店だった。古かった。本当なら濃い緑色のハンチング帽をかぶった眼鏡のおじいさんが店主なのに、一ヶ月前から姿を見せなくなっていた。行方不明かもしれないし、もう死んだのかもしれない。カズナが聞くと、数分後に大きく歪んだ抑揚で

「帰ってこない」

と女の人が言った。それから一ヶ月たった。もう慣れてしまった。昔の海外のロックバンドの大きすぎるTシャツばかり着ている女の人は、オダさんという名前で、長い髪がぼさぼさだから何歳かよくわからないけれど、別に病気だからうまくしゃべれないわけじゃなかった。ただ、しゃべるのが書くのと比べるとあまりに効率が悪いから、散らかった机にむかい、ノートパソコンのキーボードで文字を打って、それをわたしとカズナが覗き込んだ。いつもカズナとこの店で待ち合わせることにしていた。船の解体で出た部品を、それぞれにあった取引先に持ち込み、交渉して、得られた金額と証明書をメールで会社に送れば、その日の仕事はひとまず終わった。この雑貨店で売れるようなものがない日は諦めて、ツツキと二人で金属片をリヤカーに積み、汗だくになりながら市場までの砂利道を運んでいくと、リヤカーが空になるときは夜遅くなっていた。雑貨店にわざわざ寄ることもなく、疲れて電車で帰った。

ここで売れそうなものがある日は、今日の仕事が一秒も無駄になることなく受け取られた感じがして、うれしくなった。なるべく雑貨として売れそうな部品の担当をまわしてもらい、最後にこの雑貨店で仕事を終えた。そのまま店内を物色し、自分の解体した船のものであったり、他の業者の解体した船から出てきたものであったりする中から、週に一度は気に入ったものを買った。買わなくても見ているだけで落ちつけた。この街の外からやってきた古くて壊れたゴミたちが、カズナのまわりを取り囲んでいた。大きな木製の舵が立てかけられていたり、救命胴衣が埃をかぶって床に転がっていたりした。鉄板でできた筒の端に小さな穴が開けられてそこに細い紐を通してだけの簡単なネックレスや、数百個のカギが連なる朽ちかけたカギ束や、ガラスが曇り過ぎて中のロウソクの輪郭がほとんど見えないランプなどが、壁と壁を橋渡しするように天井近くに伸ばされた物干し竿からいくつも吊るされていた。わたしはオダさんに

「こんにちは」

とだけ挨拶して、店の奥に入って行った。返事がなかった。ちらりとレジのある一角を見てみると、目があった。安心して立ち止まり、鞆からカメラを取り出して、オダさんに向けた。反応がなかった。シャッターを切った。

「また写真送るね！」

カズナがまだ来ていないのは、メールが送られてこないからわかっていた。この前来たのはちょうど一週間前だった。そのときにはなかった拡声器のようなものがあった。鼠色の金属の円錐形を横にした形で、木の台に釘で打ちつけられている鉄板には

「濃霧号角（SH-180型）」

東京サイレン株式会社
FOG HORN (TYPE SH-180)
TOKYO SIREN CO.,LTD
TOKYO JAPAN」

と書かれていた。笛の後ろ側に回せる取っ手がついていて、回してみると、ウーン、ウーンという音が驚くくらい大きく店内に響いた。オダさんが机に顔を伏せた。店が根元から壊れるかと思った。わたしはなんだか楽しくなってきて、必死に取っ手を回し続けた。後ろの棚に並べてあるガラスの小さな瓶がいっせいにカタカタと震えた。隣の店先の鳥かごの中のカラスがカァカァ鳴いてうるさかった。回せば回すほど音は大きく深く響いた。

「なに鳴らしてるの？」

耳元で叫ばれた。びっくりして顔をあげると、カズナだった。

「メールしたけど気づかなかった？」

「あ、ごめん。ねえ、すごくない？」

「ちよっとうるさいけどね」

「これなんだろう」

「書いてるんじゃないの？」

「読めない」

「たぶん、ぶつかりそうになったときに鳴らすんだよ」

「へえ！ やっぱりすごいね」

「たぶんね」

カズナはオダさんを見た。キーボードでなにかを打っていた。青いポロシャツを着た太ったおじさんが店に入り、お客さんだと思った。鼻が削れていて二つの穴があいているだけだった。きよろきよろと店内を見渡すとすぐに出ていった。

カズナがオダさんのパソコンを覗き込んだ。テキストボックスが左隅に縦長くひらかれていて、次々と文字列が入力されていた。右側はウェブブラウザで、世界各国のきれいな蜘蛛の生態系についての動画が無音で再生され、画質が粗かった。蜘蛛についての文章を書いているようだった。わたしも覗き込むと、オダさんはエンターキーを押し続け、改行が表示されているテキストボックスを埋めつくすと、短く一瞬で文章を打って手を止めた。

「今日はなにもないんですか？」

わたしはカズナを見た。

「うん、昨日のもので今回の船は終わりだね。あとは鉄くずばかり。今日はきちんと客として来てるよ」

「昨日も来たの？」

「壊れた方位磁石とかライトとかくらいしかなかったけどね。最近はそのかい客船の中のものとかで入荷が大変？」

カズナはオダさんの年齢がよくわからないけれど、タメ口だな、と思った。わたしは敬語を使った。

「そうでもないですよ、あの船の解体で出たものは一つ残らずうちみたいなボロボロの店には来ません。ぜんぶ大きな会社が仕入れて効率よく売り買いをします。わたしは無駄が多いです。前進がありません」

おもわず笑ってしまいそうになったけれど、やめた。動画では白い剥製のようないくつかの蜘蛛や、半透明の水飴のような青色をした小さな蜘蛛を、早口でにこにこしながら身振り手振りを大きくつけてしゃべる男の人が、ジャングルみたいなところで、たぶん説明していた。字幕がなかった。

「でも、ここきれいですよ！」

とわたしが言った。お世辞に聞こえるかもしれないけれど本当だった。

「まあ、またよさそうなものがあつたら持ってくるよ。ゴミみたいなのは持ってこない」

「ゴミって決めつけてたらダメじゃん」

「エビ、気をつけてくださいね」

オダさんはカズナに対しての文章を打つときも、わたしに対しての文章を打つときも、会話をするとき画面だけを見ているから、キーボードの動きやテキストボックスの文字列を、わたしとカズナは絶えず注意しておかないといけなかった。そうしないと、無視してしまいそうだった。

「エビって？」

とカズナが聞いた。

「知らないですか」

「知らない」

「ならいいです」

「え、言ってくださいよ」

とわたしが言った。いろんな蜘蛛の顔が拡大されて画面に映し出されていた。目がたくさんあつた。

「他の解体の人から聞いた話で、その人も他の人から聞いたらしいから、本当に噂なんですけれど、あの客船が来てから、エビが船にくっついて運ばれてくることが多くなつたらしくて」

「ああ、それはあるね。ぼくはないけれど」

「それで、ただのエビじゃなくて、危ないらしいです」

「なにがですか？」

「寄生するらしいです」

「なにに」

「人に」

「へえ」

いいな—それ、と思ったけれど、口に出したりはしなかった。

「皮膚のなかから食い破って生まれるのです。」

冗談ですけどね」

帰り道、雨は電車の中で降ったのに、歩いているときには一滴も降らなかった。ほとんど雲もないお天気雨みたいな夕立で、数分のあいだに集中して降った雨は、遠くから見ると巨大な円柱が街の上をすごい速度で通り過ぎて行くようだった。電車を降りたころには止んでいたから、別の電車に乗り換えて、街の外れの境界線にまで行ってみた。時々気が向いたら行っていた。夜に来るのは初めてのことだった。

南の終着駅で降りてから、三十分一回来る路線バスで少し坂道をのぼった先に、山の上を切り取るような形で開拓して作られた住宅街があり、その一角が街全体を見下ろす高台になっていた。先に来ていた猫が、夜だから暗くて色も柄もはっきりしないけれど、こっちを見て慌てて駆け出した。他には誰もいなかった。夕立が街の夜景を湿気で曇らせて、光が滲むように放射状に尖って見えた。カメラを構えた。ファインダーを覗いた。高層ビルがなかった。街中の百貨店の屋上にある観覧車が、青や緑に光って、渦がくるくる回る模様になったり、ギザギザに弾け飛ぶ模様になったりした。右手に見える海は、一枚のステンレスのように固まっていた。月がその上で欠けていた。街は動きが見えないのに、小刻みな点滅をしているようだった。光がくつつき、離れ、混じり合つて大きくなつたかと思つたら、消えてまた一つが小さく生まれた。そこに大きな光がぶつかった。カズナの家がどこにあるのか、だいたいの方角はわかつてうれしかった。写真に撮つた。

住宅街の反対側に向かつて、対角線上に歩いていくと、ある瞬間から家の土台の部分だけが並びはじめ

て、一気に視界が広がった。まだ着工していないのか、それともずっとこのままなのか決まっていなかった。五分くらい歩けば、家の土台さえもなくなって、区切られた土地しかなくなり、ついにはなにもなくなった。一本の赤いビニール紐が、二メートルおきに立てられた木の棒のあいだを繋いでいる境界線だけが、目の前にあった。その奥には、ジリジリという虫の鳴き声の重なり合いと、焦点のあわせられない暗闇が、壁に塗られた落書きみたいに平べったく映っていて、触ってみると、ゴムのように硬かった。

「おーい！」

とわたしが叫んだ。つられて、

「おーい！」

とカズナも叫んでみた。気持ちよかったけれど、すぐに近所迷惑なんじゃないかと思って、辺りを見渡してみても、家なんてどこにもあるわけがなかった。わたしが笑った。カズナに笑ったわけじゃなかった。わたしとカズナの両方に笑っていた。

「あっちに行きたいと思う？」

「またそれ？」

「うん、行きたい？」

「ぼくはいいよ」

「なんで？」

「なんでって、だめなの？」

「うん」

「どうして」

「いやだから！」

○×さんは、ミシンで猫を作っていた。三センチ隣にはかき氷が作られた。クリーム色の布地に赤いフェルトや黄色いフェルトを切って縫いつけ、きれいにした。壁にかかっているカレンダーが去年の八月で止まっていた。一枚破いて、裏に蛍光ペンでメロンを描いた。蟬を三匹描いた。メロンの網目で女の子がちょうちよを捕まえるように絵を動かした。メロンの中に閉じ込められたちょうちよがうれしそうだった。冷蔵庫の中のメロンを一口食べた。ツヅキが三日くらい前に誰かからもらってきた。切り分けると熟していなかったからずっと待っていた。

ツヅキは一昨日から帰っていなかった。iPhoneの地図で海岸あたりのツヅキのいる解体場を探して、衛星写真を見た。廃油と海水が混ざって泥のようになった海岸で、こぶしほどにも太い縄紐を三十人くらいの人々が、一メートル間隔で肩に担ぎ、解体中の貨物船まで運んでいた。一人一人の顔がわかるくらい画像を拡大した。頭が四角くモザイク状に切り取られてしまった。廃油が水たまりのようにきらきらと虹色に輝き、太陽が真上を通り過ぎてもっと高くなろうとしていた。海がものすごく熱そうだった。ツヅキもカズナも、いくら夏とはいえ疲れてきただろうけれど、四隻の船が焦るように海岸に押し寄せていた。早く解体しないと、次の船が来られない。大変そうなのはすぐにわかった。四十通くらいメールをしたのに返事がなかった。Twitterでも呟いていなかった。電話をすると、電波は届いているらしいし、電源も切れていないなら、この街のどこかにいた。でも、それは携帯電話であって、ツヅキじゃなかった。メロンを一人で半分食べると気持ちが悪くなった。歯を磨いた。歯磨き粉の味は好きな方だった。

寝転がって歯磨きをしているときに、だんだんと歯磨き粉が喉の方に降りてきて、これを飲んだら死ぬかもしれないと思ったことがあった。歯磨きにかかる時間が長かった。磨く順番は、小学生のころに給食のあと必ず見せられた歯磨きの映像と同じだった。ポコポコとか、ピコピコとかいう楽しい音楽の流れる中で、白衣を着た無表情な女の人がこっちを見て、頷いてから歯と歯茎だけのリアルな模型の口を開き、奥から手前へと、一言も言わずに大きな歯ブラシで丁寧な磨いた。女の人左手の薬指には指輪がついていた。磨き終わると、またカメラが引き、正面を向いて頷いた。毎日見ていたから、ほとんどの人が映像なんて見ずに好き勝手に歯を磨いた。でも、映像が終わるまで、いっせいに立ち上がり洗面所に歩いていくことがないのは変わらなかった。それが終われば昼休みだった。一日に三回は歯を磨いた。ツヅキにまた電話をしても出なかった。暑くなってきた。エアコンはもうついてた。

今日は昨日よりも少しは涼しいと思った。寒くはなかった。仕事が大変なとき、ツヅキとカズナは鞆を海岸の休憩室に置いてきた。体をなるべく軽くしたかった。鞆の中でiPhoneが鳴っているのは知っていた。電話に出る気がどうしても湧かなかった。休憩所は本当に狭いから、エアコンがすぐに効いた。壁際にブラウン管のテレビがあった。お昼のニュースが誰も見ていないのに流れていた。ものすごく古いテレビだったから、画面の中の映像が斜め右上の方に並行にずれていて、ニュースが流れていたりすれば右上にテロップが出たときに見えないから、映像がずれていることがわかった。どうやってこんなずれ方をするのかわからなかった。それ以外は普通に見られた。

一日に三回、基本的には休んでいた。一度に全員が休むと休憩室に半分も入れないから、こういう日に昼休みが昼時に来るのは幸運だった。三時ごろに一度、夕方ごろにもう一度休んだ。熱中症にならないため、スポーツ飲料水を飲まされた。油と泥まみれになって乾いたがさがさの手でペットボトルを掴むと、ぬるついてペットボトルを落としてしまった。

コンビニで買ったサンドイッチのレタスがどんどん萎びていった。

空からヘリコプターの音が聞こえた。すぐに止んだ。空ではそっくりな黒い鳥が二羽、追いかけてたり追

いかけられたりしていた。あまりにそっくりすぎて、くるくると回転しているだけのように見えた。

外は日差しが今日も変わらず強かった。○×さんは庭でポーチユラカに水をやり、飼っていたとかげにこおろぎをあげた。一日三匹食べるところを、その日は五匹食べた。そのころはまだ爬虫類が飛び抜けて好きだった。いつも花の苗を買いに行くホームセンターのペットショップコーナーで、熱帯魚の水槽といっしょに並べられていたのを、見つけた四日後には買っていた。死んだら庭に埋めなくちゃいけないんだよ、とツツキに言われて後悔した。子どものころ、庭の物干し竿の下がお墓だった。虫が好きだった○×さんは、虫だけじゃなくてハムスターまでそこに埋めることにしていた。金魚も埋めた。カマキリの卵を学校の帰り道に見つけて、持って帰った。図鑑では春になると花火のように子どもがたくさん出てきて、カマキリでいっぱいになる。その年の冬は本当に寒かった。○×さんは空いていた青色の虫かごに卵を入れ、庭の軒下に置いて水をやった。春になってもカマキリの卵は生まれずに、どんどん乾燥して軽くなった。夏になると黴が生えた。炎天下にさらされながら、錆びついたスコップで広く浅い穴を掘って、その日の朝に死んだオニヤンマといっしょに埋めた。二日後、友だちと行った川で捕まえられたホタルを牛乳パックに入れていたら死んだから、また埋めた。穴を掘りながら、ここがカマキリの卵とオニヤンマを埋めた場所だったことに気がついた。あたり一面をできるだけ掘り返してみた。カマキリもオニヤンマもどこにもいなかった。おじいちゃんみたいに焼かなくても消えるんだと思い、お母さんに言うと、そうだね、と言った。

立ち上がり、壁を見るととかげがいた。水槽を振り返った。そこにもとかげがいた。種類が違った。ゆっくり近づくと、大きさがどんどん縮んでいき、それは○×さんのとかげじゃないやもりだった。目がかわいかった。真っ黒だった。どこを見ているのかわからなかった。手で捕まえようとしたら落ちて垣根の下に隠れ、その向こう側では古紙回収業者のトラックが歩くより遅いスピードで、回収する古紙の種類を言いながら家の前を進んで行った。線路に電車が来た。駅には止まらず、急行だから一瞬で次の駅についた。いつも耳が裂けそうになってしまう。

ゆっくり歩くと体温に包まれているようで気持ちよかった。

仕事がひとまず終わるには四日かかった。

カズナはシャワーをして、ようやく家に帰れると思った。仕事場の洗濯機で洗ったTシャツと短パンに着替えると、ツツキに声をかけた。返事がなかった。眠っているようだった。仕方がなかった。他にもたくさんの人が、声をかけても揺すっても目を開けることがなかった。

一人で電車に乗った。午後の一時だった。昨日、メールが来ていた。ハルからだった。カズナはいつも降りる駅の二つ前で降りて、めったに乗らない路線に乗り換えた。電車の中には誰もいなかったし、誰も乗って来なかった。

降りた駅にも人はいなかった。駅員もいないけれど、それは自動改札だからで、むしろ駅員がいるところを見たことがなかった。

しばらく歩かないといけなかった。ここ数日でじわじわと最高気温が上がっていた。湿度も上がった。猛スピードで細い道を走るバスにカズナが轢かれそうになっていた。危なかった。木造の民家の軒下の蜘蛛の巣に蟬が引っかかり、顔だけが白い糸でぐるぐるまきにされていたけれど、蜘蛛はいなかった。

表通りに出ると、道端にゴミ袋が三つあった。大、中、小、それぞれに

「誰？」

「誰？」

「誰？」

とマジックで大きく書かれた紙が貼り付けられていた。ガードレールにも紙が貼られ、
「水、土、以外の燃えるゴミ提出禁止！」

と書かれていた。もう少し先には、緑色のビニールに包まれた塊が二メートル間隔でいくつもあった。

「防災用土嚢」

と黄色い紙に黒い文字で書かれていた。男の子が母親と父親に、高校の正門前で写真を撮られていた。ピースをしながら、

「やだよー」

と言った。高校は夏休みだった。

五叉路を渡るのに信号を二回待った。一回は無視した。少し前までただの交差点だと思っていたのに、数えてみると道が五本あったから、五叉路だった。車が二台しか通らなかった。赤いランドセルの小学生とすれ違った。Tシャツの袖から覗く腕は、肉が削げ落ち、肘や手首の関節がとがった金属の蝶番になっているのが皮膚の表面にはっきりと浮き上がっていた。閉店したばかりのガソリンスタンドの前を腰の振り返ったおばあさんが空と平行の頭を抱えながら、右足を前に出し、左足を横に揃え、と何度も繰り返すことでなんとか進んでいた。

線路と道路の立体交差点の左脇を歩いた。すぐ横には粘土のような緑色をした球状のガスタンクが二つあった。周囲をぐるりと階段が巻いていたのに、誰もいなかった。浮き上がった道路の下は涼しい砂地になっていた。コンクリートの柱にかっこいい文字がスプレーで描かれていてカラフルだった。印刷したのかと思った。英語じゃないのに読めなかった。車輪のない自転車が、砂に半分だけ埋れたようにフェンスに立てかけられていた。線路は六本くらいあって、その上を通るために歩道橋の階段をのぼって車道と同じ高さにまで上がった。ここから電車が動いているところを見たことがなかった。巨大なタイヤのトラックが、カズナを追い越して先に地上についた。線路を越えると階段を降り、車道もゆっくりと元の高さにもどった。

橙色の壁の細長い家の角を曲がって、賽の目に広がる段ボールのような住宅街に入ると、車が二台止めてある駐車場のある一戸建ての家に左右を挟まれて、二階建ての黒ずんだ白いアパートがあった。敷地の木の幹に蟻の列が長々と這っていた。カマキリの死体だった。下から上に運んでいた。

門をくぐり、奥へと並んでいる部屋の手前から三番目だったような気がした。二番目の部屋のドアが軋みながら開いてカズナにぶつかった。ぴしりとスーツを着た短髪の男の人が出てきた。息が臭いし、何度も何度も頭を下げて謝るから、じゃあぶつからなければいいのに、と思った。

三番目の部屋のチャイムを鳴らそうとすると、またドアが開いた。

「どうぞ」

薄く開いた中からハルが言った。カズナが驚いた。

「なんでわかったの？」

「聞こえるって」

なんとなくわかってはいた。ハルは白と黒の横縞のショートパンツに、ねずみ色のパーカーを着ていた。髪の毛の先を黄色のタオルで縛り、水滴が落ちないようにしていた。シャワーを浴びたばかりだった。

「お酒、飲む？」

ハルが冷蔵庫をあけた。ビールが二本あった。部屋は散らかっていた。

「いや、いいや」

「飲まないの？」

「ぼく強いけど、今日はいい」

「なんでそんなこと言うの？」

「気分だって」

じゃあわたしは飲むよ、と言って缶をあけ、コップにつがず、すぐに飲みはじめた。それから台所へ行っ

て、残りをコップに注いだ。

「だいじょうぶ？」

とカズナが言った。

ハルは台所にある桃の皮を剥きはじめた。

「桃食べる？」

「どこのやつ」

「知らない。こっちきて」

ハルはでこぼこに剥いた桃を渡した。冷たかった。親指と人差し指で挟み、くるくると回してみた。一瞬でもう一つの皮を剥き、かぶりつくと、カズナもつられてかぶりついた。透明な果汁があごを伝い、首元にまで垂れ、二人は慌てて流し場に窮屈そうに顔を伸ばしたから、肩がぶつかった。桃は甘かった。赤い果肉のなかで絡まるように白く生えた繊維が下の前歯につまり、親指の爪で取りたかった。

「ねえ、それで、だいじょうぶなの？」

「なにが」

「いや、だってメールで……」

「ああ、そう。

死んだんだよね」

「わかってるけど、なんで生き返らせないの？」

ハルは三分の一くらいの果肉を残したまま、生ゴミ入れに投げ込んだ。手を洗い、ビールを飲んだ。カズナも食べ終え、手を洗った。桃の匂いが爪と指のあいだに染み込んでしまった。

ハルのひいおじいさんが死んだ。

「お金？」

「違うって」

「じゃあなんで」

「だからさ、もうそういうのだいぶつきあいきれないんだけどね」

ベッドの枕元の上、目覚まし時計のすぐ右の壁にバツタがいた。触覚がものすごく長かった。体の三倍くらいはあったのに、右の真ん中の足と後ろ足がなかった。半透明の体の先に、ビーズのような黒い目がついていた。触覚だけがゆらゆらと揺れた。カズナの視線に気づき、ハルもそちらを見たけれど、すぐに二人とも別のところを見つめた。バツタが少し左の後ろ足を伸ばした。

「ノートがあるの」

机の上に散らばっているのが、それだった。ふつうの大学ノートが三冊に、手帳が六冊あった。年代ごとに分けられていた。

「日記でね。本当はもっとあったらしいんだけど、引き取り手がいないからって、わたしの知らないうちに燃やしたみたい。これらは後から見つかったやつで。だからまだ見つかるかもしれないんだけどさ。おもしろいことは書いてないよ」

開いてみると、ボールペンで日付と天気とその日なにをしたか、どこへ行ったか、なにを見たか、誰から電話があったか、世間でなにが騒がれたかがひたすら事実だけ書かれていた。末尾に「三」や「別」や「宮」とあるのはたぶん看護師のこと、「大」や「〇」や「少」とあるのは便通のことだと思うけれど、他にもノートごとに末尾の記号は変わっていった。ひいおじいさんはハルの生まれる前から病院で暮らしていた。やさしかった。ある日となりのベッドの人が急死した。きっと脳梗塞だった。手をあわせた。野球は三連敗した。

ヒラタさんから電話があった。次の日に会った。電車に乗り、橋を渡り、海を見てから電車で帰ると上

りよりも安くてびっくりした。回転寿司を食べた。映画を見た。同じ映画を十年後の同じ場所で二回見た。図書館のロビーで話した森田さんがおもしろかった。地震があった。戦争はない方がよかった。武田さんから柿をもらった。森田さんとまた図書館で出くわした。食欲があつてご飯をぜんぶ食べた。みかんをもらった。干物をもらった。ハルの母親とハルの話をした。Mさんと電話した。Mさんと待ち合わせした。Mさんが帰りたいと言ったから帰った。Mさんには長生きして欲しかった。

「ぜんぜんヒラタさんも武田さんもMさんも、というか森田さんも知らないんだよね。それはそうなんだけどさ、まだその時に生まれてすらいなかったし。でもこうやって読んでると、ただただ今日なにをしてなにがあったかばかりが書かれているから、わたしはそれを読んで、わたしのなかでひいじいちゃんに動いてもらえるかもなあって思ったりするんだよね。それでその先で、急にひいじいちゃんがわたしと会ったりしてすごくびっくりしたいなあって。

写真見せてもらったんだけど、昔の、血がつながってるのかすらよくわからないくらいの人たちがみんな写真撮ってて。ボロボロの、今にも粉になりそうなくらいの写真だったけれど、川の橋の前で、わたしそこに行ったことあるんだよね。有名な場所だから。写真も撮ったし、今もあるし、わたしがそこにいて、その人たちもそこにいて、同じようにたくさんの人がそこで写真を撮ったわけだから、すごいなあって。わたしのなかか空っぽになって、そこにいろんな人が入り込んで、わたしを使って元気にしてくれるのが一番かもしれないなあってね。

別れ際にはあちゃんが、
『あの写真あるでしょう？ ハルを抱いてたやつ。あのときおじいさんが、赤ん坊はこんなにやわらかいのかって言ったんよ。あの人は子どもがいなかったから』
って。

わたしもひいじいちゃんも、変な顔してたんだよね」

ハルのもう一人の、本当のひいおじいさんは四十八歳で死んだ。結核だった。戦争のときに軍艦の設計図を描き、偉くて、英語を話せた。ひいおじいさんの兄だった。戦争が終わり、妻のために都会で働かず田舎に帰り、慣れない農業をして体を壊した。妻は一生、夫の好きなようにさせてあげなかったことを悔やんで、娘に言った。娘はその娘の、さらにその娘のハルに写真を見せた。それは死んだ日、娘のおばあさんが兄弟たちや母親や、そのころはまだ叔父だったハルのひいおじいさんといっしょに家の前で撮ったものだった。笑って、と言われたからおばあさんだけが笑った。

「エアコンの掃除するから、手伝ってよ」

この部屋を借りるときに最初からついてきたエアコンだった。もう一年半前のことになるけれど、一度も掃除したことがなかった。

カズナはイスの上に立ち、前面をあけて、二枚のフィルターを引っ張り出した。中を見るのは初めてだった。全体的に黄ばんでいた。ほつれた髪の毛のような繊維や、大きな蠅のような虫が細かな網目の中で黄土色に染まり、固まっていた。化石のようだった。埃がいくつかベッドに落ちた。ハルはフィルターを受け取ると、慎重にベランダに出て、濡らした雑巾で拭いた。ベランダは隣の戸建てに阻まれて一日のうちの今だけしか日差しが届かず、影になったまま一年中湿っていた。

網戸越しにカズナの声が聞こえた。

「最近、隣の部屋から泣き声が聞こえてさ」

「ねこ？」

「子どもだと思うんだけど」

「アパートだよ」

「うん」

「ビールとタバコ取って」

あとライターも、と言いかけて、ポケットにさっき入れたのを思い出した。タバコは机の上のビールの横にあった。半分くらい入っていた。部屋の外から網戸越しに見ても、暗くて何かが動いていることくらいしかわからなかった。

網戸が開いてカズナからタバコとビールを受け取った。ハルは一瞬戸惑いながら、ほとんど残っていなかったビールを飲み干して、

「ごめん、空き缶ちょうだい。流しにあるから」

と言った。自分がコップに注いでいたのを忘れていた。いつも缶からそのまま飲んでばかりいた。コップと引き換えに渡された空き缶を、ベランダの手すりにおいて、ようやくタバコが吸えた。

カズナが網戸を閉めた。

「夜泣き？」

とハルが聞いた。タバコのおいが部屋に入った気がした。

「そういうときもある。シャライが昼間も泣いてるって言った」

「あ、そう」

むかいの家のカーテンに人影がうつり、すぐに離れた。女だった。すごく太っていた。

「それがさ、毎日決まった間隔で泣くんだよね。決まった時間とかじゃなくて、決まった間隔。泣き声が、そう、途切れ途切れに」

「夫婦なの？」

「知らない。すれ違ったとしてもどこの部屋の人かわからない。でも泣き声は隣だよ、壁に耳を当てたらすごくよく聞こえた」

「子ども欲しいな」

「健康に悪いよ」

タバコを空き缶の中に押し込んで、部屋にもどった。カズナは iPhone を見ていた。メールが来てたよ、とカズナが言った。ベッドの枕元においてあった携帯電話を見てみた。大昔の友達だった。名前を見ても顔がわからないし、本文がなかった。

アパートを出たころには、もう夕方だった。また線路を越えるために階段を上った。車の通行量が増えていた。途中の駐車場で拾った石を歩道橋の真ん中から落としてみた。きれいな石だった。電車に当たることはなかった。線路のレールに当たったらしく、金属音がしたけれど、小さくて、後ろを走る車のタイヤの摩擦音の方がずっと大きかった。

帰りだから反対側だった。ガスタンクは片側にしかなく、こっち側には自動車の修理工場があった。潰れた車が積み重なっていた。新品のような赤い車が勢いよく工場から出てきて、作業服を着たおじさんがこっそりあくびをした。雨が降りそうな気がした。

軒下の蜘蛛の巣では、大きな蜘蛛が帰ってきていて、白と黒と黄色の横縞模様の体を震わしながら蝉の腹を下からまさぐるように頭を突っ込んでいた。みしみしと音が鳴った。夕日に塗られた蜘蛛の巣が跳ね、蝉も跳ね、それよりかは小柄な蜘蛛も上下にぐらぐらと跳ねさせられた。なんで逃げないのかわからなかった。

気づけば蚊がたくさん足や腕を刺していた。

シャライにメールした。わたしから届いたメールが三つあった。どれも昨日のものだった。

カズナが帰ってきたころには、すっかり日が暮れてしまっていた。もっと早く帰ってくるつもりだった。申し訳ないなと思って、おそろおそろ玄関から

「帰ったよー」

と声をかけても返事がなかった。部屋の奥は真っ暗だった。靴を脱ぎながら、足元に空のペットボトルが三本置いてあることに気がついた。今日は月曜日だから、アパートの近くにペットボトルや瓶や缶の回収ボックスが設置される日だった。いつもならわたしが夕方ごろに忘れず捨ててに行った。ペットボトルは何ヶ月も前のもののように乾き切っていた。

カズナは靴を履きなおし、靴を床においた。ペットボトルを三本んで回収ボックスまで歩いて行った。もうすでに近所の人たちの捨てたペットボトルでいっぱいになっていた。ラベルがついたままのものがほとんどで、コーラやオレンジジュースの赤や黄色が、日の暮れた紫色の空気のなかでどれも同じように見えた。

無理やりペットボトルをボックスに入れるというより上にのせ、崩れないようにバランスを取ったけれど、一本落ちてしまった。そのままにして、アパートに戻りながらポケットの中のiPhoneを取り出すと、手の中でぐるりと回転して道路に画面の側から落ちた。パン、と短く丸い音がした。夜なのにサンバイザーをつけたままの女の人がこっちを振り返り、そのまま曲がり角を右に曲がって行った。

拾い上げてみたら、フロントガラスの右下から中央あたりまでが数ミリ浮き上がるくらいひび割れていて、むしろ部分的に剥がれかけていた。夢かと思った。そっと触った。ざらざらしていた。赤ん坊の泣き声が、アパートの前を歩くカズナのところにまで聞こえてきたけれど、そんなに大きくはないし、すぐに止んだ。

部屋にもどってもやっぱり真っ暗だった。ゆっくりと小さく寝息が聞こえた。デスクランプの明かりの下で、まだ動いているのが不思議なくらい画面が割れているのがわかった。机の上が埃だらけだった。明日どこかに修理に出そうと思った。左下に貼っていたカエルのシールをひとまず剥がしてみると、フロントガラスの奥の液晶部分にくっきりと影のようになってカエルの姿が張り付いたままだった。ネットで検索した。画面がよく見えないし、文字を入力するたびにすごい速度でガラスが落ちていき、机の上が埃とガラスの破片でいっぱいになっていた。親指にたくさんガラスが刺さった。埃を吸って咳き込んだからガラスが飛んだ。わたしはまだベットで眠っていて、部屋に電気はつけられなかった。なるべくはやく掃除機をかけなくちゃいけなかった。

朝起きてベッドから降り、思ったとおり足にガラスの破片が刺さったから、危ないなあ、と言った。暑かった。まだ夏だった。蝉がずっと鳴いていた。ベッドを振り返ると、布団もシーツも血まみれで、わたしのお腹に、子どもの頭くらいの大きさの穴が萎むようにあいていた。腸と肝臓の表面がこぼれ出て、皮膚の上に覆いかぶさり、カズナのTシャツも顔も、乾いた血で上から下まで赤黒かった。カズナの血は一滴もそこにはなかった。

まるでわたしが死んでいるようだった。

部屋の色合いが変わっているのはベッドのあたりだけで、他はほとんど変わりがなかった。ただ唯一、机の上が濡れていて、そこだけが光っていた。水槽が倒れていた。小さな水槽だった。濾過装置のぶくぶくと弾ける飛沫が聞こえない、夜のうちに地震で倒れたのかもしれない。小さいころよく学校の手洗いの蛇口から水道水を飲むと、ごくりと飲み込んだ瞬間にぐらっときた。首の中の神経がぎゅっと縮んだ。伝わらなくなった。何年も経ってから水を飲んでも平気だったのは、消毒液に強くなったからだった。

水槽にはエビが入っていた。焦茶色の砂利と、流木と、それに根を生やした酸素のための水草と、カルキ抜きした水と、透明なエビが十匹、ひげを左右交互に揺らしながら口をもぐもぐとさせていた。水中を飛んだりしていた。最初は三十匹いたのにもう死んだ。エビは脱皮を何度もする。脱皮をしたあとは体が柔らかい。熱帯魚をむかし飼っていたときには熱帯魚にあげる粒々のエサの食べ残しを、コリドラスとエビに食べてもらっていたけれど、今ではエビ専用のエサをあげる。

コリドラスは茶色い体が三角の、ドジョウの仲間だと思っていた。横から見たら少し歪な直角三角形、正面から見たらきれいな正三角形。これにもひげがあって、エビのような細く糸みたいに長いひげではなくて、太く短く根元でくっついている粗めの櫛のような、ドジョウの口によくついているひげがあった。それで地面を掘り返し、熱帯魚の糞とエサをすごく食べていた。エビも元気に食べた。卵を抱えているのもいたけれど、いくら水槽の壁面に顔をくっつけて見ないとわからないくらい透明で細かな小エビが増えたって、エビはどんどん死んでいった。脱皮をするたびに魚に食べられた。でも魚は死ぬとぶよぶよになって沈み、エビが群がってエビの塊になり、明日になると魚の骨格標本ができて水槽の底で漂う。それも次の日にはどこかにいってしまう。そうしたらまたホームセンターでエビと熱帯魚を買って温度調整をして、水槽に流し込んだ。エビは水面をふわふわと、足をばたつかせながら落ちていき、地面に不時着した。

その前に飼っていたザリガニは二匹飼っても一日で片方が足も手も頭もちぎられてもう片方に食べられるから、一匹だけにして飼っていたら、学校から帰るとお母さんが冬で寒いから水換えをするときもお湯の方がザリガニにとってうれしいだろう、と思って水槽の水の半分を、カルキ抜きした四十度の温かい水に変えて、ザリガニを入れたら水槽の底にたどりつく前に減速して止まって跳ね返って水面に浮かび上がった。死んだ！ カズナは死体を見ていないのに、お母さんの話を聞くだけで、空っぽの水槽を見るまでもなく、死んだとわかった。それ以来、ザリガニは飼っていなかった。四年後、熱帯魚を飼うときにも最初はエビなんていなかったのに、父親がエビを買ってきて、すごくいいものだから、とカズナの水槽に入れてしまった。それからエビを入れないといけないのだと知った。水が腐った。この話は前にもしたかもしれない。

カズナがエビを飼ったのは、ザリガニを含めると三度目のことだった。

○×さんだってカズナだって、みんな昔からいろんな生き物を飼おうとしていた。昆虫図鑑の巻末に自由研究の例や標本の作り方、進化学の歴史、学名の歴史などとあわせて、白黒の図入りで紹介されていた育て方や捕まえ方を、ひとつひとつ暗記するように繰り返し読み、図鑑を変え、また読み、そのページに書かれている生き物を探したり、偶然捕まえた生き物を調べて育てようとした。運動場のまんなかでテントウムシがいたから拾って手のひらでそっと包みこみ、教室の机の中にいつも置いてある牛乳パックに入れて持ち帰り、エサはアブラムシだから川原の菜の花の茎の根元にびっしりと群がるのを見つけて四十匹くらい集めたけれど、牛乳パックに入れて育てようとした虫はだいたいすぐに死んだ。ダンゴムシ、カミキリムシ、コガネムシ。

小学校の帰りにキャベツ畑があった。モンシロチョウがたくさん飛んでいて、上に下にぐらぐらと飛び、アオムシがいるんだろうなと思った。一玉に五匹はいた。黄色い帽子を脱いでアオムシを十匹入れ、畑を

壊さないように注意しながら畑を出て帰った。学校の行き帰りには一時間かかった。その間に三匹が潰れ、二匹が落ちた。家につくと生きているアオムシだけを虫かごにいれ、冷蔵庫の野菜室の奥にしなびたキャベツと人参を見つけた。もうアオムシが入っている虫かごは三つあった。物置においてあった。夏だから暑かった。

蛹になることはあっても、なかなか蝶にはなってくれなかった。アゲハ蝶を指でつまみ、虫かごに入るとバタバタと飛び回るからガラスケースの内側が鱗粉で曇り、アゲハ蝶の羽は鱗粉がとれて透明になった。トンボもセミも、カマキリの羽だって、ショウリョウバッタの足だって元にはもどらなかつた。死ねば次の虫を探した。わざわざ探さなくても虫なんていつでも見つけられた。凶鑑は家にも学校にもたくさんあって、トカゲやカエルや金魚やカメや、ハエやゴキブリやネズミまで育てることができた。ハムスターは二度飼っていた。二度とも同じ名前をつけた。背中毛が抜け、目から膿があふれ出し、容器の水をまわりに飛び散らせながら飲む日々が一ヶ月続いた朝になると死んでいた。

夜の台所にゴキブリがいて、父親がスプレー式の真っ赤な殺虫剤を吹きかけていた。夏休みに一人でいると、部屋に大きな蟻がいたから吹きかけてみると動きが急に速くなり、六本の足を好き勝手にじたばた動かしながら、踊るように萎み、潰れてしまった。震えていた。

殺虫剤を持って外に出た。草むらの上を蟻がたくさん這っていた。殺虫剤を吹きかけた。見えなかつた蟻たちがいっせいにでてきて、斜めに平行移動した。遠くにいたカマキリにも当たって、少しおどかしたくらいではびくともせずに指に穴をあけてくるカマキリが慌てて遠くへ逃げていき、葉っぱの上を飛ぼうとしながらうまく羽を広げられず、たたむこともできず、今にも足を踏み外して落ちそうになっていた。カマキリにかけつつもりはなかつたから、悲しかった。殺虫剤をエビにかけたらどうなるんだろう、蟻はまっすぐにしか進めなかつたのに斜めに歩いたから、カニは前に進む？ カズナはカニが前に進むなんて想像できなかつたのに、シャライが言った言葉を聞くと想像できたし、普通だと思った。

部屋にはエビの姿はもうなかつた。九匹が死に、一匹がここにはいなくなってしまうていた。

まだすぐそこにいるかもしれない、ついさっきのことだったかもしれない、そう思って玄関の扉を開けると、ほとんど同じタイミングで隣の部屋の扉が開き、六歳くらいの女の子が飛び出してきた。麦わら帽子をかぶっていた。こっちを見ずに、そのまま階段を駆け下りていく女の子を追いかけようとする人は、隣の部屋から出てこなかつた。天気予報の天気図の音がした。扉はひとりで閉まった。

アパートの前の道路で、リュックを背負った自転車の男の子二人が、
「一問目が磁石なんだよね、それで二問目が……」

と言った。舌足らずな声で、車のクラクションが十秒続いて止まった。ゴミ収集車の男の人がまわりをぎよろぎよろ見ながらゴミを探していた。とりあえずエビがどこに行くのかを考えてみると、あまりによくわからないからとんぼの人の部屋しか思いつかず、わたしは羊羹のような血液を流しながらまばたきをしていた。

外は仕事に行く人でいっぱいだった。昨日見たサンバイザーの女の子の人が原付バイクに乗って通り過ぎ、学校に通うために走って駅に向かう中学生の女の子がころんだ。起き上がろうとしてころび、起きあがろうとしてまたころび、地面に少しずつつめりこんでいく。アパートのゴミ捨て場には、カップラーメンの容器の中にペンキの缶が潰れて押し込まれ、使わなくなつた小さな本棚と、新品みたいなかつこいい車椅子があつたから、くしゃみがとまらなかつた。近所のスーパーに勤めている、いつも疲れている顔のおばさんが、アパートの前を通り過ぎたから、おかしいなと思って後をつけると、コンビニで花火を買っていて、自転車で帰ろうとするから、よく見るとつかれている顔のおばさんではなくて、大学のまだ若い教授で、その後ろをおばさんが小走りについていった。カズナはそのとき大通りに出ていた。車がどんどん通り過ぎ、道の先には船が街のまんなか横たわっていた。軍艦だった。主砲が空に向かって十二本伸びていた。

部屋に帰ってきたカズナはわたしの顔を覗いてから、割れた iPhone を右ポケットに、財布を左ポケットに入れ、わたしを肩にかついで部屋をなんとか出たけれど、足が壁に何度もぶつかった。鍵をしめなくちゃ、とわたしが言っても聞かずにアパートのゴミ捨て場にある車椅子にわたしを乗せ、ゴミ収集車の男の人がやって来たから慌てて走った。わたしが転げ落ちそうになった。カズナがずり落ちた体を元にもどしてくれた。

ガラガラと大きな音をたててカズナとわたしが道路を走っていた。うるさいから音を切りたかった。体に力が入らなくて、だらりとした体勢で流れていくアスファルトの地面を見ていると、乾燥したべらべらのカマキリが蟻をのせながら風ですこしずつ動いていた。カズナの吐く息が聞こえた。耳たぶに汗が一滴落ちた。

あのビルには意外とすぐにつけたような気がした。カズナにとっては大変だっただろうけれど、カズナはわたしを車椅子のままビルの入り口にあるエレベーターに乗せ、扉が閉まるときにわたしの足がはさまった。蒸した藁のにおいでいっぱいだった。三階にまであがってすぐに扉は開き、廊下を進んで右側にある扉を叩くと、奥から甲高い声が聞こえた。なにを言っているのかわからなかった。廊下の奥から刈り上げの痩せこけたおばあさんが顔を出し、こっちを向いたまま停止していた。

部屋にはとんぼの人が座っていた。相変わらず薄暗かった。客が来ることをわかっていたみたいに平然とパソコンに向かっていて、しばらくしてからカズナを見た。

「エビが、逃げたんですよ」

早口な声でカズナが言った。

「エビ？ エビってなんですか？」

とんぼの人はあくまで驚いたりせずに、突然昨日の夕食の話でもされたみたいな顔をしていた。エアコンが強くなった。

「逃げたんですよ」

「どこから？」

「水槽か、この人の体か、どこか……」

カズナはわたしのおでこのあたりを指差した。

「はいはい、出てきたわけですね」

「そう、かな……」

「それは、バグかもしれませんね」

「バグ？ どういう意味ですか？」

わたしもカズナもなにか言うことができなくなった。とんぼの人は、うんうん、と頷きながらにやけていた。

誰も口を開かずに十分が過ぎ、小さな地震がやって来て、とんぼの人があくびをした。床下から誰かがシャワーをしている音が始まり、路地裏のトラックが後ろに下がっていった。バックします、バックします……

「そうですね、よくわからないままだと、すぐにこういう綻びが出てきてしまうから、説明が必要だったかもしれないですね。もうしわけありません、本当に、まったくね」

眠りかけていたカズナがビクッと起きた。眠っていたことを隠すために、大きく、はい、と言った。わたしの右足の親指がひくついた。

「まあ、簡単な話なんですよ。おわかりのように、このプログラムは、死んだ人も生きている人も同じように生かすよう機能するわけですが、これには、当然ながら、さまざまな仕組みが働いているのです。

死んだ人に歩いてもらうための第一歩として、すべての記録データとしてのログ、つまりは目の前のも

のや自分の直接経験したことだけでなく、間接的に見たものや聞いたもの、読んだもの、それから自分以外の人が考え想像したことまで、なるべく複数のログデータをまとめ、圧縮してひとつの体というフォルダへ押し込める過程において、なるべく齟齬や抵抗の生じないよう何度も繰り返し体の細部と世界のあいだの調整、アナグラムの組み替えを行うことで、死者を歩かせます。生きていたころの習慣や知覚の偏りを一度ほどいて再構成し、あらためて一回り大きなものとして、生死を受け入れたログデータの配列、世界をつくるわけです。蛹を通過する変体のようなものですね。単純に生きているだけだと、それは生しか受け取れず、死を知らないままにいますることになります。これでは一方的にイメージとしての死を塗りつけられても文句が言えません。勝手な想像ばかりが積もっていくわけです。死んでもそこにいるような死に方を許すには、すべてが表を向いて安定したカードを、裏にしたり表にしたりできるようにならなければなりません。

でも、一言でそういった傾向が塗り替えられるほど、世界は短い年数で組み立てられていないわけです。この街はたくさんの言葉が植えつけられ、組み合わせられ、弾けていくハードウェアです。そのなかで人々は動いています。全体を組み替える要因となるような新規のデータが存在できないわけでもないのですが、その新規性のもととなる理由や仕組みは、ほとんどの場合、街とは別の次元にあって、それはつまり新規データの周囲数メートルに限られた領域なわけです。いくら風景全体を変えようとしても、街のような巨大で厚みのある階層には届かない。いわば局地的な扱いをされてしまう。それでは新規性というより単なる例外に過ぎません。

かといって、街と個々のデータのあいだが絶対的に揺るぎのないものであるというわけでもなく、砂粒と校庭のグラウンドのように、もしくは蟻の巣と蟻一匹のように、往復運動が果てしなく反復を起こしている回路がある。街といえどもデータの集積体が変わりないわけですからね。だから一方ではとても頑丈と言えるのですが、もう一方ではとても緩く、もしもここにさえうまくつけこむことができれば、一気にパタパタとカードは裏返っていくわけなのです。

たとえば幽霊ですが、ガタガタと扉が鳴るだけなら風かもしれません。ですが、扉は頑丈だという情報や、今日は風なんて吹かない天気だったという情報や、はたまた逆にこのアパートにはかつて自殺者がいたという情報などが、扉の鳴る音に対し、幽霊が扉を揺らしている動作を付与します。窓に映る蛍光灯の光は外からこっちを覗いている幽霊になりますし、普段から疲れて痺れている肩や腕が、幽霊によって痺れさせられます。そこにはこれまで生きてきた街が、今生きている人々の目を通して、新しい動体としての幽霊を許していく流れがあります。ログデータの凝縮と組み替えですね。しかしこの段階では新規データとして受け入れられたとしても、街全体に満ち満ちたものではない。周囲数メートルの個人的な話なわけで、たとえばここに五人の人がいて、一人以外の誰も幽霊を信じていないなら、幽霊が生きることは難しくなるでしょう。幽霊を見た人は単なる例外と見なされます。ですが、ここで幽霊を見た人が数十人になって、幽霊を見る目の個人性が全体性にすり替わった瞬間、すべては実際に認知されるのと変わらないくらいの頑強な信頼に支えられて街の上で成立することになるでしょう。このとき幽霊は街をどうどうと歩けるようになっている。

見たという動作はこのようにして街に介入する代表的な組み替え回路のひとつですが、この回路は過去への働きかけの中で発見されることもあります。わたしが過去のわたしの感情を想像するとき、まるで目の前で泣いている人の感情をあつさりとししみとして想像するようなことが、過去への介入として生じる。わたしは子どものころに地震があったのですが、机の下に隠れながら、楽しいな、すごいな、と思っていました。でもそれは今のわたしが過去のわたしの感情を想像しているだけで、なんらの根拠もありえない。もうわたしは子どもではないのですから。しかし断定できてしまう。わたしはわたしですからね。幽霊を見るほどコストがかからずに断定できる。わたしはわたしがそうであったと信じられる範囲内で、自由に

わたしに介入することができる。この回路を過去のわたしから現在の他者へと引き伸ばし、さらには未来の自分や他者にまで引き伸ばすこと。それこそが複数のログを解体し、再びひとつの形に編纂することで行われる身体的アップデートであり、さらには街への介入の第一歩でもあります。周囲数メートルであったものを、周囲数キロ、さらには数万キロにできればできるほどよいのです。

一人の世界が生き返るためには、たくさんの反復によって集められた個別のログデータの集まりから、綿密に絡みあう地盤としての体が芽生えなければなりません。個人単位ではもちろん、腕や足や目といった部分単位でさえも、それぞれにとっての新しい情報と、既存の情報の、折りあいをつけるための組み替え、試行錯誤を経ることで初めて、情報は適度な量を保ちつつ絡まり合うことができる。いくら蓄積が必要だからといっても、矛盾した計算式がいくつも積み重なっているだけでは、互いに存在を打ち消しあい、なんらの効用も見出せません。この瞬間にとってあの瞬間はなんなのか、この部位にとってあの部位はなんなのか、そうした想像の憑依から、安定した地盤は得られるのです。これにはある種の妄信めいた事物判断が求められる。

断定的な信仰を通じての情報再編は、信じるに足る情報の蓄積がなにより必要で、それらが提供されさえすれば、さほど難しいこともなく情報の発信源を仮構することが可能です。アナグラムの導かれたデータの羅列を、本当は破損しているものであるにも関わらず、正しく運用されるべきものだと信じられるだけのさらなる情報。つまりは見間違いを促す方便ですね。ただ、これに限らず、すべての生き物というか物体が、断定的な信仰に支えられて初めて見つめられることができるという事実を考えてみれば、さほどの変わりもないと言えるかもしれません。むしろそこに活路を見出しています。矛盾であると判断することそのものを歪ませるわけです。

矛盾したものの見方というのは、指とてのひら、あばら骨と肺、一番地と二番地、親と子どもというような、隣あわせのデータのまとまり同士ではもちろんのこと、髪の毛とかかとの皮膚、北極と木星、数千年前に絶滅した昆虫と数十年後に生まれる少女というような、遠く離れて自律しているまとまり同士でさえあらわれてしまいます。逆ではありませんよ？　すぐ側にいればいるほど、同じ言葉を共有している安心がないと痛みを耐えられませんから。他人の体の分子たちの数万年後を気遣うことなんて到底できない。でも、世界は周囲数メートルに限られているわけではないことを誰もが知っているから、結局は生きていくためには、矛盾した情報を噛みあわせていく必要があります。矛盾した情報を噛みあわせるためには、それらとは異なる新たな情報が外部から与えられる必要があります。しかし外部は誰にとっても不確かなものです。新しいかどうかすらわからない。外に出てみたはずが、同じ敷地の中だった、ということもたくさんあります。言ってしまえば外部など存在せず、すべては反復の只中にあり、その形式的な組み合わせの中で、外部的なものが蜃気楼のように浮かび上がるとも考えられるでしょう。そのとき、なにが既存のものであり、なにが新しいものなのか、基準を考えなければいけません。

AとBが存在しているなかで、外からCがやってきたとします。Cが新しいものでないなら、AとBのどちらか一方に含まれるか、もしくはどちらにも含まれない例外として扱われるはずですよ？　この段階ではAとBのふたつのずれが際立ちます。ずれがなければAとBのふたつに別れる必要がありませんからね。Cはどっちに入るんだろう？　と考えることで、ずれはますますはっきりしていくわけです。でも、CがAにもBにも含まれず、かといって例外でもない、第三の項目としてあらわれたら。全体の風景が、AとBとCの三つを抱え込むものに変わり、それまであった『世界はAとBのどちらかに分別される、その他は例外だ』という考え方が失われて、代わりに『世界はAとBとCのどれかに分別される、その他は例外だ』という考え方が生まれる。こういうふうに言うと、なんだか情報量が増えたように感じるかもしれませんが、実は逆で、新しいタイプが得られたわけだから、これ以降は例外を減らし、より明確に世界を認知することができます。情報量の圧縮です。例外というものは、どのタイプにも含まれない、つまりAや

Bと矛盾した存在であるため、個別に見ることしかできない。すべてを個別に見られればいいですけど、そんなに大量の情報を処理することなんてなかなかできないから、結局は、見つめることなく放棄してしまう。既存の枠組みに落とし込めるわけですね。求めるべきは、タイプが増えていったことによる情報量の増大を処理できる体であって、個々のケースをむやみやたらに拾いあげようとする体ではない。AとBとその他、ではなく、AとBとCとDと……という具合になっていかなければなりません。

これはいわば信仰であり、また同時に、円滑なコミュニケーションのためにも重要となる要素のひとつです。海が赤く見える人と青く見える人が、同じ海について話すとき、風であったり音であったり匂いであったり、そこで暮らす生き物であったりといったものがまとめて色とともに『海』という一単語に収められるから、たとえ視覚情報が異なっていたとしても、互いの会話はスムーズに行われていきます。過去や未来といった時間的なものも同様に、現在の容器に収縮して初めて相互性を持ち始める。外部から供給される新規のタイプは、データごとの接続を助けていく関節のような役割を果たすことになるのです。

そしてそれは、事前の教育によるものもちろんありますが、なにより認知機関としての体が大きい。あ、ここでやっと体にもどってくるわけですね！ たとえば色でいえば、眼球の視神経には事前に七原色がプログラムされていて、大抵の人が赤に近い色をまとめて赤と呼びますし、赤に対しての認知を共有するのに抵抗がなくなります。暗闇は黒ですし、光は白です。このような先天的に備わっている体こそが、新規の情報の受容体、裏を返せば供給源となり、体という存在が相手と繋がってさえすれば個人的な視点などよりも圧倒的に重みのある新規性としての情報、タイプが個々の人間に与えられ、齟齬を起こさないデータの編纂を促していく。そうしてどちらが先というでもなく、一人の細胞、DNAひとつひとつのなかにためこまれてしまっていたばらばらなデータは、体をもとに接続し、個人の輪郭を獲得しながら、さらに上位では他の体、つまり自分以外の個体との情報の噛みあわせ、信頼の贈与を行い、その結果として集団にも個人にもなれるあなたが生まれ、街には赤信号が立てられます。

このような経緯から、複数のタイプによるデータの連結や再編成は、すべての再生プログラムの過程において、最も根幹にあることだといっても過言ではないわけですが、実はタイプの供給源であり、かつデータをまとめる単位としての体は、はっきりしたイメージを持つものでありながら、計算によってはじき出せるような地点にありません。かといって、曖昧などかにかにあるわけでもないのです。体ですから。街でも個人でもないどこか、しかし固定された地図上の一点に存在しているのが確かな場所。ただ測定できない。いつかはできるのかもしれないけれど、とりあえず今はできない。今回の不都合の原因も、おそらくここにあると思われます。体がどこにも見えないから、情報がどのように街で組み替えられ、ばらばらな要素を調停しているのか、よくわからない。それこそこの再生プログラムがなぜうまく機能しているのか、なぜこのプログラムを動かしている計算式が齟齬を孕まないのか、誰にも見当がつかないのです。見当がつかないけれど、使えてしまうから使っているだけなのです。おわかりですか？」

カズナは途中からとんぼの人のパソコンの画面ばかり見ていた。同じような色あいの惑星、銀河がとめどなく広がり続けていく宇宙の図が表示され、画面の右下のテキストボックスでは、文字入力の小さなカーソルが点滅している以外は動きがなかった。暗い部屋で明るいものを見るのは目が疲れると思った。本当にわかっているなら人にもわかりやすく説明できるはずだった。

「よくわかりません」

「言っていることが？」

「そうですね……」

カズナは困ったように笑いながら、自分の膝を見ていた。慌てて出てきたから、ジーパンだった。わたしの傷口から黄色い膿が出てきて、キャミソールの水玉の水色と混じった。とんぼの人も笑っていた。

「そんなことでやっていけると思ってるんですか」

カズナを見て言うことはなかった。

カズナは自分の指先をひらひらと見て、五本の爪を確認し、それから、うーん、と唸ってから二度咳をした。

「えーっと、それは、見当はずれなことを言ってもうしわけないんですけど、やっぱりエビはどこからあふれ出ちゃったものなんですか」

とんぼの人の口が横に裂けた。ハハハハハ。

「なんでそんなにエビを気にかけているんですか？ あふれるってどういう？」

「いや……」

「まあ、いいです。近いところはあるかもしれませんが。なるべく情報の爆発は避けられた方がいい。もちろん、多少の過剰があっても、なんとか外部状況とのすりあわせや圧縮が行われ、破裂することなくひとつの個体として生きられるわけですが、場合によってはかなり強引な意識共有が必要となるため、腕の三本ある人や、下半身のない人、肝臓や血液型のない人の存在をいくらか許してしまうわけです。

こういったケースを、もともと生まれつきそうである、という方々と混同してはいけません。あくまで再生に多少の不都合があっても現実でありうるようにできてしまう、というただそれだけの話です。それまで頭がひとつだった人がふたつになる、それも生まれつきそうであったかのようにそうなる、という奇妙な時間ベクトルのねじれが重要なのであって、たとえば再生プログラムが一般化した今では腕のない人が歩いていても特に誰も気にしませんが、昔はひどく気にしていたらしい、というような、注視としての有から無への逆転、完全な塗り替え。物理的な対象そのものは変わらないのに、街における存在の様相は極端なほどに変化し、かつての差別的な健常者視点は、もはや存在しえないほどに思えてしまう。そのように街というデータの集積が再編された。この意味では、物理的な異変が起こったとも言えるでしょう。なぜなら、観測方法が変わったから。温度で物事を測っていたのが、高さで測るようになった、みたいなことですね。外的要因が、様相の表皮に染み込み、色や形を乱していく。その過程のなかで問題となるのは、次々と蓄積していくログの処理です。

時間が経つにつれて不要な、ゴミとしての古いデータが蓄積され、システムの歯車は回転をぎこちなくさせ、最終的には止まってしまう。そうなればこれまで無限かと思われるくらいに繰り返されてきた営みはぶつりと切れ、すべてに流れる基調音は終わり、わたしもあなたも再生不可能なデータのように、そこにあるまま放棄されることでしょう。ただ、そんなことはほとんどありえません。生きている限りね。不具合が起きる前に何度でも街は再編される。そんな覚えはないとおっしゃるかもしれませんが、これまで人々は物理的な移転に近いレベルでの街のアップデートを数万回も体験しています。その度に蓄積を引き継いで、生きなおしている。そのつど健康に日々を過ごせるよう自ら記憶を訂正してしまうわけですが、データのログとしてはもちろん痕跡として圧縮された形で残っています。だからわたしも知っている。こうしてあなたに話している。移転の事実を知らなくてもね。単なる痕跡だから、映像的に再生、体験することは叶いませんが、街は今や小刻みに移転しています。かつてのような安定はありません。その意味で、この街は根本からパンクしているとも言えるでしょう。

ですが、心配はありません。まだまだ周期的に余裕がありますし、小刻みになって悪いことはほとんどない。計算主体としての宇宙は遥か彼方まで続き、今も膨張しているのですから。街はどんどん回転するように移転していればいいわけです。むしろ問題なのは、そう、街ではなく個々の体の方です。個々の体におけるデータの齟齬が顕著なものになってしまえば、比率の違いというか、大人用の薬が子どもにとっての致命的な副作用をもたらすように、街ではありえなかったような大がかりな再編、物理的なレベルを超えた移転を行う必要が出てきますが、とはいえなかなか難しく、もし無理矢理に実行したとしても、結局はその生存を街が許すことができず、そもそも物理的に街を生きることができなくなる。新規データの話の

逆ですね。許容される範囲が周囲数メートル、数十センチ、数ミリになってしまえば、徐々に輪郭は曖昧になっていき、ついには皮膚が物理的に腐敗し溶けはじめる。それは肉体の死よりもはるかに重みのある、この世界の誕生したであろう数十万年前から脈々と受け継がれている死、存在の死への過程であり、どこにあるのかわからない体が土地との接点を失って、風船のように浮き上がり飛んで行ってしまうようなものなのです。見えないどこかで破裂して落ちる。だから街よりもそっちの方を問題とすべきです」

わたしの呼吸が荒くなってきた。机の目覚まし時計が鳴り、とんぼの人が一瞬で止めた。片足のない羊がジャンプした。

「でも、じゃあ、ここにある体はいったいなんなんですか？ どこにあるかわからないわけじゃなくて、ここにあるのは本当でしょう」

「それは、データの集まりの中でも特異な、例えて言うならアバターののようなものです」

「アバター？」

「はい。体がひとつだと言っても、その内側にはいくつかの層が存在しています。色つきガラスのようなものです。一枚一枚に赤や黄色で地図が描かれていて、それらがぎゅっと上下にくっつき、貼りつくことで上や下から透かして模様が見える。その模様が、どこにあるのかわからない街的な体であり、ガラスの一枚一枚が、ここにある体、つまりアバター的な体なわけです。全体から影響を受け、また一方でデータを供給する『いまここ』でもあるアバターとしての体。そして蓄積されていく個々のデータは、その場その場のログのようなもので、街に散らばったり、ひとつのアバターに集まったりするなかで、模様を描いたり、ガラスの色素になったり、上下で貼りつく接着剤のきっかけになったりする。街的な体ひとつの大規模編纂は難しいですが、ここにあるアバターの体ひとつの再編は、データの組み替えを用いれば比較的容易に可能であって、それこそが死者の再生なわけですね。いや、再生というよりその場その場での承認のような意味合いで可能であると言った方が正しいかもしれません。つまりよく言われるゾンビではなく、わたしたちは幽霊なのです。街が視認できた、そこに立っていられる幽霊なのです。わたしやあなたも含めてね」

「じゃあ、シャライもおせませすよね？ まえにやったように、もう一度やってくださいよ」

「それは難しいかもしれません」

「なんでですか」

「齟齬が大きすぎるからです。あなたは逃げ出すエビを信じているのでしょうか？ よくわかりませんが。過去のデータがその子の体をこぼれ出て街に現実化しようとしている。いや、もうあなたからしたら現実化してしまったも同然なのでしょう。あなたがこの子は生きてると信じるのがデータの齟齬を減らす大きな歯車だったわけですから、そこが失われてしまえばおしまいです。でも大丈夫、きっと死にませんよ」

「どうしてそんなことが言えるんです？

いいから傷口を縫ってくださいよ。それからエビを捕まえて……」

「いいですか、バグはなんの由来もなくあらわれるものではありません。しかしどこからあらわれたのかわからないことが多い。ログの蓄積がおかしなふうにつながってしまい、その結果として、死者が肉体を持った幽霊のように歩きはじめるのと同じように、エビに関するログが蓄積し、接続することでエビが歩きはじめ、歩く死者を前にして生者が死をはらむように、エビをはらむことだっけなきにしもあらずなわけです。そういうことなのです。

とはいえこのあたりは、思いつくまま話してしまっているだけですから、あなたからしてみれば、わたしの話は聞かないほうがいいでしょう。わかりましたか？ 聞かないでくださいね。あなたのためです」

そう言うと、とんぼの人はまた笑った。カズナも笑った。いえ、お気になさらず……

部屋の隅の監視カメラには、カズナとわたしだけがいる部屋のなかで、カズナだけが愛想笑をしている光景が映っていた。

外に出ると、夜が過ぎて朝がはじまってることに気づいた。そんなに長居したつもりはなかったのに、たったの一時間くらいで夜は過ぎ去っていた。涼しかった。夏が終わっていった。蝉が死んだ。木が一本だけ間違えて茶色になった。秋になれば、動物園の上ではトンビが三周し、ゾウがリンゴとわらを口にいっぱいずつめて鎖を鳴らし、アライグマの一匹が白内障の目で岩山をのぼっていく。

空には朝なのに星が一面に広がっていた。魚眼レンズのように真ん中が大きく、外側がぎゅっとなついていた。天の川のような白くぼやけたところがあった。思わず見ていると、五分に一度は流れ星が落ちた。点滅している星もあった。星座は目が悪くてよくわからなかったけれど、わたしが言うと、カズナもわかった。飛行機が左上を小さく飛んでいた。あっという間に消えて、また星だけになり、朝日が雲を照らすにつれ、入道雲があらわれて星を雲と雲の隙間の影に覆っていった。

車椅子の上で音もなく血を吐き、喉をつまらせてまぶたの裏側にも血液の塊がせり上がってくるなかで、あと一分、あと十秒経てば死ぬだろう生ぬるい意識が、わたしを通して分かれたエビが忘れられずにいるままだった。こういうことが、戻れない、夢の中で勝手に作られてしまった記憶かもしれないけれど、絶対に何度か経験したことがあった。病院で注射して、どこかから自分の腕や足に注ぎ込まれる筋肉のかけらが、まったく止めたくも動かしたくもないときに関節をぴくりと動かしてしまった。耳の中から目の中へ、さらにはこめかみの奥まで一本の氾濫しかけた川が流れ、いつも住んでいるはずのタガメやタニシやブラックバスの子どもたちが眠っているあいだに喉を通り、肺を通して腕の先の爪の隙間から干からびた標本としてぼろぼろと剥がれ落ちていく。だからエビは川を渡っているだけだった。脱皮の殻や、点線に似た足跡を、鼓膜や気管の粘膜に打ち込み、そのくせ後ろを振り向いたりせずひたすら旅をしている。ぜんぜん違った。家にいて水槽を眺めながら台風予報を探す毎日にエビがせっせと卵を産みつける。なによりエビを飼いたいと思いついたのは紛れもないカズナの方で、わたしはもちろんエビなんてそんなにかわいいものじゃないと考えていたはずなのに、いざ目の前にすると小さくてかわいくて水槽の間近に両目を寄せ、ふわふわと空を飛ぶエビはかわいいな、かわいいな、と何度も呟いていたから、後ろにいたカズナが笑った。「ね、かわいいでしょ。買ってよかったでしょ？」

「そうかもしれない。かわいいな！」

乗り気じゃないわたしをつれて街中の熱帯魚店に行った。この街では一番大きな店だった。最初は一人で駅を出て右側にある、本屋やギャラリーの入ってるデパートのすぐ近くに熱帯魚店があるらしく、地下だけれど試しに行ってみると魚は変な色だし店員は笑っているし、コオロギばかり売っているし、水槽も床もわずかな柔らかさを持っていたから、郊外にある別の店舗へわたしを連れていくことにした。同じ名前の店ではあったけれど、駐車場は何千台もの自転車が止まれるくらい広くて、海水に汚染された地域の小学校が運動会を行うのに毎年使い、その代わりに電車とバスでは徒歩も含めると片道二時間はかかってしまった。こっちの店が先にできて繁盛したから、街中の地下にも出店できた。

たしかに入る前からすごい品揃えだとわかって緊張してしまった。店舗がとめどなく真っ白で、硬く這いつくばり、店に近づくにつれて真上にある入道雲が、煙突からあふれる煙の垂直方向への行進に見えた。カズナは、思わず歩幅の間隔をもつれさせた。

入り口にあるガチャガチャのくらげに騒ぎながらも、静かな店内をまずはゆっくりと歩きはじめたわたしは、きれいな青紫色の光に染まった水槽のガラスを指でなぞると、ついてくる魚と逃げる魚がいたことをカズナに言って、カズナが見た。金魚もネオンテトラもヒトデもアロワナも、アリゲーター・ガーもタツノオトシゴもメダカも、死んでいる魚を数えて回ったら一人で悲しくなってきた。あ、いた！ あ、いた！と喜んでいたはずなのに。

エビはどこにいるの？ カズナはわたしのはしやぎようを適度にあしらいながら、もしかしたらいないかもしれないエビを探しつづけていた。いないはずはなかった。

「こっちのエビは？ きれいだよ」

わたしが指差したのは、エンゼルフィッシュの下を歩く赤と白の横縞のきれいでかわいいエビだった。陶器で作られているみたいだった。

「そっちは海水なんだよ。淡水でしか生きられないエビの方がいいよ」

それはきつと嘘だった。とても高いエビだった。カズナが探していたのはよく川にいたりする安くて淡水のミナミヌマエビだったし、昔のカズナが買っていたのも餌の掃除役としてのミナミヌマエビで、水槽

ではなく空気で破裂しそうなくらいいっぱいになった縦長のビニール袋のなかに、十四五〇〇円、三十四一五〇〇円の値札を貼られてワゴンにたくさん積まれた状態のまま売られていた。そうそうこれこれ！カズナはうれしそうだった。三十四匹は欲しいよね。わたしは手にとって見てみても、三十四匹はおろか、十匹すらもないようだったのに、数えたらいそうだった。

エビの袋をカゴに入れて二階に上がった。熱帯魚店は四階建てで、一階は熱帯魚や水草といった生き物、二階は水槽や濾過装置といった周辺機器、三階は熱帯魚に関する図鑑や雑誌、四階は魚や爬虫類のフィギュアを販売していた。屋上には車の教習所があった。カズナは三階や四階にも行きたかったけれど、わたしが行き帰りの徒歩やバスや電車で疲れきっていたから、また今度、図鑑やフィギュアのためだけにここに来ようと思った。

すごく小さい水槽、それこそ最初は使っていないガラスのコップでもいいかな、くらいに考えていたから、店にある一番小さな水槽、それでもティッシュの箱を三つ重ねたような大きさまでしかなかったのをひとつ選び、砂利を買い、濾過装置はどの大きさがいいんだろう？戸惑っているとわたしがすすすと店員の男の人に近寄り、カズナの前に連れてきた。

「えっと、この水槽にあう濾過装置ですか？なにを飼うんですか」

「エビです」

わたしがすぐに答え、カズナは少し恥ずかしそうだった。

店員の方がエビを飼う人の大半が選ぶ、砂利の下に敷くタイプの濾過装置を指差し、吸い込まれないんですか？というわたしの質問にもはっきりと「大丈夫です」と言った。どの濾過装置もカズナが選んだものよりずっと大きい水槽向けの濾過装置だった。

「他にもですね、たとえば……」

「え、これで問題とかないんですよね」

「あ、はい」

「じゃあこれにします」

わたしが店員の話を守るたびに店員の後ろでカズナが笑いを堪えているのがわかった。エアポンプも選んでもらった。じゃああとは、水質調整剤に、エビのエサ、温度計やヒーターは熱帯魚じゃないからいらないだろうし、それからレイアウトに関しては流木にくっついた状態のウィローモスを、苔みたいなやつだけれど、それを買えばいいとして、他にそうだな、蛍光灯はどうしよう。

「高いんでしょ？」

「まあね」

「エビはきつといらんよ」

「いや、水草が育たなくなる」

「水草はいるの？」

「いる」

「じゃあ今度、誕生日に買ってあげるから今日はもう帰ろうよ」

「ずっと先じゃん！」

カズナは三十分くらい棚の前をうろうろしたあと、蛍光灯は買わずに一階に降りて流木つきのウィローモスをカゴに入れ、レジで清算しているあいだ、わたしはイモリやカエルの水槽をまぶしそうに見つめながら、〇×さんのことや、動物園のことを、そんな記憶がそのときのわたしにはないからもちろん思い出したりはしなくても、どこかでそれとつながり、イモリやカエルを今までにないくらいかわいいもののように思っているのが誰が見てもはっきりとわかった。

また長々とした道のりをエビを死なせないようにゆっくり帰り、部屋につくと机の上を整理して水槽を

洗い、濾過装置を組み立て、そこでこの濾過装置はパイプが長すぎて水面を越えてしまうことに気づいたから、わたしが「あの店員め！」と怒り、カズナが「そうだ！」と言ってクローゼットの奥から工具箱を取り出して、細く薄っぺらなノコギリをわたしの目の前に掲げた。

「危ないよ！」

「これで切る」

わたしとカズナは濾過装置のパイプをノコギリでひたすら一時間切り続けた。パイプは二本が組み合わさっているから二本切らないといけないし、切りすぎると後戻りできないから少し切っては長さを確認し、カーペットの下にはプラスチックの粉がたくさん散らばって、後から掃除機をかけても二、三日は足にプラスチックの粉が張りついた。そのぶん、濾過装置が正常に作動すると二人はうれしかった。

それからわたしは毎日エビを眺め、エサをやり、一週間に一度は蒸発した分の水を追加した。蛍光灯は机の上のデスクランプをうまく屈めれば水槽全体が明るくなれた。ね、買わなくてもよかったでしょ？ 何日見てもエビに飽きることはなかった。カズナがなかなか船解体場から帰ってこないあいだも、わたしはひとりでエビの世話を続けていたから寂しくなかった。朝起きて顔を洗い、レトルトカレーと玉ねぎのみじん切りで作ったカレーリゾットとサプリメントを食べ、洗濯をし、掃除をしてからふと見つけた机の上の埃をつまむと、エビだった。きゅっと丸まり、鱗がぼろぼろと取れていくから死んだと思ったけれど、水面に離すと生きて、他のエビにつつかれていた。水槽には蓋があるし、その上にはカズナと行った恐竜展で買った二匹の恐竜もいたのに。白骨化したティランノサウルスと、その子どものような小ささのズケンティランヌス・マグヌス。ずっと昔、カズナの飼っていたネオンテトラがいつのまにか床に落ちていたことがあったのはこの水槽を買う前のことで、わたしとカズナはまだそのころいっしょにいたりはいなかったから、話を聞いて、絶対に嘘か勘違いだろうと思っていた。カズナしか知らないものを見られたようでうれしかった。

でも、そのエビは死んでしまったかもしれない。夜になってスーパーから帰ってきたときに見てみると、一匹のエビが砂利の上に横たわり、濾過装置の起こすやわらかな水流で少しずつ転がっていた。ネオンテトラとかグッピーが死んでも下にいるエビが群がりつついて食べるから、綿のようにほつれ、次の日には骨になり、死んだ二日目にはどこにもいなくなる。もちろんエビだって同じだよ。カズナが何度も飽きるくらい話してくれた言葉は、わたしがエビの死体を片づけようとするのをやんわりと止め、エビたちが死んだ一匹をかわりばんこに食べて透明なお腹を真っ赤に染めていくのを一人で見ながら、茹でた殻つきのエビとレタスのマリネを食べた。

「なんで死んだら赤くなるんだろう」

「熱帯魚のためにヒーターで水を温めてたからかと思ってたけど、違うみたいだね。今はふつうの水だし」

「スーパーのエビも生きてるエビもぜんぜん赤くないよね。スーパーのエビって死んでるの？」

「うん」

「そっか」

一ヶ月前にもエビが死んだときにそんな話をしていた。死んだら体の真ん中あたりから赤くなり、数時間後には全身が色づいて、誰にでも一目で死んだとわかった。頭から食べられ、胴体と尻尾だけになったエビは、水槽のなかにいるエビというよりは日頃よく食べるお皿の上のエビで、よく見ると細かな胞子のようなものがびっしりとくまなく生え、それでも気にせずエビたちはたくさんハサミで肉と肉を解いていき、バラバラになった繊維は、どれがゴミなのか、どれがエビなのか、だんだん見分けがつかなくなっていった。

エビは次の日の朝にも机の上に逃げだしていたから指でつまんで水面に落とすと、くるくるとまわりながら水草に引っかかって逆さまになり、飛び出す瞬間が見たいわたしは眠りづらくなってきたけれど、カ

ズナはそれでも帰ってこない。また失敗した！ エビは空に浮かぶ風船を見た。左から右へ、濾過装置の作動音が吐き出し、いくつも同じ方向に放射状に進んで行きながらぶつかったり、ぶつからなくてもふいに破裂した風船が表面の歪んだ室内を何百メートルも飛ばし、水面のきらきらとした光をほんの少しだけもっときらきらと光らせる。それがたくさんある。だいぶコツは掴めてきた、水草のてっぺんから全身を縮めたり伸ばしたり、足を波立たせて水槽のガラス壁に跳ね返り、みんなの視線を浴びながら水面の外に出る。もう何度試したことだったかも忘れてしまった。カズナがいない時を見計らっていなくなるつもりもなかった。上の方に行けば行くほど暖かい。わたしがいるのは水色や白色の部屋着や黒い髪の毛が水の中に差し込むことでエビたちにあらわされた。

もちろん、夜になれば電気は消えるし夢を見た。その日はたしか、街のはずれの今では埋め立てられた池の底で、飼われていたけれど大きくなりすぎたから逃がした亀やザリガニやブラックバスが泳ぐ下に沈みながら、泥や空き缶や苔や脱皮の殻といっしょに、地面をひたすら掘り進める日課をしていた。いつかはすごいものを掘り当てるとか、地球の裏側にたどりつくとかの期待はなくて、ただ毎日慣れ親しんだこの場所を掘り進めている記憶だけがあった。長い年月を積み重なってきた泥は柔らかく、どれだけその日にがんばっても、次の日になればどこをどう掘ったのか覚えていなかったし、数年後にはミキサ一車が列をなしてやってきて、水を抜かれた池のくぼみに泥とは違って固まるセメントを流し込む。黄色い工業機械が鉄骨を張り巡らせ、防寒材を縫いつけ、あれだけ濁っていた水中よりもさらにいっそう暗くなる視界に閉じ込めた。池を囲うオレンジ色のフェンスの注意書きには、十年前の七月から八月にかけて行われる工事の概要が説明され、あつという間にカズナの住んでいたアパートが立てられる。わたしがそこに住み始めるのはこのときのわたしじゃなかった。カズナは一人暮らしをして、食器もランチマットも食事のメニューもなるべく小さく少なくまとめあげる。大学を卒業し、地方に引っ越して喫茶店でわたしと一度会い、それっきり滅多なことで会ったりはせず、電車の事故でバラバラになったりもせずにきれいな人と結婚して子どもを名づけておじいさんになってカズナは死ぬ。宇宙にはたくさんの星がある。別の星ではまた別のカズナが生まれ変わってカズナとして生きていた。そこではカズナは十歳で死んでしまったからわたしとは会ったりしない。隣の星ではわたしが猫アレルギーだから仲良くなったりしない。もう一つ別の星、もう一つ別の星、と続いていくなかで真っ暗な宇宙が点々とした灯りに埋まっていく。隙間がなくなっていく。でも神様はそんなに下手じゃない、宇宙はどんどん膨張し、星は数えきれないくらいに増え、ときには宇宙船でやってきたり、望遠鏡で覗いてみたり、電波で数千年前の自分のおほようを聞いたりする。ここにいますかあなたはいますか？ はい大丈夫ですありがとうございます！ その言葉はエビのかたちをしていた。それをはっきりと聞き、わたしの言葉を翻訳して送り返した。この電波が届くには一万光年かかります。また、途中で星雲にぶつかったりするかもしれませんし、急激な温度変化でエビが死ぬかもしれませんし、はたまた道を迷ってここに帰ってきてしまうかもしれません。そのため、これから八十年間はずっとエビを発信し続けますがよろしいですか？ オーケー。わたしはエビの発信が五分間は正しく続けられていることを確認すると、それからパソコンの別の画面を開いて、こちらでは向こうの星の場所や色、気温、どれくらいの周期で夏がきて、どれくらいの周期で金環日食が空を飛ぶか、どれくらいの数の恐竜に毛が生えていたか、どれくらい正確にカエルが雨を降らせられるか、計算をはじめた。これにも数十年かかるけれど、そんなことは日常茶飯事だった。エビはその間も発信され続け、先に発信されたエビの何匹かは星にたどりつく。空からやってきたエビは大気圏での一時間の温度調整のすえ、ほとんどが海面に衝突してバラバラに砕けるところを、運よく海を走る線路の上に降りられた数匹だけが溺れなくて済んだ。解体される予定の船たちが横一本に列をなして海岸に近づくのを見ていた船解体場の人たちに気づかれることもなく、意思というよりも濃度勾配に従い高いところから低いところへと転がるように、海沿いの道までなんとか這い上がった。振り向けば海に突き出た細長いコンクリートの陸地のまんなかに、建設途中の建

物がふたつあり、黒い布に覆われたそれは薄く縦長いフロッピーディスクのようなビルで、手前には複雑骨折している格好のクレーン車が二台、それぞれのビルに黄色く絡まっていた。そのころにはもう海沿いには船の解体場だけでなく、赤いガスタンクが三つと、白いコンテナがたくさんある埋立地の工事現場が設けられ、その先にぼっかりと広がる野原には錆びついた茶色の巨大なパイプが上に四つ、横に数十、硬く大きな昆虫の巣のようにひとりで積み上がっていた。そのうちのひとつから、泥の塊がとめどなくあふれ出る。船が川を通るためにまんなかから可動式になっている赤い橋を渡り、狭い路地を海とは逆の方向へ進んでいくと誰もいない神社があった。猫が鳥居をのぼっていた。釣竿を持った住職が満足そうに笑って落ち葉を蹴った。潮のにおい、潮の風、波打ち寄せる砂浜の音が固定され、その直線から風景がどンドンと退き離れていくエビの遠くには、山と山の境目に発電所があって、その左右の斜面を二十個くらいの鉄塔が生えていた。手前は川で、緑だった。川沿いに白い病院のような建物がふたつ並び、屋上には三つずつおかれていた貯水タンクのうちのひとつで一夜を過ごしたこともあった。六つ中のひとつには水が入っておらず、三つは患者が安全に飲めるようにカルキがたくさん含まれた水が浄水場からいつも送られてきていて、そこに入ったらことごとく死に、生きられたのは残りのふたつで苔だらけの魚の死体と一緒に眠ったときだけだった。翌朝も川沿いに歩き続け、途中で線路を走る塊のような電車を見て、線路沿いに歩きはじめ、ようやく街についたのは三日後のことになってしまった。もう夜だからか、朝だからか、太陽がこれから上るのか沈むのか、もう八時間も太陽が道路の右上の電柱のまんなかの高さに止まり、それが建物の輪郭に隠れたり現れたりしていたし、雨だれのあとがびっしりと覆っている新聞販売店の隣には、一階がクリーニング店になっている青と白のタイル貼りのアパートがあって、その横の地域の図書館との間にある灰色の壁には、三メートルくらいの大きさのスニーカーの足跡が、白く滲んだ片足だけで残されていた。公園を歩いていると、目の前を歩いている白い服に黒い手提げ鞆の、シャライより少し年上の女の人が青い蓋のついたアリの巣の瓶を持っていた。それくらいだった。他に人とすれ違ったりしなかった。降り出した雨の中を神輿の音が練り歩いていたけれど、街の細い道々には子どもの声が聞こえたりしなかった。街の外れに来ていた。線路をたどるのもとつこの前にやめてしまい、空から眺めることも知らないからここが街の中心を遠ざける場所であることも知りたいたすら思わなかった。高速道路の入り口を示す緑色の掲示板が道路の上に橋のようにかかり、その上を三分の一スケールのモノレールが本物そっくりの速度で走っていく。池があり、蜜柑畑があり、その中に無人駅があるのを知った軌跡は、エビが小高い森にのぼっていく先で斜面に埋れたように建つUFOみたいな形の、でこぼことしたドームハウスに目が惹かれ立ち止まったとしても描かれ続け、絶えず八十年間、だんだんと先に進むにつれて薄く細くなっていく一本だけの宇宙の等高線として街を海から山へと貫き、自動車や蛍光灯の光が、その両脇を支えるために認識できないくらいの速度でゆっくりと動いていった。とても冷え込みはじめていた。一步一步を踏みしめるたびに落ち葉が割れ、熊は子どもを空に投げる儀式の生贄として捕まらないようにお腹のなかに隠そうとした。もう数十年ぶりの冬が来る、でもそれは新聞で二日間だけ取り上げられる異常気象として過ぎ去っていく、みんな我慢して袖の短い服を何枚もやぼったく重ね着して手袋をはめることになる、ドームハウスの二階では暖房が用意され、ほんの数日だけ凍える室内を朝起きてから夜寝るまでの十八時間ほど快適にした。だんだんと濡れた毛皮を触るのも痛くなってきたな。洗濯物を干してから、うー寒い寒いと石油ストーブの前にどっしり座ったおぼさんの大きな体に、鼻の皮がめくられて尻尾のちぎれた犬や、肋骨の左半分だけ覗くなかにねずみを飼っている三毛猫が近づき、爪で背中を引っ掻いた。おぼさんが犬の頭をしばいた。犬ががぶりと指に噛みついた。ぐわんぐわんと左右に振り回し、指を三本くらいは引きちぎってやろうとした。おぼさんはけらけらと笑って犬ごと石油ストーブに手をかざして芯から暖まった。後ろには、階段をのぼってきた○×さんが立っていた。まだ麦わら帽子をかぶっていた。

「すいません」

おばさんは振り向かずに犬の右耳を甘く噛んだ。とげとげの雲が天窓を二度も三度も往復した。

「すいません」

「なんだい、チャイムも鳴らさずに」

「それでもいいって玄関に書いてましたよ」

「ふうん、それで？」

「相談があるんですけど」

「手短に言いな。今わたしは熱があるんだよ。嘘だけれどね」

「ごめんなさい、人探しのことなんですけれど……」

「誰だい」

「友達です」

「名前は」

「えっと……、ツヅキです」

びやはははは、とおばさんがあまりに大きい声で笑ったから、犬が跳び、猫が転がり、階段に並べていた鉱物のコレクションのひとつが階段を駆けおりた。

「どこにいなくなったんだい」

「いなくなったというか、帰ってこないんです」

「だ、か、ら！ どこから！」

「船の解体場で働いてたはずなんです」

「ああ、あのミニチュアかい？」

「ミニチュアって？」

「海岸のあたりのことだろう」

「そうです」

「じゃあやっぱりミニチュアじゃないか。模型の解体場」

おばさんの日課は、死んだ犬猫たちにエサをあげ、それがきちんと食べられているのを確認することからはじまった。もしも三階建てのこのドームハウスに散りばめられた陶器のお皿に、エサを入れた三十分後にはエサが入っていなかったりすれば、おばさんですら犬猫の数や種類、誰が今日来て、誰がすでに去っていったのか正確にわからないから、もしかしたらエサを食べられずにいてしまう犬猫がいるかもしれないと、おばさんは毎日あらわれてはいなくなる死んだ犬猫たちのために八つある個室すべてと二階のリビングに犬猫それぞれのお皿をめぐって山盛りにして朝をはじめた。そして三十分後に残ったお皿のなかのエサをすべてきれいに回収し、また夜に同じことを繰り返した。犬猫たちはお腹がすけばすくほどとめどなく食べようとしてしまう、お腹が減っていないくとも明日や明後日のために今のうちから食べておこうとしてしまう。何匹の大型犬がいて、何匹の小型犬しかいないのか、少食の猫は何匹か、育ち盛りのやんちゃな男の子はまだいるのか、いつも平気な顔で黙っているようでも悩ましくはあるかわりに、エサが減っていればとりあえずは今日をひとまず終えることができるのだった。

それから掃除と洗濯を済ませ、すべての部屋の時計がずれていないかを確認し、リビングにおかれた五つのアコースティックギターの弦を一本ずつ鳴らしてから、昼前までにソファで三時間は眠った。首のないゴールデンレトリバーの子どもが階段を駆け上がったたり駆け下りたりするから、フローリングの表面を尖った二十個の爪がカラカラと揺らすのがドームハウス中に聞こえ、一階の玄関から見て左にある小さな一人用の部屋のベッドでは、丸顔の八つ子のシャム猫が、長生きしたからよぼよぼの子も、素早く空中で一回転する子も、生まれたばかりで目さえ開いていない子も、みんななかよくじゃれあったり噛みあったり跳ね回ったりしていた。一階に三部屋、二階に二部屋、三階に三部屋あり、そのうちの六部屋にはベッドが二つ、一部屋には三つ、ここだけが一つだった。今では犬猫たちが昼寝をしたり、もぐったり、枕に顔をこすりつけたりするくらいしかなかったけれど、昔は高台の自然あふれる宿泊施設として、観光客のあいだでひっそりと有名だったから、ベッドだっていつでも毛が一本もついておらず、犬猫アレルギーの人でも大きないびきの夢を見ることができた。

昼になれば、いつのまにか飼い主を名乗るゾンビの人たちがドームハウスの中をうろついていることもあるから、彼らに犬猫たちの毛づくろいや散歩やお風呂やトイレの世話を任せて、おばさんはただぼんやりとソファの上から室内の様子を眺めていた。夕方にはシチューを作った。シーチキンサラダを作った。ブロッコリーのキッシュを作った。顔にしわが目立ちはじめた女の人や、ラジオの周波数もあわせられない老夫婦に、髭を剃るのを忘れた窪んだ目をした男の人、日曜にだって制服を着ている女子高生に、めがねをかけた小学生くらいの野球少年だって中にはいるゾンビの飼い主たちは、部屋中の犬猫たちにつくしながら、ちらちらと階段の影やカーテンの裏に、自分のむかし飼っていた犬猫の動きをはっきり見つけるのだけれど、すぐにそちらを向いたらいなくなってしまうから、じっと我慢して自分の知らない、きっとやさしい飼い主によって育てられてきただろう子犬の頭を撫でながら、こちらに寄ってこようかどうか迷っている死んでしまった柴犬や黒猫に、どうにかしてここにいながら、指や顔でなくとも触れることはできないかを考えているのだった。それが一週間も二週間も続き、おばさんの知らぬ間にゾンビの人数が四人にも五人にもなったかと思えば、ある日には唐突に誰も来なくなり、そろそろ爪も伸びてしまったから切らなくちゃいけないな、歯磨きもさせなくちゃな、獣くさいし、と思っていると靴音もなしに一階で、ベットにたまった抜け毛の掃除をしている初対面の飼い主に出くわした。小綺麗なスーツ姿の男の人だった。ここに来るのは自由であり、何度来てもいいし、来たことがなくたっていい、動物も植物も飼ったことのない飼い主の人が半年も世話を続けたりした。昼ごろに来て夕方ごろに帰る。ときどき朝早くに来て

夜遅くに帰る。ほとんど面識はない。おばさんに話しかける人もいない。話題があれば話すこともあるだろうけれど、数えるほどしかない。だから飼い主の人たちがなにを終えて、ここからいなくなるのかよくわからない。おばさん、これはなに？ エビ飼いはじめたの？ エビ？ ああ、あれね、なぜかいるんだよ、家賃もらわなきゃね。木製のラックにおかれた、おばさんが五年前にゴミ捨て場で偶然見つけ、喜んで持って帰ったミニコンポのスピーカーの奥に、エビが見つけた。どうやってそんなところに入ったの？ 三階に通じる階段の脇には古いロックやジャズのCDが山積みになり、どこになにかがあるのかわからないけれど、おばさんは実はそういう曲を聞かないし、ゆったりとした好きな曲はその山の中ではなくてきちんと台所の一番高い場所にある収納棚に三枚だけしまっていた。こっそり、誰にも聞かせないようにおばさんは夜中に一人で一枚を選んで再生し、眠りのような呼吸をする度に、エビの体は遅くなめらかに加工され、ますますかわいさを増していき、スピーカーの埃の絡まった細かな網目から、街を這い、宇宙へと飛び上がる縄紐を等間隔に強く引っ張った。その流れ星を〇×さんは線路沿いのあの家からドームハウスまでの道のりのあいだに、毎日わずかな明かりとして欠かすことなく数えたのだった。

今でも飽きることなくドームハウスに通いつめていた。それこそ、過去、未来、他のどんなときの誰よりも犬猫のおばさんと話すように心がけていた。犬猫の世話をするわけでもなく、他のゾンビの人たちとの会話をするわけでもなく、床の隅に座り、ただ近くによってきた犬猫の傷口に指を差し込み、ほんの少しだけ鳴き声をあげる子猫の耳の震えを鼻で感じ取る。食べたり飲んだりもしていない。あんまりにも暇そうにしているから、おばさんは退屈しのぎに萎みかけの赤いゴムボールや噛みかけの湿った犬用ガムを投げつけてみて、それがうまく当たると〇×さんが顔を向け、おばさんはその真逆の方向へ満面の笑みを浮かべた。あんた本当に暇なんだね、そんなに暇なんだったらその郷土館でも見てくればいいよ。オルガンが弾けるよ。外の道を五分ほど行った先にある、かつては監獄だった、今では風格のある昔のお金持ちの真っ白なお屋敷の廃墟のように見える木製の郷土館が、草むらの中に扉を開いたまま建っていた。正面には池があった。冬には凍りつき、表面をオオワシが数百羽も飛び交い、たった数日でヒビのはいるまで温まった氷は割れ、その底に百年前の人々が沈んでいた。郷土館には、古代の土器から戦争前後の農業開拓、移民の独立、街として境界を得る浮き上がった地図上の今に至るまでの時間の人々はもちろん、鳥や昆虫やネズミが生々しく血のついた状態で標本にされ、それぞれ右に左に傾いたまま潰されるようにガラスの奥へ押し込まれていた。トンボやミツバチやカブトムシは触覚の一本や関節のひとつひとつが発泡スチロールに釘でとめられて、部位に小さくふられた数字と発泡スチロールの右下に列挙された部位の名前が対応する。蛇やカニやコウモリはホルマリン漬けて粉っぽい室内を楕円形に歪め、キジヤリスやキツネがみんな散らばった視線で森の中でのポーズを決めていた。たぬきがハンチング帽をかぶり、ゴルフクラブを振り抜いて飛ばしたボールを遠く探していた。この郷土館はかつては農地開拓と犯罪者の島流しの両方を兼ねた監獄として街の中心的役割を果たし、劣悪な環境下において、木々を倒し、土をならし、鉱山を掘り進めて今のわたしたちの歩いている道や働いている工場を与えてくれた。喉が乾いたり、病原菌がうつったり、ドリルで太ももがえぐれたりするから一度の作業で七十人ずつが順番に死に、脱獄や反乱を起こそうとする人もいたけれど、みんなひ弱な思想犯だったのは自分自身が一番よくわかっていた。柱には故郷に帰りたい言葉を友達の折れた歯で刻み、餓えて死んだ骨だらけの死体を床下に並べて埋めた。その骨も郷土館の奥に並べていた。いくらでも発掘できるから誰でも触ってよかった。他にも今はない小学校で使われていた茶色の、鍵盤のところだけが特撮の模型の怪物の爪のように透明でない真っ白な、琥珀のつややきを保っている古いオルガンが触れたし、郷土館の係員の女の人も、〇×さんのやってきた足音に気づいて顔を出し、度の強すぎる青色のメガネを外して、どうぞ触れば音が鳴りますから！ ためしに触ってみると、バネのような反動で左から三番目のドが押され、でも音なんて外のひまわりの倒れる音しか聞こえなかった。伝統的な熊の儀式では冬眠中の熊の巣穴から子どもの熊を盗み、いっしょに散歩し、子どもた

ちと熊が遊び、時がくれば神様として空に返した。焚き火が燃やされ、寒そうな格好の男の人がこっちを戸惑いとともに見つめつつ、殺された小熊の骨が思想犯の人たちといっしょに床下に並んだり、穴のようなところに投げ捨てられたモノクロ写真が、儀式的歴史の説明といっしょに額縁に入れられてあった。階段近くの壁には黒電話があり、子どもたちが一階と二階で目の前の標本について話すことができた。○×さんの後ろを若いお母さんと女の子が走り抜けた。窓際のホワイトボードにはガスマスクと、カラフルな元素周期表がかかっていた。古びて弾のつまった火縄銃と、伝説的な熊の狩猟人の教えを聞いた喫茶店のおじさんの話があった。山で野宿をしているときに、ふくろうが鳴きながら近づいてくると、ふくろうが最初に鳴いたところと自分の間に、鳴きながら遠ざかっていくと、最初に鳴いたところより遠くに熊がいた。寝ている熊を撃ってはいけない。熊を撃とうとすれば、近くでふくろうが目をパチクリして撃つなど合図することがあって、引き金を引くことができなかった。弾がないと悪魔が襲ってくるから、どんなに弾を使っても一発だけは残しておくようにしていた。落ち葉と雑草のあいだに、煙草の吸殻が二本落ちていたのを踏んだ。熊猟の時は煙草は吸わず、なにも木のないところにヤマドリが飛んできたら、それは熊の使いだから撃ってはいけない。一週間もそばにいて、熊がようやく目覚めてふくろうも許してくれたから引き金を引いた。銃声に倒れても、足を縮めているうちは近くに寄らない。いつ起き上がってくるかわからないから、熊が足を伸ばしてから近づいた。お腹の中には小熊がいた。親子の場合、親熊、小熊の順で撃つことにしていたけれど、弾は、あと一つだけだから撃てなくて、親の死んだ小熊を神様のところへ送るのは悲しいから、その日はそのまま帰った。家に帰り、妻に道中で拾ったうさぎの死体を渡し、豚汁の中に混ぜてもらった。耳は耳で夕飯の芋煮に入れることにした。カモシカの皮で作った防寒具を脱ぎ、雪の中で蒸せた皮膚を麻布で拭き、ちゃぶ台の前に座り手首をこすりあわせながら、大きな、動かない掛け時計を見つめていると、玄関の方から楽しい曲が流れてきた。雪がまた降っている。女の子がオルガン弾いていた。学校で友達に習った、見たこともない大きな古時計とおじいさんの歌。銃だけでなく、棘のついた金属の罨や、肝を乾燥させて保存食にするための型板、刀のように鋭い包丁などといった道具を使い捕らえた熊は、皮を剥いで筋肉を食い、分厚い手のひらをふたつ、お守りとして鞆の底にしまいながら、骨は細く削って雨傘の骨組みに作り変えた。そうやって生きていく熊のことを、オルガンをきれいに弾き鳴らす女の子も知ってくれたら、熊は火縄銃を構えたおじさんが好きだったし、水族館も好きだったし、空の上の小熊が帰って行った神様のことも愛していた。今朝だって目覚めてすぐに池に手を洗いに行ったら、池から巨大な布の塊のような生きものが両手を使わずゆっくりと這い上がり、全身から凍えた硬い水滴を膜のように垂らしていて、こっちに気づく様子もなく、壊れた電子レンジや金属の台車の横を歩き、アスファルトの道路の真ん中まで進むと急に真横を振り向き、そこを凝視しながら右手をあげようとする、足先や右手の指先、内臓の胃のあたりからマッチのような火が灯り、かと思えばファンヒーターのガス臭さをまといながらすぐに燃え尽きてあとには焦げたメダカの大群が車道の上に残っていた。そんなふうになら生きていけるはずだ、郷土館を出てお母さんの本来の目的であるところのドームハウスを訪れ、置いてあるクリスマスやニワトリやカラスの絵本を読みつつ、過ごした時間の三分の二くらいをベランダや階段を犬猫といっしょに追いかけてたり追いかけられたりしていたけれど、お母さんは必死だった。きっと誰かを見失ったのだろう、犬猫のお婆さんは黴びたすまめを齧りながら、不意に話すとすれば、いつものあの話を録音したCDをミニコンポで再生するのだった。五十年も六十年も前に録音した犬猫のお婆さんの声が、掠れながら聞こえ、今とはぜんぜん違う言葉の速度は、それでも犬猫のお婆さんの口と合い、そこから流れているように思えた。誰だって忘れていくか思い出せないようにがんばっているけれど、この街にも昔やずっと先の季節があった。定期的に建物の場所や気温や風通しがずれていっても、今のこの街以外の街がなくなっていくわけじゃなくて、全部あるし、全部見つめることができた。空を見てみれば、一つ前の宇宙だってあるし、五つ前の宇宙だってある。それを全部、一度に見られるのは犬猫のお婆さん

じゃなくて、犬猫のおぼさんができるのは広大な星々の中からどれか一つを拾いあげて、ドームハウスに引っぱりあげてくることくらいで、結局のところ一回一回の積み上げでしかなかった。だから犬猫のおぼさんは、遠くのことを覚えていたりするわけじゃなかった。みんなと同じように、犬猫のおぼさんも必死に思い出せないようにがんばっているのだった。ほんの少しだけものごとを信じられるというだけだった。でも、こうやって引き取り手を待っているあいだに、この子たち、シェパードも白猫もブルドックも長靴をはいた猫も、ここにいるみんなを覚えていたはずの飼い主たちが、結局は一人残らず昔の犬猫のことなんて忘れていこうとするから、ドームハウスはあってもなくても変わらないような話になるけれど、恐竜だって、骨が発掘されて博物館に入れられてしまえば、もう単なるジュラ紀や白亜紀の展示物だし、どれも同じように金具でつながれ、格好をつけられて、見ず知らずの相手と戦わせられたり、仲間にさせられたりした。飼い主のゾンビの人たちだって、同じように中には生きたダルメシアンと死んだダルメシアンをいっしょに遊ばせるために犬猫のおぼさんを訪れる人もいる。大切なのは、この街の片隅に、急に変わったりしない、安心できる場所が少しでもあるということと、そこに行こうと思えば行ける人たちがいろんなことを覚えながら一人として歩いているということだった。それ以外になんにもありはしなかった。別に地面にこれまでのことが溜まっていくわけじゃなくて、今の時間は今の時間であり、ただ、化石を掘り出す縞模様の地層みたいになっているのがいろんなところに散らばっていることをみんな知っていた。それをふいにあらわしてくれる気休めだった。わかるかい？ わざわざ意識しなくとも、いつのまにか細かな破片として鞆のポケットのどれかにしまってほったらかしの犬猫を、全部覚えて一度に見つけられるのは、きっと誰か一人とかじゃなくて、鞆の色合いやそれをしまうクローゼットくらいなものだったけれど、そうはいつでも、その中にいる限りは、画用紙の上の円を歩く蟻みたいに、端っこのないどこまでも終わらない道のりかと思ひこむ、でも実際は画用紙の上のひらべったい空間だけが世界じゃない、上も下も先も後もあるようなところに蟻もいる、そんな子どもっぽいことにまだ気付けないような大人びた淡白さにしか至れないだろうよ、箱庭程度の自由ささ、万が一ほかにあるとすれば、この街を思い出している、ここにはいなくなって地面に埋もれたずっと未来の恐竜の骨とかくらいだろうけれど、もちろんわたしは会ったことなんて一度もないよ、二度と顔も見たくないね！　ずっと iPhone を操作していた女の子が、話が終わると、ふーん、と言いながら iPhone を一口で半分食べた。そして口にくわえたままこっちを向いた。見ていたのは〇×さんと、木にのぼっている窓の外の小熊だけだった。枝が軋み、首筋の筋肉が弾けそうになりながら、それでも必死にのぼっていたのは、熊もいっしょに犬猫の世話をしたいのだと、ミニコンポの中のエビはそのときわかっていたのかもしれないけれど、エビは人じゃなくてエビなんだから、あったとしても〇×さんの気持ちだった。

「なんでそんなこと言うの？」

小熊は女の子の姿が見えなかった。そのときまだ女の子はそこにはいなかった。五十年も六十年も前の犬猫のおぼさんと、池に沈んだわたしと、エビと、〇×さんだけがいて、〇×さんは思わず聞かすにはいられなかった。このまえ空っぽの車椅子を押すわたしと同年くらいの男の子がいました、街の真ん中の駅の前大きな横断歩道をきよろきよろと、周りを探しながら渡ろうとしていて、それを何度も、何度も、行ったり来たりを信号が変わるたびに繰り返していたのですが、それに気づいているのはわたしだけでした、誰も男の子の車椅子を絶対に見ようとはしませんでした、あの子は誰なんでしょう、ツヅキかもしれない、わたしはいつのまにかツヅキのことを忘れてしまってもう何度もすれ違いあおうとしてしまっているのかもしれない、そんな不安におそわれてばかりいるのです、これは不安に思うべきなんのでしょうか、わたしはまだ、ほんの少ししか生きられていると信じられないから、わからないんです、おぼさんのように、未来を見られればいいのだけれど……犬猫のおぼさんは、少し思い至ろうとすれば、〇×さんの描いたカズナやシャライやハルのことを見つけられたし、誕生日、嫌いな食べ物、五年前の今日に学校でどんなことが

あったか、友達とどこに行ってドーナツを食べたのか、いくらでも世界に残っていたし、足りない部分は作ることができたけれど、そこまでがんばることができなかった。探すのに時間がかかるし、昔すぎたり未来すぎたりすれば〇×さんにとって恥ずかしい、今とはぜんぜん違うことを言ってしまうことがわかるかもしれない、そうなれば〇×さんは消そうとするだろう、たとえ消しても消しても街のなかに見つけられてしまっても消すだろう、消せないなら「それはわたしじゃない、わたしはそんなことは言ってない」と信じ込もうとして消えていく、星座の点のひとつひとつが光を失い、星座は別の簡単な形にしか組みあわせられなくなる、パーツが足りない、街では明るすぎて空が見えない、視力が悪くなってしまったのかもしれない、空がどこにも明るくない！ オリオン座とサソリ座が混ざってしまう、北極星と夏の大きな三角形が同じに見える、あなたがそれをおうし座と言うならわたしのふたご座はどこに行くんだろう、それともこの星からは見えない宇宙に飛んでいってしまったの？ また次の冬になれば見えるの？ それはいつになれば冬になるの？

ふいに女の子の口の中の iPhone が震え、メールが来た。「ねえ、いつ帰れそう？」という一言だけの、シャライからカズナに宛ててのメールだった。「もうすぐ帰るよ」とすぐに返した〇×さんは、送信してから初めて不安に思った。送信済みフォルダを確認しようとしたそのとき、一階の玄関の扉が破れ、工事現場のような足音が階段を駆け上がってきた。地震かと思ったら、念入りに武装した警官隊だった。藍色のヘルメットに、真っ黒なゴーグルをかけ、胸元には防弾チョッキが当てられていた。洪水がとめどなく室内を浸していく流れで、次々と区別のつかない警官隊たちがドームハウスを埋めつくし、目の前にやってきた順にライフルを掲げ、動きを禁じた。訓練された身のこなしだった。事前に情報を得て、計画を練り、今日ついに突入を決行したのだが、やはりそうか、想像していたよりもずっと悲惨だった、こんなことならもっと早くに突入すべきだった、そうすればもっと穏和な死体が広がっていたかもしれないのに。そこで彼らが見たのは、糞尿に汚れた苔まみれのベッドと、乾ききりでこぼこの模様になった床の上の血だまりと、かわいすぎて無我夢中に犬猫を食い散らかす男女の群れと、封じようにも封じられない呪文の反復のかすかな響き、眼球の右だけ十三センチ飛び出た老女の剥製、そしてそれを盲信する片耳の削ぎ落とされたやつれた少女だけだった。名前をすでに忘れてしまっていた。

これが一つの事件のあり方だった。小熊は手を滑らせないようにゆっくりと木を降り、そっとドームハウスを離れることに決めたとき、首の毛皮にはいつのまにかこっそりとエビが乗っていた。もしもあのときハルに言われた言葉、カズナのうわさを、物語として思いついた空想好きの〇×さんが、動物園で〇×さんという名前を冗談めかした調子で言ったあの〇×さんだったなら、同じ星でないにしても〇×さんだったなら、その合図は銀河間を抜け、大気圏をめぐり、その流星を見た小熊は動物園のことを知らないのに懐かしくなった。シャライが動物園の奥の店で働いていた夏のあいだずっと〇×さんは働いていて、さっきも偽物の岩場で熊が三匹座った。フラミンゴの親子が山の向こうに飛んでいった。あまりに遠くのことでこの星の誰も見渡せなかった。

ある星の〇×さんを小さいころに知っていた小学校の先生やおじさんやおばさんは、小さいころからおかしな話を本当めかして話すから、嘘つきかと思って叱ったことがあったのを思い出したし、またある星の〇×さんが老いてパサパサになってマンションの一室で一人で死ぬ間際に知り合いだった隣室の若いコンビニ店員も、会うたびにおかしな宇宙の話をされるから、最後にはまだ四歳だった自分とお父さんを見間違えるようになってしまって死んだおばあちゃんの笑顔と焼いた骨の粉っぽさを思い出した。骨を砕いて骨壺に入れた。少ない骨を知らない親戚とわけあった。おばあちゃんはこの骨のことを言おうとしていたのか！ 小熊はエビといっしょであることを知らないまま山を降り、線路を越え、車道の真ん中を歩いても車が一台だって来るはずもなく、それはかつてないほどの戦争が今に訪れていたからだった。

カズナがあつ星でとんぼの人の話を聞いているとき、ハルがひいおじいさんの日記をめくっているとき、すでに街はエビによって埋めつくされはじめていた。保育園の保母さんが三十人の子どもたちにココアをいれてあげようと思ひ、やかんを手で蛇口をひねると、やかんの中に小さなエビが水滴となってバシャバシャとあふれた。衣替えをしようとしてダンスをひっくり返したおばあさんが、嫁入り道具としてお父さんとお母さんにもらった紺色の着物の袖口に、エビのあけた針くらの穴を六つ見つけた。乳母車の赤ちゃんが前を通ったビルの屋上にあるエアコンの室外機で、プロペラにエビがギシギシと絡まっている音が聞こえた。たった四日後には空じゅうを生臭い川のおいが漂い、新築のアパートの入居者が見当たらず、壁は乾燥した風に舞う砂埃で一秒ごとに軽くなっていった。どうしてエビなんだ？ どんな手順で広まっているんだ？ 広まる必要がなにかあるのか？ テレビの画面がエビの話題で破裂しそうだった。こんなに急激すぎる流行は一日のほとんどを望遠鏡を覗いて過ごす一人暮らしの生物学者でさえも想定できなかった。その当時エビが一日で繁殖したとされる数には、大人のカラスでなければとうてい一羽では立ち向かえずに、引き裂かれる子どものカラスが黒く街中のいたるところで撒き散らされ、その羽の暖かみは狩りを終えたエビたちのささやかな満腹ときれいに重なって感じられた。

小熊は海まで長い道のりにおいて何度か道路の真ん中の途切れ途切れの白線の上で眠った。警官隊は繁殖しすぎて数の抑えつけられなくなったエビを一斉に駆除する方法がわからなかった。見つけしだい殺していくとしても生息範囲はとどまることを知らずに、アパートごと壊す作業、排水管ごと壊す作業、連日聞きつけた情報をもとに手当たり次第を平地にした。ポストの中に住んでいる、そんなうわさもポストというポストをすべて焼いた。郵便局も焼いた。八百屋も焼いた。みんな不安だった。街の外から廃船とともにやって来るエビの広がりを聞かずにいることなんて無理だったから、閉じ込められるように感じたことなんて一度もなかった街を、小さなダンボールの箱として想像するようになった。

空から見た地図としての配置はさほど変わらない。中心を一本に蛇行する川が山から海へと、逆流することなく伝わり続け、豪雨のたびに増水する浸食作用が岩場を削り、木々を呑み、ひとつの岩をたくさんの

石に変えた。かつて海だった今では陸地である場所が川底になり、川底だった地面は切り離されたエビの住処になった。地図には記されない、小さな水たまりとしてあるうちに、川とは違った名前と呼ばれはじめ、川だった水たまりがなくなり、最初からエビの住処だったように偽られ、そのことを個人的な地質調査で知った素人の考古学者、川沿いの小学校に勤める変わりものの理科の先生だって、この街にいる限りは、川ではない最初からエビの住処であるとし学会提出用の論文に書き記すことなんてできなかった。先生、えらい教授なの？ そうだよ、研究熱心すぎてあんまりにも顕微鏡を覗くから、片目だけ視力がほとんどないんだ。眼鏡は片目だけが強かった。それを取り戻すための論文だったのに、本当のことを書いても信じてもらえないなんて。仕方なく自分の古いホームページに載せた文章が、十数年間に五回だけ、学校の調べ学習をする中学生の男の子や、自動検索するソフトウェアによって見つけられ、昔でない遠い街の景色として、一瞬だけ世界の片隅にあらわれた。エビの大量発生が組み替えた食物連鎖の階層、めまぐるしい水質環境の変異の過程、そこに記された長い長い時間のあいだも小熊は歩き続けていた。山のなかのトンネルを七回くぐり、土砂崩れに二回潰されそうになり、満開の桜に三回出会った。季節は暑くなり寒くなり、乾燥し霧に濡れ、見上げれば山々が木の滑り落ちて橙色の山肌を見せつつも、青空と混ざらず上に上に、どこまでも突き抜け伸びあがろうとしていた。空は一体となって押しとどめ、その分、山と山の狭間には雲が滑り込み、酸素と湿気を吸い込み、目の前のあらゆるものをぼやけさせ、谷の底を流れる生まれたての細い川が、時計回りに渦を巻きながら落下した。海に達するころには、水面は顕微鏡で覗いた鉛のように動いていた。この川には潮のにおいが含まれている。ミナミヌマエビは淡水に生きる。それでもエビに神経を病まれた街の人々は水と聞くだけでエビが所狭しと泳ぎ飛びまわる光景をはっきりと目にした。電気信号がエビの形のまま通過した。

乖離する二つの動きが、だんだんと離れていく角度でありながら平行移動を何度も印字し、飽きることなく引掻かれた交通経路が高低差を生んでいた。個々は自由に流れていく水脈だったのに、細く同じ場所を流れるものが少しずつ増していき、それと比例して経路もまた傾向をよりいっそう深く穿っていき、上空から見渡せば、徹底して計算されつくした頑健な幾何学模様を知らず知らずのうちに形成した。地底がみるみるうちに凍りつき、膨張した地下水の影響で道路が左右両端からめくれ上がり、その下に幹の中心まで固まり壊死した街路樹が次々と潜ったが、一方で街路樹は、夏になれば蝉の脱殻を携えたままガラスよりも透明度を凝縮した太陽の光を葉脈の緑と黄緑の配列になぞらえて形として輝かせ、冬になれば葉は役目を終えて歩道に落ち、側溝にたまり、一ヶ月に一度の大雨の日に下水を引っ張っていくのを、一年の再び同じ月、同じ日に、そうやって春から秋にかけてためこんだ太陽を示すものとして乾燥し割れる落葉が過ごせるように、自らの栄養の配置運搬を通して教育されていた。決して相手が見えない遠くまで行くことは許さず、道路の下に圧縮された街路樹は、たとえ常緑樹であったとしても、落葉し肥料になりながらそれよりも早く緑に色づき光合成と呼吸と蒸散に勤しみはじめる動きを、いま見た光景として細々と口走り、道路脇に等間隔に並んだままの街路樹は、ここに植えられる前のまだ苗としてひとまとめに養育されていたころから、適当に一本が選ばれここに植えられ、通学途中の子どもに爪で樹皮を剥がされることもあれば、蟻に枝の根元で巣を掘られることがあったりしつつも、数年後、ハンドル操作を誤った学生の車に追突されガードレールごと折れたり、七月の夜中に一匹のすずめとともに雷にうたれて先端から焦げついたり、寒暖の激しい異常気象で広まった感染症に枝の隅々まで腐ったりした翌日には、トラックの荷台で横になり運ばれたゴミ処理場で焼けて炭になるすべてのときに、すべての苗は、道路の下の萎縮するほど冷たい日陰に寄り添っていた。古代の占いや呪いや倉庫貯蔵量の記された木簡、矢じりの食い込んだ大木、死んだ犬のための枝の墓、捕らえられた馬の肉を焼く初めての焚火さえも同じくめくるめき、夢の中の木々は懐かしいという気持ちを検討はずれな刺激にまで多用した。三年ぶりの大雪に降り積もる雪片を葉に乗せたまま、アスファルトの裏で石のとがった粒を雪片とかき混ぜたし、地面が割れれば垂直に立つ力をもつ

てしてかたくなに地面を支えた。

紙になること、樹脂になること、きつつきの寝床になること……しかしさまようのは死者しかなかった。音もたてず、抉れた建物の空洞に頭を突っ込み、なにか音楽を聞いているように体を揺すっているが、長い時間のなかで見ていればわかるように同じリズム、同じ抑揚のつなぎあわせでしかなく、さらには手足がフライパンを振り、自転車を漕ぎ、鉛筆を削っていた。校門の前には爆砕した鉄柵の口いっぱい刺さっている、口が一メートル半もあるカバが歩いていて、その周囲を等間隔に流線形を描くやり方で右側通行を交互にしている大学生たちの列が、毎日、演劇として機能していた。カバに空き缶が投げつけられ、そちらを向いても誰もおらず死人が一日三千回首を回し、ここだけで他のどこの色のかつての演目も暗唱できてしまう、あなたは特別な一般人ではなかった。シャライが学校に行くために電車に乗ろうとしていた。ハルが一本早い電車で学校につこうとしていた。人ごみのあふれるエスカレーターの動きのなかに一人だけ半分で歩こうとしている男の人は赤いリュックサックを背負い、登山の帰りで、昨日の日の出の明るみをまだ雲の凹凸の高さやちぎれ具合まで鮮明に思い出すことができた。カズナが中学校でシャライを笑った。宿題を必死に一問ずつ計算していたが、問題集の答えが机のなかにあった。ツツキが小学生のシャライとハルの前で逆上がりをしていた。校庭では一時半に昼休みが終わり掃除がはじまって二時から午後の授業がはじまった。ツツキは親がアパートから一軒家に引っ越すために十一歳の時に転校した。夕日の小学校にはすでに生徒たちのほとんどはいなくなってしまった。それらひとつひとつが質量として捕捉され、切り取るのではなく複数に交流し計算効率を高められるようなかたちのまま発展させ続けられるように、プログラムは計画されたのだった。電車の車両とホームの間隙の線路に、クリアファイルを落とした人がいて、知り合いだったが薄暗いそこからプリントに印刷された文字が目に入ってくるのを初めて見ることができた。電車が過ぎ去ったあと、線路を覗くと、見慣れた文字が逆さまにはっきりと読め、誰がこんな物を落としたのだろうと不思議に思った。あの街も、かつては高速計算による膨大な時間蓄積の中でも安定して一つの状態であり続けることを、試算を走らすモデルとしての価値の担保にして、実験データの効率よい供給に、シャライやカズナやハルはもちろん〇×さん自身のもも含む数万キロにおよぶDNAの連なりの断片の組み合わせを用いたハードウェアを絶えず移り変わりながら二十年間駆動させ、計算に明け暮れていたからこそ、多くの人々の想定する研究意義から外れた淀みであったとしても、書類上の時間割の一角にかろうじて見つめられ得たのに、今では再生する者も再利用する者も削除する者もいなくなり、周囲から取り残され、忘れられ、そこだけが同じ物体、同じ人間、同じ天候が何度も地形上で生じる窪地のような場所として、ストレージの奥の奥の枝分かれした先の小さなフォルダの中に観測される可能性だけを残していた。エラーは可逆的に取り除くことができないよう、バックアップを何重にも積み上げた回線自体を飲み込んでいった。エビたちは小熊の渡り終えた後の踏切から五百メートル海側に進んだ線路のこの地点に爆薬を仕掛けて、五年前の平日の朝のラッシュ時に不意に爆発するようにした。ごくごく小さな爆薬だったが、ある瞬間を過ぎれば連鎖反動的に陥没する衝撃を放射状にいくつもいくつも広げた。本能的な防衛行動だった。もうずいぶんと昔の話だった。地底ではついに球体のかたちに絡まり熱せられた茶色の回線に触れてしまい、度の過ぎた応答で押し上げられる海面は、膜のように浮き上がり、徐々に動きを遅めたかと思うと、急速に湯立ちながら重力を這い、船解体場に散らばる百分の一スケールの廃船の模型や、浮きに乗った水温調査のための計測器はもちろん、冬眠から数日で目覚めてしまった熊たちが川の魚を食べたから海で魚が採れずに死んだ漁師たちの漁船が、縄を外され沖に出ていたのに津波で帰ってきて家々を壊し、アパートを壊し、動物園を塩漬けにした。動物たちはみんな背中で人々の耳や手や心臓や歯や目玉の再生も担っていた。もともと彼らは免疫監視機構として配置したが、逆に細胞、脈管の局地的増殖の触媒に用いられてしまったようなのです。気づくのが遅過ぎました。リセットするには結節点が図的配置を持ち過ぎていました。ゾンビたちは生殖能力を保持したまま通常の嗜好を捨て、動物たちと交わ

り、すでに第三、第四世代にまで交配は進んでいたのです。線路が電車の走るところではなくなりました。小熊は雨に打たれた次の日になっても全身の毛皮を乾かすことができませんでした。片道三車線道路に水滴と足跡がどこまでも右に左にうねっていきましました。降下する空がマンションの七階より上を真空にして、建物の中心に向かい柱も外壁もぎゅっと絞られ、窓枠のなかでガラスがゴムのように弾力のあるへこみ方をし、テレビ台に置いてある観葉植物が隣にあった瓶のなかの信号機のフィギュアと速度をあわせつつカタカタと部屋の真ん中の方に引きずられながら茶色く乾いた押し花になり、触れれば焦げた防腐剤よりも脆く砕けて床のフローリングの板と板の隙間をなぞりました。もうどこにも安定したパターンは見当たりませんが、しかしそれでも発生と消滅の起伏は続いているので、どうかこのまま様子を見させてもらえないでしょうか、もしくはここまでの逸脱を生じさせる寸前の段階にまでリセットし、要因となりそうな動物たちを取り除いて再実行するというのも……嘘にも抑制にも満ちた最大限の擁護だったが、返ってくる文面はなんの驚きもない規定路線通りの拒否でしかなかった。そもそも根本的な問題として、この計算法は現在稼働中の F-UTP2047 型に比べ性能も汎用性も極めて少なく、また倫理的問題から拡張能力も劣るため、今回を機に停止する方針であることに変わりありません。A-HOR0518 型の強引な設計、稼働の結果生じた今回のエラー連鎖に伴う他惑星への影響、情報集積結節点としてのこの宇宙における身体概念の非安定化は決して無視できる程度のものではないでしょうが、それも含めて、早急にプログラム停止を要請します。使用した身体情報とデータログの返却ないし削除期限は追って連絡しますが、今週中であることは少なくとも間違いのないため、可能な限り迅速な手続きを行ってください。ウェブ上での凍結はすでに終了しました。担当者の更迭、処分に関しては、各々の事務的処理が完結したのち、社内規定と法的手続きに則って行われます。それまではすべてに関して部外秘となるため、諸々の配慮を願います。

一つ早い駅で電車を降りながらメールを読み終え、改札を抜けて五分歩いたところに小さな公園があった。昼過ぎではあってもまだ学校は終わっていないらしく、子どもたちの騒ぐ声はどこからも聞こえなかった。○×さんはベンチに座り、昨日の雨で湿っているかもしれない木目を撫でながら、上空を飛行機が、この街に降りる場所を見出せないまま点滅しつつ通り過ぎ、その隣をカラスの群れが滑空した。飛行機雲はなかった。まばらに薄く、青い光のなかに滲む白い影のように散り散りになって平行移動する雲の間から、月と火星がカラスよりも大きく浮かんだ。明日が満月だから、今日は満月じゃなかった。黒いサングラスに青色のビニールのジャンパーを着てショルダーバックを肩にかけた男の人が、公園の周囲を三往復も四往復もしながら釣竿しかもっていなかった。鳩がぐしゃりと潰れた格好で地面に四羽座っていた。びしょ濡れの小熊がベンチの前を横切り、鳩に近づいても鳩は潰れたままよけず、小熊もよけることなく三度重なっては離れて、斜めにまっすぐ公園を抜けていった。太陽は雲に隠れていたのかここにはなかった。この五十三時間後、○×さんは何人もの人々とひとまとめに逮捕された。危険というよりは神経衰弱として隔離された四年間の後に釈放され、さらにその十二年後、四十二歳のときに一人暮らしのアパートの押入れのふすまにもたれかかるようにして死んでいた。衰弱死だった。ヘリコプターの低く飛んでいる音が朝からずっと聞こえていた。初夏になりかけ、早く土から出て来すぎた蝉が鳴くのを聞いて幼稚園のバスを待つお母さんが娘に、ほら夏だよ、暑いね、と言った。冷蔵庫の上の蜂蜜は賞味期限の切れる一年前なのに真っ白に結晶化していた。キッチンの窓際には薄っぺらなプラスチックのケースに入れた蟻の巣があったが、巣の形だけはあっても女王蟻すら半年前からいなかった。シャライは息子が蟻の巣と「生きた化石」カブトエビを飼い、机の引き出しに入れてある肝油ドロップの蓋に「たからばこ」とマジックで大きく書き、中に綿を詰め込んで科学雑誌の付録についてきた恐竜の骨盤の化石のかけらと、友だちからもらって初めて見た星の砂を和紙でくるみ輪ゴムでとめたものを、高校生になっても大学生になっても偶然見つけては開けて懐かしむという話を聞き、喜んだ。同じような経験をアルバイト先の先輩も話してくれたことを、先輩については思い出さずとも、漠然とした好意として思い出せた。シャライが八十二歳で死ぬ日ま

で息子はなんとか生きてくれた。十七歳の時に学校で一斉に行われた卵子保存で冷凍していた卵子を使ってこの子を産んでよかった。母親があまり好まないことを小さいころからニュースで見るたびに教え込まれていたから、自分もあまりいい印象を持っていなかったので何日も前から行事予定にある「健康診断」が嫌だったけれど、今考えればすべてよかった。同様に採取された別の女性の卵子から二十年后に体外受精で生まれようとしたが生まれる前に死んでしまったハルは、両親の希望で名付けられ、DNAと、両親を代用したまだ過ぎ去っていない記憶だけがウェブストレージ上に残った。三十年前の同じ初夏、十九歳のカズナが電車の脱線事故で死んだときも、鑑定結果からおそらくカズナだと思われるバラバラで潰され黒焦げになった死体のDNAと、カズナの生存時のデータログを紐付け、カズナとして残した。ツヅキは〇×さんの小学校からの友だちで、ツヅキのDNAとデータログをコンピュータの作成パーツに用いることを、DNAそれ自体の構造が持つデータ保存量の多さと、生物であるがゆえのイレギュラーへの順応力、歴史性、身体器官への凝縮によって機能を分担し、拡充し、自己対話をしていく発展のあり方、常に外部刺激を内に取り込むことで壊れない頑健性などといったことをひたすら、あえて入り組んだ根拠のように見せかけて説明し、表情だけおそろおそろ相談したら、予想通りツヅキはうれしくなり、ツヅキらしい興奮した口調であれやこれやと未来への想像をはじめた。こういうところが好きだった。〇×さんはあることないことを含めて適当に話を膨らませたが、今思えばどうしようもなく申し訳なかった。ツヅキにとって、シャライにとって、カズナにとって、ハルにとって、〇×さんにとってこの街はなんだったのか、それらは単なる利便上のコードネームでしかなかったけれど、みんなの名前が添付されえた人々にとって街はなんだったのかわからなかった。iPhoneがまた鳴った。ツヅキからのメールだった。内からも外からも来る熱っぽさでうまく働かない頭でも文面に違和感を覚えることはできた。さっきさ、線路に文字が落ちてたよ。え、本当に？ 一昨日のことだよ？ そこは落とした駅じゃない別の駅の線路で、ツヅキは落ちている書類の文字を見たのだったが、でもやっぱりきみのだって思ったし、「あっ文字だ」ってきみを真似して言っちゃったから間違いないよ、よかったね。

火星には月との距離、地球との距離のあいだにいくつもの星の屑を挟み、それらはすべて重力で少しずつ集まり一つの星になっていくか、もしくはかつて星だったものがガスになりながら霧散した痕跡だった。星は今でも消え続けていた。ブラックホールが飲み込み、高熱で爆発し、急速に凍えつき、望遠鏡から遠ざかる。ベンチに座り、別の試算での〇×さんが今どうしているのかを気にかけているのは、〇×さんと体の仕組みが同じだとか記憶が地続きだとか名前が一緒だとかそういうことではなくて、ただ単純に、〇×さんと質量が同じであり、そこに立っていると触感の網目がたわむそのたわみ具合が一瞬だけまったく寸分たがわぬようにあることが〇×さんとその人を〇×さん同士にし、光の伝達だけでも数万年経てしまうくらい遠くの星の〇×さんでさえも気にかけることが容易にできた。みんな死んでいて、みんな生きていた。逃れられないのは、反復される要素結合の傾向ばかりで、エビを飼っていたというただそれだけの経験が、エビに対していいにせよ悪いにせよ持っていた関心と物理的に繋がれた空間上で反響し、シャライはエビのことが苦手だったのにいつのまにか好きになる時間の進行をたどりはじめた。エビは小熊の耳元で語りかけるが、ここからでは聞き取れなかった。

おばあさんが連れて歩いているハーフの男の子と女の子がウルトラマンのうたを歌いながら、ここは迷路みたいだね！ と言い、日の丸を指さして、アメリカの旗！ と言った。配達トラックの運転手が配達に行っているあいだ、雨も降っていないのに傘を二本も持っている男の人が運転席の扉を開いたり、閉じたり、荷台を覗いたり、タイヤをノックしたりしていた。街外れの床屋の店主が、初めて来た女の子が長い髪を耳より上になるまで切りたいと言って驚いた。三年分の仕事をした気分だな！ 太陽が雲の上をのぼっては降りるように輪廻転生をし、そのつど来世で代わりに働く人々、それを監視統率する人々がいて、彼らもまた太陽が死して蘇るさまを模倣し、来世では代わりに人々に働いてもらえたが前世の記憶などな

く、目の前のたった数人に親しみを感じるばかりで海を渡れば自分よりも前の人、自分よりも後の人くらいは見つかるのだった。小熊はまるでこの世界がはじまる前から同じようにあるんじゃないかと思えるくらい穏やかに大きく小さく打ち寄せる波の白い泡立ちの中に立ちつくしながら、沖の方に見える貝殻くらいの小舟を見つめ、エビの気持ちを考えてみようかとも思ったがわかるはずもなかった。小熊が寒いのか暑いのか心地いいのかすらもわからなかった。小舟は一点にとどまっているようであったのが、ある拍子にほんのわずかだけ大きくなったような気がして、するとどンドンと大きくなるのを止めなかった。斜めにぐらんぐらんと滑りながらこちらに近づき、もしかしたら一人じゃ乗れないくらい巨大で分厚い客船なんじゃないかと不安になるほどだったのは、右手で触れたときにちょうどいい山小屋くらいの大きさに収まってくれたから安心した。でも一人しか乗れない、二人だと沈んでしまうし食料もエンジンも方位磁石も足りないだろうと思って見ていると、小熊は自分の代わりにエビを船に乗せ、のっそりと力の限り遅い速度でまた沖の方に向かって船を押し出してやっていた。波を遡るように進みはじめた小舟は、海面を荒立たせることなく海岸を離れ、着実に小さくなり、街を見下ろし、潮風にまみれながら、空から街に降り注ぐ八十年分のエビの何億本もの光跡を輝かせ、実際の動きとして認識できなくても、街があまりに長々とした時間の隔たりにおいて地面を積もらせ高まらせていることを確認した。海は街より遠のくにつれて空に近づき、海が雲も大気圏もこえて宇宙に来た。ここは月も太陽も銀河もよく見られた。

浮遊する砂漠に囲われた街が、光源から一億キロメートル離れた光のまたたきに照らされ、人間の視覚では捉えられずともカエルの視覚には一日おきに捉えられる流れ星のような光の粒として、スクリーンに痕跡を残した。色彩は、ほぐれた光のパターンにより白だけでない青や赤や黒の環に分かれて映り、境目はあまりに個々の光の粒が小さすぎて空間として記されず、しかしカエルの脳裏には錯覚した電子情報として色彩の谷間が見えた。その点滅する落ち窪んだ街の谷間の底にそれぞれ、石英や黄鉄鉱、硫黄や藍銅鉱や螢石といったきれいな鉱物が、柔らかいものも硬いものも、丸いものも尖っているものも、すべてが街の散り散りになった線路の上や、根元から折れた街路樹の植え込みや、遊具の半分解体されたまま放置されている砂山だらけの公園や、海岸付近の工事現場や、違法駐車バイクとバイクの間や、そういったあらゆる場所にくまなく置かれていた。街に誰か生き物が残っていたりすれば、歩くたびにつまずき、体中をでこぼこのぎざぎざにってしまうものだったのに、ここではそんな期待は遅かった。雨が降り、晴間によって乾かさされ、朝と昼と夜の寒暖差で湿気に濡れ、珍しく雪が積もり、翌日には薄く溶けて固まり、雪でない氷になった塊に覆われた鉱物は、街の表面のアスファルトと余すことなく融和していった。

どれかひとつの、またはいくらかの数の街の風景を選ぶことはなく、ただ総体として街にはあらゆる鉱物が並べられ、撮りきられることのない量の航空写真を、ヘリコプターの腹部に搭載された広角レンズの奥のメモリに与え続けた。レンズを通り、画像データとして処理される街の光沢は、街に置かれた鉱物がすべて同じ種類の鉱物であったとしても、鉱物の表面の滑らかさによっていくらかでも街の航空写真の美しさの数を増やした。鉱物を通過する光、内部で反射する光、結晶の表面で反射する光が、どれくらいの比率で調合されるかにより光沢は生まれ、同時に可視光の吸収により、その補色としての色調が鉱物の、そして街の色として輝く。白色、ガラス、黄色、紫、黒、緑の螢光色。それらの性質が存在するための拠り所であるところの鉱物の輪郭、なんらかの設計図をもとに作られたかのような規則的な造形もまた、街の区画と同様に、多種多様でありながら完全なランダムによりできあがるようなものではもちろんなかった。鉱物における結晶内の原子配列が、その最小単位であるところの単位格子の三次元的連なりにより、上下、左右、奥行の三つの軸の長さ、それらが互いになす三つの角度から、立方体や八面体、菱面体、板状や単斜柱状などといった外形の基礎的パターンを定め、これが細胞のように複数同時に成長し、種としての中心核のまわりに集まっていくことで、全体としての鉱物の形、さらには街の形までもが徐々にあらわれてきた。その発達の方角関係は、鉱物の結晶構造をそのまま強く反映したものと、空間的制約を強く受けたものの、大きく二つに分けられることになるのだった。

前者の場合、二つ以上の結晶構造が、自らの規則性を最大限に保ちつつ異なる方向に成長していくため、ある面や軸を境にして巨大な六角柱が対称的もしくは回転的に接続したようだったり、または完全に別種の成長傾向をもった結晶構造が、それぞれ相手を尊重しつつ貫くように組織を組み上げていくことで、形が入り乱れ、穴だらけとなり、象形文字にも見える模様を全身に記したりもした。一方で後者の場合は、空間的制約、つまり鉱物のおかれた岩盤や砂漠の地下水脈といった外的状況から、障害物のなるべくない方向に結晶が伸びていくことにより結果としてあらわれてくる形であり、空間的制約が極めて強いときには、砂漠の地下水脈に沿ってバラの花弁状に結晶が組み合わさっていたり、堆積岩中の隙間に沿って樹枝状になっていたりし、比較的制約が弱いときには、空間へ放射状に広がることで、ハリネズミの棘のようになっていたり、なめらかな水晶玉のようになっていたりした。

その状態がどれだけの美しさと完成度を誇っていたとしても、今この瞬間が最後に行き着く場所ではもちろんなく、鉱物は、惑星内における水と熱の循環運動により、陸地と海中、地殻、惑星中心核を行き来

し、その過程において鉱物そのものの性質は幾度も変わり、熱せられ、冷やされ、圧縮され、砕かれ、別種の鉱物と混ざりあっては山となり、マグマとなり、惑星そのものとなってはまた鉱物になった。街の光沢は、この意味でも一瞬の切り取りでしかないのは、航空写真をひたすら撮りためるだけのヘリコプターにさえもわかっていたことだった。雨は地表に降り注いだものは土壌や岩盤の割れ目を伝って地下水に、海に降り注いだものは海底の穴から地下水になっていく。惑星中心部に近づけば近づくほど、岩盤は熱せられ、地下水もまた少しずつ温まったが、熱水となった地下水は周囲の冷水と比べて軽く、せつかく地下へ地下へと潜ったにも関わらず冷水と入れ替わりに空へむかって上昇してしまうその際に、熱水に溶け込んだ様々な種類の鉱物が、地下水脈のところどころに沈殿し、水への溶解度の高い鉱物であっても地表で水の蒸発する瞬間には水から離れ、ようやく姿をあらわすことになった。惑星内部の温度差、地表上の温度差が、巻貝の殻や、微生物の死骸までも鉱物に転生させる動きになる。一週間に数トン降り注ぐ星間物質、隕石がその繰り返しのなかに取り込まれ、誕生時の惑星の姿を、現在の惑星の姿と地続きなものにした。海もマグマも核もない、水や二酸化炭素からなる大気さえも存在しない塵の単純なかたまりだった惑星は、今や自らを言う生物により数万年後を左右されるようになった惑星の周囲はもちろん、距離的に遠く離れた別の宇宙、しかし状況のあり様において近い場所にある宇宙でもまた自転し、時に今の生物の生きる惑星にぶつかり、時に望遠鏡によって観測され、時にまったく知り合わないまま仮定の集合のなかに像として保存してあった。そこでは海は触れられないほどに熱く、空は紫色にうねり、食事をせずとも成長する微生物が四億年も繁殖し続け、海底の色を変え、性別を獲得し、そして消失した。恐竜がうまく生まれることができたとしても、肌は茶色からねずみ色になり、態勢は直立から前屈みになり、トンボを食べていたかと思えば草を食べ、さっきまで仲良く遊んでいた隣の恐竜の首をかじり、飲み込むうちに全身をやわらかな体毛が覆うようになり、また隣の恐竜と森を抜け池まで走りいっしょに水浴びをした。それは昨日のことや今日のことのあいだに横たわっている流れなどではなく、ここで見つめるこの恐竜が、今日や昨日でもないこのときにこの惑星やこの宇宙になんの影響も与えることなく、別の、しかし近い距離にある宇宙にいる知り合えない自分の影響を受け、行ったことのない場所に懐かしみを感じる夢のなかのできごとのように、背中や頭や腹や尻尾に緑色の毛ができ、冬でも暖かみを感じ、雨水をぐっしょりと吸い、明日になればすっきり乾き、ふわふわで、将来はほとんどが絶滅しながらも一部は鳥になることが自分のずっと先に位置づけられた。空を知っていた。群れになって山と山を飛び、海を渡り、卵を生み、雛になり、バサバサと羽を開いて高く上がれば風を読み、滑空するときの涼しさ、電線から見る電車の音、玄関の上に作った二つの巣。あるとき、学校帰りの、ランドセルを背負った子どもたちに石を投げつけられた。通学路に面するアパートの一階部分の屋内駐車場の天井に、隠れるようにして巣があるのは、雛たちの落とす白い糞が巣の下に敷いた新聞紙にたくさん残っていた。子どもたちは駐車場にいつもとまっていた高そうな黒い艶のある車が今日もまたとまっていれば、そこにあるだろう巣を覗き見ることもなかったし、石を投げることもなんて絶対になかった。そもそも最初から巣に向かって何かを投げたかったわけではなく、石を投げられればそれでよかった。石は小学校の二年生の梅雨から五年生の冬までいじめられて六年生の春には転校した男の子が週末にお父さんとお母さんと妹で行った山の奥の川の岩と岩の隙間に手を伸ばし、がんばって拾ったすぐでこぼこした、まるで目と目と口のように三つの穴があき、裏にまでその穴は空洞となつてつながり、片目をつぶって穴の向こうを見れば屋根でも風車でもロープウェイでも見つけられる怪物の顔のような大切な石をいじめっ子は奪い、どこかへ投げてやるのがなよりの目的だった。男の子は、返して、とも言わずにじっと石がどうなるかを見ていた。誰かの家の敷地に投げ込まれたり、側溝に流されたり、アパートの隣のお寿司屋さんの屋根の上に放られたりして二度と取り戻せなくなったときのことを考えたから、石が屋内駐車場に入ってすぐの天井にある、ここからは見えないけれどきっとある鳥の巣にむかって投げつけられたことは、よかった。いじめっ子は巣にうまくぶつめた。野球部だった。キャッチャーだっ

た。高校までずっと続けた。甲子園にも行った。巣のなかには雛はもういなかった。新聞紙は三年も取り替えられておらず、巣で雛が育ち、親鳥が餌を与え、寿命で死に、子どもたちが巣立っていったずっとあとになっていじめっ子は巣に石をぶつけた。恐竜はすごく安心した。巣は雨風に当たらずともだんだんと古くなり、軽くなり、石をぶつけられなくとも三ヶ月後には道路を八メートルくらいの直径のタイヤを積んだ横長のトラックの通る振動によりコンクリートの壁から簡単に千切れ、三年前の糞にまみれた新聞紙に落ちるのだったが、いじめっ子は落ちてくる巣と天井に跳ね返った石を顔で受け止めた。巣はいじめっ子の額と口のなかで弾けた。石もまたいじめっ子の鼻で跳ねて地面に着地し、音をたてることなくビー玉くらいの大きさの破片となって男の子は石を見た。恐竜の化石かもしれないとベッドに寝転がりながら布団のなかで温めた男の子が眠ったまま立ち尽くした。いじめっ子は高校二年生の冬の部活の合宿で、鳥の巣に石を投げたら巣が顔に落ちてきて汚かった話を思い出して友達に笑いながら話したとき、石が怪物だったことなんて思いもしなかったし、記憶のなかの男の子はいじめっ子といっしょに心から笑っていた。

「うわあ、まったくバカだなあ！」

でもあの子の名前はなんだったろう？ 顔を上げるたびに宛てもない穴ぼこから犬や猫が双眼鏡でこちらを覗きながら遊ぶように鳴いてくるのをいじめっ子が聞きつつ、背中に男の子が張り付いている。ほくろが顔に三つある。赤いリュックサックの中の皺くちなな老人。夕闇に蟬の亡骸が積もり積もって山になった公園の中心で、キャンプファイヤーのような焚き火がじゃがいもを焼いていた。例年になく乾燥した風が毎日のように吹き続き、七メートルの木の黄色い葉っぱはなんとか耐えしのいできたのにある朝八時、一枚の葉っぱが枝を離れてから二十八秒のあいだにすべての葉っぱが滝のように落ちて地面が揺れ、木は冬となり、葉っぱは落ち葉となって箒でかき集められ、余すことなく焚き火の温度に転化した。冬なのに麦わら帽子をかぶった女の子が、家の鍵をなくしたと言って泣きながらぐるぐるとまわり、公園を見渡し、落ち葉に足をすくわれて転んでも、背負っているトリケラトプスの茶色いリュックサックのポケットに鍵はちゃんと入っていた。焚き火が煙で空とつながった。カラスが煙を三口食べた。鍵は地面にぼろりとあらわれた。

その女の子といっしょに死ぬまでいたい男の子は四十三年後、二十歳のころを思い出そうとするのだった。もはや子どものころのいじめっ子なんてどこにいるのかわからなかったし、わかる術ももたなかったし、どうでもよかった。今日が晴れるか暖かいかが気になって仕方がなかった！ 男の子は日曜日に十九歳の女の子と二人で街の中心にある植物園、広々とした森のような植物園の白い門をくぐり、女の子と二人で用意したバターロールに挟んだハムと卵とマヨネーズとレタス、おかずとして焼いたバジルのソーセージと塩漬のきゅうり、水筒に入れたアップルティー、おやつチョコレートが、女の子の高校生のころに買ったかごの中に入っていた。植物園は広かった。空は雲一つなかった。街の中だとは思えなかった。四百年前に豪族の館があったここには山でもないのに豊かな自然が残されて、人工衛星から見ればぽっかりとそこだけ緑が膨らんでいたし、ヘリコプターの航空写真にも写っていた。植物にはみんな名前がきちんと看板で示された。カタクリ、リンドウ、ユキワリイチゲ、カキツバタ、ハンノキ、アサギ、マツ、シイ、コナラ、ヤマブキソウ、タチツボスミレ、キク。吹いてくる風は冷たくても太陽は夏休みのように透明だった。道を両側から挟む水路が落ち葉に覆われ地面のようだった。植物園の真ん中にある池の周囲はすすきが生え並び、空には飛行機がいくつも音もなく飛び、きりんの頭のような形の黒い木の幹が枝葉の茂みの隙間からひよっこり飛び出てすずめを目で追い、小さな橋で渡れる池の中の孤島で男の子と女の子がお弁当を食べた。おいしかった。朝から男の子の家で手作りをしたのはすごくよかった。男の子が iPhone で女の子と太陽の写真を撮った。お弁当の写真を撮った。木のベンチが四つあった。水筒で注ぐマグカップのアップルティーから湯気が立った。女の子が男の子を撮ると後ろがまるで荒野だった。空が植物園に流れ込んでいた。二人のベンチの隣に四人家族がやってきた。幼い兄弟二人が池を囲う紐に乗りかかったり、

いい天気だね、と言ったり、ジャンプしたり、口の中をおにぎりでいっぱいにしたりするのを見て、女の子がすすきを拾い上げ、くるくる回すと綿が飛んで男の子の黒いコートにたくさんついた。兄弟が喜んだ。シャボン玉のようだった。すすきも飛ぶことができた。女の子は、電話を発明した人がズボンのポケットに外国の種をたくさん入れていて、毎日ぼろぼろと地面に好き勝手に蒔いていたからその国に外国の植物がたくさん生えたことを男の子に話してあげた。男の子もうれしくなって池と森をつなぐ橋の上をスキップした。紅葉が光を凍らせた。もみじが押し花になった。松ぼっくりが崩れることなく転がった。緑色の葉がマスカットみたいでおいしそうだった。男の子の手も女の子の手も冷たかったが触るとどちらかが冷たくどちらかが暖かく、たいていは女の子が暖かかった。男の子の手は冬になると乾燥していた。女の子は心配してハンドクリームの手作りをした。蜜蝋を買った。精油を買った。とてもいいにおいだった。男の子は毎日塗ることにした。帰りの電車で満員車両の座席に二人で座った。男の子は自分がいつもの世界にいる、グラデーションのように広がり続けている、ただぼくひとつであるからこそたくさんが必要だったと不意に理解し、女の子にぼそぼそと話した。女の子は向かい側の座席を指差した。目をつぶり瞑想をしている眉毛の白く盛り上がったお坊さんと、金髪の鼻の出っ張った外国の女の人と小太りの金髪の外国の女の人が並んで座っていた。女の子がiPhoneで写真を撮った。音が鳴らないように気をつけた。お坊さんは眠っていた。外国の女の人たちは笑っていた。男の子は女の子に写真を送ってもらい、お坊さんと外国の女の人たちの写真を少し加工してからTwitterにアップした。すると電車は急激にブレーキをかけながら傾きはじめた。男の子が女の子を抱きかかえ、外国の女の人たちがギャツと言い、お坊さんがようやくクリスマスケーキを満腹に食べる夢から目覚めた瞬間、電車は脱線して線路沿いのマンションの一階の駐車場に突っ込み男の子と女の子が死んでいった。四十三年後の今になってそれを見た。孫が電車がこわいとぐずるのを聞き、こわくないよ、こわくないよ、と娘が慰めている横で、今の自分ではない、しかし誰か近い、長年の友人の悲しみのように男の子と女の子を思い出した六十三歳の男の子は、それから十年後に、自宅裏の山の斜面が地震で崩れて二十三本のくすのきが壁を打ち破り泥で室内を埋めつくし、娘や息子が電話をかけても通じない真空に押し潰されながら女の子と二人で窒息死するまで、たったひとつの怪我也病気もしたことがなかった。虫歯くらいだった。親知らずが四本生えた。しかしそれもまた決して望まれたスナックショットなどではないのだろう、なるべく世界は少数に迫りやろうとするだろう、サンタさんは男の子や女の子が喜ぶプレゼントを、男の子や女の子よりもずっと正しく知っていて、それを与えてくれるはずなのだから。枕元にあるプレゼントは友だちみんなをなによりも楽しませた。大きい箱であればあるほどわくわくし、ずっと先までの安心が与えられた。このときもまたきつと群れた運命により促されることだったろう、世界は地震が起きる前に山の斜面を何十年もかけて頑丈にし、土はミミズやカブトムシの幼虫やダンゴムシが耕し、木の根は解けることのないほど綿密に絡みあい、地下水は地震の衝撃をやわらげるために薄く平たくなったある日、近所を最近歩き回っている右耳の少し欠けたのら犬は玄関前で鳴き声を室内に響かせるように吠えていた。扉を開けてあらわれた七十三歳の男の子のズボンの裾をくわえ、ずるずると引きずった。思わず転びそうになりながら男の子は女の子を呼び、なめことしようがの味噌汁を煮たてていた女の子はガスコンロの火を止め台所から顔を出し、のら犬についていく男の子を見つけてぱたぱたとサンダルで追いかけた。じゅうぶんに女の子が離れ、味噌汁の吹き上げる蒸気が和室のすみの小さな磨りガラスをまんべんなく曇らせたところを見計らって、地震を起こした。山の斜面が崩れるのは防げなかったとしても、男の子と女の子が土砂もろとも流されるのは避けられ、避難所として開設された小学校の体育館のバスケットボールのリングの下で、娘や息子と電話で泣きながら、のら犬はわんわんと騒がしく吠えた。お腹が空いているのかもしれない。一日二回支給されたあんぱんを半分あげると、ものすごい勢いで食べたあと眠りにつき、二度と目覚めることがなかった。小学校の裏の河原に埋めた。三週間ペットボトルの紅茶をかけ続けた。芽が生え、中くらいの楓の木に育ち、秋になれば紅

く色づく葉を川面にたくさん贈った。こうしてはじめて、あの地震から十二年も健康に生きた、のら犬がいなかったら死んでいたかもしれない老いた男の子は、生まれる三十五ヶ月前に母親と父親が出会い、三十ヶ月前に手をつなぎ、十三ヶ月前に結婚したことで多くの人からツツキと呼ばれるようになった、少なくとも○×さんは男の子をツツキと呼んだ。

でもそんなふうにあるのはいつの日か、あれたとしてもそこにどんな意味があるのか？ まだ選ばれていない世界ならここにいることも、ここにいないこともまた区別のつかない等価値であり、反復であり、ぐるりと回帰する背中を見つめながら、さほどの愛着もなく視線を置いていくことさえできてしまう彼らは、失くしても困らないくらいたくさんあるからと失くし続ける背中をまた失くし続ける、輪はだんだんと収縮して事切れる、すべての声、すべての身振りがほんのわずかな計算ステップ、プログラムの長さ、メモリの容量で再生産されるほどの単純さを帯びていく。声が口から耳へと直通する。

「歳を経ること自体はぜんぜんこわくない、ただ昔のわたしが決めた絶対に越え出ない場所を、嫌わなくちゃいけない場所を、大人を、越えたいと今の瞬間のわたしが思ってしまったことがこわいし、周りに誰もいなくなる寂しさがこわいし、それでもわたしがわたしに変わらないのがすごくつらい」

十九歳の○×さんがツヅキの耳もとにささやくこともまたあった。暗い部屋、朝焼けまであと四時間、誰もツヅキについてなんて聞いていなかった。ツヅキは隣で眠っていた。わたしが眠るまで眠らないと言ったのに眠っていた。数分後に起きたけれど、ツヅキは眠っていたことを知らなかった。まるで眠っていなかったように抱きしめた。もしかして、わたしの未来を考えるなんて、余計なお世話だった？ 六年前、砂漠の上にぽつんと建つ小屋の中で、夏の日差しに蒸されながら、子牛が母親の足に寄り添っていた。首を紐でつながれていた。ずっと昔からここを知っていて、ここにいるような気がした。もう子牛も母親も見捨てられ、飲むことも食べることも許されず、百年後もそうあるのが決まっていると説明された。引きちぎろうとして引きちぎれない縄紐は首を赤くただれさせ、破れた皮膚から蟻や蛆虫やハリガネムシがぼろぼろとこぼれ出るので、透明なプラスチックのケースによって封じられ、バスで砂漠の道をやってきた見学者は十メートル離れた場所から双眼鏡で覗いたり、拡大映像で見たりした。中学校の授業の一貫で訪れたツヅキがこの光景を目にしたということは、同じクラスだった○×さんもまた目にしたということだが、その記憶は○×さんの大部分を別の人間へと書き換えはじめた。特殊な計算機を実現するまでの十数年間の思考はもちろん、○×さんが生まれた瞬間から今まで過ごしてきた日々のすべてをぐしゃぐしゃに蝕んでいったことを、いつまでも計算機は覚えていた。ズワイガニの成体が、宇宙人のような刺々しい姿の幼生を描くように、またくじらの潮吹きが、宇宙のはじまる前のうるささを描くように、特殊計算機は情報の凝縮をはじめた。書き換わった○×さんは、コンピューターにより生物を作るのではなく、生物からコンピューターを作り、個々の生物を基点に量子的多宇宙と多重干渉させることで、世界そのものを計算するハードウェアとプログラムを考えさせられた。DNA内に存在するデータと、DNAそのものの記録-再生構造をメモリとして利用すること、自律した肉体-神経を利用すること、それらの並列状態において、複数の時間の走る仮想現実が別の仮想現実を物理的計算によりシミュレートしてしまうことで互いが仮想でありながら実在となること、それほどまでのシミュレーションの実在性を確保し続けるならばつまりそこでは膨大な計算量が実行されていなければならないとする逆転した論理。その設計-実現プランに大学時代の○×さんは早くも至るのだったが、しかしこの計算機の大枠としての仕組み、つまり「なぜ動くのか？」という概念的側面は、ソフトウェア会社に入社した○×さんが立ち上げた小さなプロジェクトとしてほぼ個人的に進められ、実際に作り上げられることとなった計算機が稼働しはじめてからも、○×さん自身にすらよくわかられていなかった。わかったとしても一端でしかないことを○×さんはむしろ信じていた。本当に動いているのかすらも曖昧だったが、きっとわたしでない誰かがこれをわたしに作らせたのだろう、だからこれは動いているのだとひたすら考えているようだった。その思考の発端として、ある宇宙のどこかの○×さんが信仰していた世界観が強く影響しているのは想像に難くない。過去は現在の情報

によって定められる、情報は物理的である、自然の複雑な地図構造は収縮し拡散していく運命としての現在のあなたが再生する、そうとしか思えないほど世界は必然的に進んでいた。サイコロが千回も同じ目を出し続けた。DNAの塩基配列ひとつとってみても、○×さんの計算機に欠かせないパーツとして、構造遺伝子と調節領域という二つの仕組みを持っていることが、計算機の設計直前のタイミングで発見されていた。それは塩基配列が基盤と操作の二層の役割に分かれ、並存し、起伏に富んだ無数のネットワークを形成しているという、○×さんにとってこの上なく好都合な事実だった。

DNA内で構造遺伝子に寄り添うようにして複数設置された調節領域は、ひとつひとつが構造遺伝子进行操作する論理演算のパーツとして接続し、幾重にも分岐した階層的な電子回路のような、一群の制御機関として機能しはじめる。回路を構成する遺伝子の種類によることなく、なにがなにをどこで促進もしくは抑制するか、どれだけの強度やタイミングで影響を及ぼしあうかという関係のみに基づいて、オンとオフを斑模様に出し、それによって個々の構造遺伝子の働きがあらわれるかどうか左右され、結果として統一された単独の遺伝子ではあり得なかったような多様な形態表出が見出される。A-HOR0518型計算機では、人間のDNAを、主たる構成要素としての有機物、つまりは人体と類似した性質を持つ物体の設計図として利用した。そのため、複数人の回路が並列的に接続した状態となり、結果として内部を走るネットワークはいっそう複雑化し、パターンの種類が膨大なものとなっていった。

また、回路という形を持つことが、ネットワークの複雑さだけでなく柔軟性をも同時に導き出す側面もあった。形態を変化させる際に遺伝子自体を加工すると、その遺伝子を用いている全身の部位に影響が及んでしまったり、それ以降もとの遺伝子状態を不可逆的に失うことになってしまうが、回路だけなら回路影響下の部位のみの変化にとどまらせることができ、遺伝子自体もそのままの状態を保てる。同時に、現在個体レベルでは機能していないがひそやかに世代間で保持され続けてきた埋もれた制御回路を再利用し、突然の環境変化に適応できるかつてのパターンを取り戻したり、もしくは既存の制御回路を新たに組み合わせ別の分野に流用することで、これまでになかった形質を素早く創り上げたりすることが、生物を利用した計算機には可能だった。

では、なぜ人間でなければならなかったのかと言えば、それは人間が持つ遺伝情報以外の外的発展要因の、他生物に類を見ない豊かさによるものだった。生物は身体内部の遺伝子構造に従い変容する一方で、DNAに含まれない細胞内物質、極小生物の影響や、発育するなかでおかれた生存環境、周囲の個体から受ける文化的作用なども、生物としての時間的形態運動を続けるには不可欠な条件であり、それらがなければせっかく複数個体のDNAを接続し、培養しても、均一な肉塊にしかならない。万が一不規則性が見出されたとしても、それは単なる不慮の事故でしかなかった。そのため重要視されたのが、生存時のデータログを用いたシミュレーションプログラムであり、これが繰り返される演算の最初の一押しとして機能することが期待された。画面上を点が左から右に移動しているとして、画面中央で止まったとき、多くの人はここから同じような直線的軌跡を歩んで右端の画面外に消えていくものだとするが、そんな根拠はどこにもない、しかし確信してしまう。つまり無から一定の規則性にのっとり運動を生み出すための初動が、規則性を内破する反響波紋の第一となり、あとは自ずとフィードバックの連鎖が最初にあったデータログをはるかに超えた複雑さをもたらす、物理的肉塊へと圧力を与え、それに応えて発現する身体特徴や論理回路、かつてなかった臓器やAnd/Or/Notに収まらない演算子が、またシミュレーションに亀裂を与えていく。それだけにとどまらず、他の個体において生じた異変を誤作動的に各々の個体のネットワークが処理してしまうことで、そこでもまた単独ではあり得なかったような亀裂が現れる。他者との間、そして以前までの自己との間で歪な情報贈与と再生が何度も繰り返し相互的に行われ、加速度的変化とその絶えまない実在化は進んでいき、そうして組み立てられた巨大な循環装置にさらに外部衝撃として、DNAへの意図的な情報書込が餌のように与えられ、計算機に入力されたいくつもの項は、ひとつの回答を弾き出すと

いうよりは、多重的、場合によってはひたすら矛盾した現象を記述することで自らを発展させるトリガーとした。それが決して誤りではなく、この宇宙だけにとどまらない無限数の多宇宙を貫く観測結果として計算機使用者の前に提示される。計算機使用者はそれを受けて再び餌を用意する、○×さんは自分の思考を計算機に使用させ、計算機もまた自分の思考を○×さんに使用させる。こういった特徴を最大限に生かすためにも、他の生物種ではない、人間が、それも年代的に近すぎず遠すぎもしない人々がひとつの場に同居する必要があったのだ。その過程のなかで注意すべきは、多宇宙を利用して何千回も何万回も自動的かつ瞬間的に繰り返される計算出力にともなう、この宇宙の、他惑星への影響だった。

ひとつの宇宙の現象と、その隣の宇宙の現象が、波打つように干渉し、連鎖を続けていくことで、たとえばA地点で生じた音が、いくつもの平行宇宙を通過するうちに座標をずらされていき、迂回して返ってきた音は遠く離れた、しかし別の宇宙ではない、この宇宙に位置するB地点で響いた。波長の異なる音として返ってくるならまだしも、場合によっては音ですらなくなり、致命的な亀裂となってB地点の銀河を根こそぎ呑みこみ、また別の宇宙に伝わっていくことだって珍しいことではない。特にこれは、別の宇宙との結節点が段違いに多いがために干渉の集中する惑星、それも生命を抱えた惑星にこそ生じやすい現象でもあり、さらに言うならば、一般的な生命活動なら到底考えられないほどの多宇宙干渉を局地的に起こすA-HOR0518型計算機が、ひとつの計算を終えるたびに無限にも近い数の惑星、銀河、生命を揺るがしていることは容易に想像がついた。ともあれそれは、A-HOR0518型計算機がまったくの例外的外傷を多宇宙に通じて与えてしまっている根拠となるわけではなく、生物という高度な情報媒体に達さずにはいられない粒子たちが途中で潰えることなく生きていたなよりの痕跡でもあったため、ひとつの宇宙から見れば作画的かつ破壊的な装置だったとしても、多宇宙から見ればいたって自然な現象、偶然的で局所的な現象であるとも言えた。そもそもいつかはどこかの宇宙で、結果的にはすべての宇宙で、必ずA-HOR0518型計算機に相当するものが生み出されるよう、全物質、全生命、全粒子はあらゆる最初から動いていたのだ。種子は欠けることなく埋め込まれていた。○×さんでなくてもよかった。○×さんがきっかけであるわけでも終わりであるわけでもなかった。ある宇宙において、DNAの塩基配列の仕組みが異なっているのであれば、その仕組みに適したやり方で計算機は設計されたし、遺伝子自体が持つ複雑さや柔軟性が乏しければ、そのつど遺伝子とは別の素材が選ばれることになった。たとえ人間も犬もバクテリアも見当たらない宇宙であったとしても、生物に類する役割を持った存在がいつまでも生まれえないままであることは決してなく、未来の一点で、自らを環境に適応させ繁殖していく存在、生命が生まれるよう、すべての粒子は流れていた。バラバラに散らばった情報が、淘汰をへるなかで、あたかも意思を持っているかのように集まっていき、形を持ち、大量の情報が入り乱れる結節点として、いまこの時間や宇宙を創りつつ、他の時間や宇宙へと自らを伝えていくこと、惑星も銀河も生命も同様に生きること、その極致のひとつが○×さんと見なされただけのことであり、○×さんはここには一人もいなかった。

シャライもカズナもツツキもハルも見当たらない。あるのは計算機であり生命であり宇宙であるもの、それしかなかった。塵が集まって星となり、星の上で元素が集まって山や海となり、そのうごめきのなかで生物が生まれていったのと同様に、計算機にはいくつもの意識が集まり、虹色の宇宙として星を持ち、生物を持ち、彼らが集まって作られた計算機のなかに、またもや宇宙が見出される。大きなもののなかに小さなものがどこまでも含まれていくようでありながら、実際は大きさがどれも同じくらいに広がった。横軸に宇宙が並び、縦軸にも宇宙が並び、斜めにも前後にも波の伝わりうる無限個の宇宙の全景。かつて世界は先へ先へと進み続ければ直線的な断絶があり、広大な海面が直角の滝に落下し、世界の外枠として見つけられるものだったからこそ、誰も大海原を進み続けるようなまねはしなかったのだが、あるときからおそろしいことに、海はどこまで進もうとも途切れない球体となり、愚かな船は、左に顔を向ければすぐ見つけられる故郷の港に、反対側からぐるりと遠回りしても行けるといふ推測、説明を信じてはじめて海を

進み続けることができた、そんな話が今も多くの場所で口にされていたが、それは数百年のあいだに過ぎ去った歴史が、数えきれないくらいたくさんの目に収縮し、吐き出され、拡散し、また収縮し、その過酷な自然現象にさらされるなかでも歴史が本能的に生き残ろうとした結果、進化を遂げ、姿を変えたものだった。かつてあったという問題は、地球が平面であるのかないのかではなく、愚かな船と船員が、すぐ左にある故郷の港に右から向かうというかつてない長旅に耐えられるかどうかだった。宇宙も、右に進めば左にたどりつく、そんな近距離なものでないにしても方角的には右の先に左があり、途中で引き返さずともここに帰ってこられると信じて、エビがいつまでも星間を泳ぎ続けた。愚かな船が旅をした。海は一周すればもどってこられるくらい閉じ込められた場所なんかじゃない、右に進めば左にたどりつくのは狭さじゃない、どこまで行っても端のない広がりのことだったのに、そんなことも知れないほどの旅をした。ひたすら生きた。小さなささやきが石になり、岩になり、山になり、巨大な星間物質にまで成長し、軌道上に鮮やかな青色の惑星を見つけた瞬間、ささやきは隕石になった。

大きさは、音速の四十倍以上の速度で惑星に直撃した瞬間も、一端がまだ飛行機より高い空にあったほどで、生じた爆発はそれから六五〇〇万年のあいだに惑星上で発生したどんな現象とも比べものにならない量のエネルギーを放出した。自らの生み出したその膨大な力によって粉々になった隕石や、高熱に晒されて気化した惑星の爆心地の地殻は、激しい回転に混ぜ合わされながら炎に包まれた上昇流となって速度を増していき、地下十キロメートルに埋れた石英の結晶をも根こそぎ巻き上げた。宇宙まで膨らんだ赤黒い上昇流は、惑星の表面をくまなく覆い、隕石と地殻の飛び散った物質は惑星と衛星の間まで達したあと、惑星の重力によって、爆発に巻き上げられたときと同じ力で大気に飛来し、四日間、夜空を光線として照らしつつ地表に降り積もるものもあれば、惑星の重力圏内から逃れ、宇宙空間をさまよい、数万光年の旅路の果てに黄色く染まった惑星の重力に引きつけられ、同じような夜空の流星として世界を照らし、地表に降り積もって堆積層を形成したのもあった。いずれにせよ衝突地点だけでない、ほとんどの場所で高温が長々と維持され、水分をたくさん含んだ沼地のそばの草木でさえも余すことなく干からび燃え上がり、数時間前まで元気に過ごしていた恐竜たちの意識は高温の広がりにあわせて薄れていき、まわりの、さっきまで自分がのぼって遠くの河原の上に揺らぐ山脈の蜃気楼を眺めていた巨木や茂みが、内側から炎の塊を吐き出す苦痛なんて理解する覚えがなかった。地表は海底のように光の届かない真っ暗な夜が幾日も昼を抑えつけ、朝を抑えつけ、春も夏も秋も冬も抑えつけ、青い雨が降り注ぎ、雲は高速で流れ行く大荒れの海原となり、運良く焼けることのなかった植物も光合成を奪われて枯れ果ててしまったことにより、岩場の影に隠れて大爆発から耐えしのいでいた動物たちの食べるものも睡眠も暖かみもこの世界にはもはや見当たらず、六五〇〇万年後の街の下の地層には、徐々に白い粘土層が刻まれはじめていった。それは隕石が落ちさえしなければ今日という日がなんら際立つこともないたくさんの日々の中のの一つとして見なされていたにも関わらず、隕石の落ちたときには凹凸を薄められ圧搾されてしまう惑星上の風景の、広大かつ切れ目ない閉鎖循環の記録として残された。被子植物種の五一%、裸子植物種の三六%、シダ類の二五%が、絶滅した恐竜たちとともに一枚の平面に封じられ、それ以降の時間には進むことを許されず、なんとか生きながらえた風景も、豊かな森林を取り戻すのに一万年、陸地の炭素循環が落ち着くのに十三万年、海底への有機物沈殿量が落ち着くのに三〇〇万年かかり、かつてと同じ風景ではなく別の惑星、たとえば地球の風景を獲得することになるのだった。

恐竜や大型爬虫類が絶滅したあと、浅く暖かな海や川には魚があふれ、木々や腐葉土からあふれ出る栄養がすみずみにまで行き渡り、なおかつサメやワニはいても、かつてのような荒くれ者がいないことを、陸地の哺乳類たちは羨んだ。森や山はいまだに植物の燃えかすが点在し、ティランノサウルスの頭蓋骨にうさぎの一家が新居をかまえ、恐竜にいきなり踏み潰される心配は見当たらずとも、自分たちの餌もまた一日一食しか見当たらず、多くの飢えで苦しむ動物たちは、いきなり海は無理でも川くらいなら大丈夫かもしれないと考え、穏やかに揺れる川面に次々と、率先して沈んでいくのだった。泳ぎが人一倍うまく、幼いころからもてはやされてばかりだったハイエナは、一週間、川の中で暮らすことができたが、泳ぎはまだまだ続けられても、耳が聞こえず、鼻が使えず、獲物がどこにいるのか自分がどこにいるのかさえわからないハイエナは、小魚たちに背中をつつかれ、ザリガニたちに尻尾を挟まれ、四方八方から浴びせられる笑い声に全身をじたばたとねじったまま、川底へと沈んでいった。もはや誰もが諦めかけていたところを、ぼちゃんと川面から顔を出した犬のような小さな魚が、冗談めかした表情で見つめていた。魚ではなかった。みんなは信じられなかった。三ヶ月前に川底に沈んでしまったはずのくじらだった。くじらは、泳ぎがそんなにうまいというわけでもないのに、みんながすっかり忘れそうになるまで川の中で生きられた。魚をたくさん食べ、貝を食べ、エビを食べて楽しく豊かな生活だった。どうしてなのかよくわからないままひとまず羨ましがられたが、くじらも自分がなにかしたわけではなく、鼓膜が人より分厚かったという、ただそれだけのことだった。陸地に住んでいたとき、くじらは音を直接聞くのではなく、地面に耳を当てて、その振動で獲物が近づいてくるのに気づいた。水中でも、わざわざ空気を通さずとも、水の振動、それが聞き取りづらいときには川底のハイエナの骨に耳を当て、獲物を見つけた。三ヶ月間は、みんなを驚かせるために水中にい続けたけれど、少し我慢していたもので、みんなに知られてからは家を川辺に引っ越して、陸地で夜を眠り、朝に起きればこっそりと浅瀬に潜んで、水を飲みに来てきたネズミをぱくりと食べた。魚をメインディッシュにした。貝はデザートだった。天敵になるはずのワニたちは、急にあらわれたよそ者をこわがり、しばらくはそっとしておこうと決めたため、幸せは尽きることがなかった。川に転がるきれいな石を拾い集めて趣味にした。

しかし、だんだんとくじらは、川辺の家に毎日帰ることが億劫になってきた。水の外に出れば夏は暑いし、冬は寒い。ぐずぐずしているうちに眠ってしまい、目覚めたときにはもう夜を水の中で過ごしてしまっていた。最初は、たまにある誤りだったのが、いつしか二日に一度の習慣になり、あつというまに家は水中に引っ越す手はずを進めていた。そうなれば、しだいに、水中を伝わる音をもっときれいに聞きたい、今は聞こえるといってもハイエナたちに比べれば聞こえるだけで、布を頭にぐるぐる巻きにしたような音がごぼごぼと感じられる、日のうちの数時間ならまだしも、一日中過ごす場所の音なら音のまま聞ける身でありたい。そんな希望をいつか、来世にでも叶えばいいと思っていたが、川の家で過ごすうちに、周囲の魚や貝やエビがほとんどいなくなってしまう、それはくじらが食べつくしてしまった。食欲はかつてより溢れんばかりに手足を引きつらせ、いてもたってもいられず再びの引っ越しを決めた。川を上っても川は細くなるだけで岩がごつごつと邪魔をする、そうおじいさんに聞いたことがあったから、ひとまずくじらは川を下ってみることにしたのだったが、引っ越した先でも三十年も経てばまわりのみんなを食べつくしてしまう、いつからこんなに食欲旺盛になったのだろう、生まれつきのことだったっけ、空腹の頭をくわくわ振りながら、くじらは下流への引っ越しを幾度も繰り返した。いつのまにか川は横幅を高速道路くらいに広げ、野球場くらいに広げ、だだっぴろく開けた平原のようにまで川幅は広がり、その度にくじらの食欲は上限を増していき、河口をくぐった。そこは川幅が大陸くらいに広がる場所で、海だった。潮のかおりがく

じらの鼻をくすぐったが、あまりにもはじめてのことだったので、くじらは雨上がりの日に食べるかたつむりを思い出した。もう雨の季節になったのか、最近は日々がすぐに回っていくものだなあ、かたつむりは実際にそのとき海にあふれかえっていた。大雨と、大洪水、さらに大地震によってやってきた津波があらゆる溝から溝を洗い流し、かたつむりはみんな一度山あいにも運ばれたあと、森のさるやオオカミやマントヒヒといっしょに海に引きずりもどされた。でもかたつむりの体はとても小さかったし、かたつむりのにおいは塩漬けにされたことでまったく消え、くじらが目にしたのは食べきれないほどのかたつむりの海だったのとは裏腹に、くじらは潮のかおりを味わった。

見たことのない魚が、エビが、貝が、さるやオオカミやマントヒヒと混ざりあいつつあたりに泳いでいた。真っ赤な魚がいるかと思えば、平べったい、目のおかしな位置にある魚がいたり、頑丈な甲羅を持った巨大な蟹がいたり、ビニール袋のような生き物がいた。くらげだった。かたつむりは塩によってだんだん溶けていき、お腹が空いたくじらはあわてて目に付く生き物をすべて飲み込むと、終わりがなくなってそのまま大海原を進み続け、新居をどこにするかという考えをすっかり忘れてしまった。だんだんと体がしびれてきた。目が飛び出そうになってきた。時々陸地の方にもどって川の水を飲んだり、海岸で日差しを浴びたりする必要があることを学んだ。遠くの沖合いと近くの沿岸を行ったり来たりしつつ、徐々に南へ、南へと渡り、南から北へ、北から南へと一周しはじめたころ、もうくじらは、昔のように質の悪い音を聞いてばかりの耳ではなくなり、質のいい音、さらには自分の出した音の反響を聞いてまわりの動きを音として聞けるまでになった。目があまりいらなくなっただけだった。また別のくじらは、低周波の音を話したり聞いたりできるようになったことで、遠くのくじらと連絡がとれるようになった。どちらにしろ、陸で暮らしていたころよりも便利になったと、くじらはもうほとんどかつての自分を覚えていないにも関わらず、満足げに自分の体を眺めた。すると、いつのまにかワニのように頭の上にあった目が顔の横にずれ落ち、口先にあった鼻が代わりに頭の上に這いのぼって潮を吹き、歯は尖ったところが磨り減って平らになり、もう何日も魚を噛んで食べたおぼえがなくなっていた。たまに砂浜でひなたぼっこをするときに使う手足は、水かきのある手と、体に比べ不釣り合いに大きな後ろ足になっていて、はたから見れば、アシカがペタペタと岩場を歩くように、くじらは歩いていたのだ。その足も、徐々に薄くなり、短くなり、細くなり、陸地では使い物にならなくなってからは水中で体をくるくるくねらせて遊ぶのに使い、それもしばらくすれば飽きてしまうと、足は小さな跡として皮膚の内側に収納され、骨盤は失った。

海水しか飲まない生活でも平気になった。河口で淡水を飲みたいとも思えなくなってきた。ほんの数百年の間にくじらは、地球を四十周し、高血圧も気にせずいられるくらい塩分に強くなっていた。二千もの船にぶつかり間違っただけで沈没させた。遭難した漁師たちに横腹の肉を少し分けてあげた。お腹を減らした漁師たちが十日ぶりに食べるくじらの肉のあまりのおいしさにげっぷをして、幸せそうにいびきをかきながら眠るのを見て、雲まで貫くくらいの潮を吹いた。海沿いの山の斜面でみかんを育てる農家の子どもたちが、電動トロッコに乗って山を登りながら、くじらの吹いた潮でできた虹を追いかけた。虹は数えるまでもなく七色をゆうに超えていた。太陽が虹よりも後ろに退いた。子どもたちはくじらを見たことがなかった。ヘリコプターみたいな形をしているのは知っていた。くじらははじめて船を沈めてしまったあの悲しい夜から、少なくとも六百年は伝説の動物として茶色い巻物に描かれ、探検記のなかの恐ろしい怪物として話され、漁船の発達とともにくじらという種別が図鑑に詳細に載ってからも、イラストで紹介された筆箱くらいの大きさのくじらとは、重さも食欲も皮膚の硬さも比べものにならなかった。

もはやくじらは、仲間のくじらからもいびつな目で見られるようになっていた。海で暮らす彼らには陸で暮らすための手足など考えたこともなかったが、くじら自身は覚えていなくても、くじらには手足や骨格に陸で暮らしていたころの記憶があった。その微かな時間の響きが、陸地の景色と海中の景色のどちらがいいかの選択を与え、それに対する応答は一秒ごとに何度も矛盾したかたちで算出され、くじらの肉体

に蓄積されると、時間の響きはかつて失った手足になった。体の側面に生え揃っている、見覚えのない凹凸が手足であることに気づいたとき、ようやくくじらは、これまでずっと暮らしてきた海に飽き、死ぬまでに一度は陸地に暮らしてみたいと思っていることを知った。

朝日と夕日の下で、存分に一日跳ね泳ぎ、大好きなサザエとハマチとわかめを喉の詰まるほど口に流し込むと、満腹に酔いながらこれまでの自分の気ままに泳ぐ姿をひたすら弔う夢を見た。惑星上のあらゆる海をうねらせる数億頭のくじらは、それぞれ起こした波の青々としたよどめきの間隔と、海猫たちの沖合からの一列な飛来によって、さびれた港町に伝わり、人々は発見された琥珀のなかの小さな虫のようにざわめき目覚め、港では一週間のあいだ漁が打ち止められて、船はすべてくじらのために道を開いた。くじらはその港町を通り、山を目指すことにしたのだった。夏休みでもないのに朝から学校が休みになった子どもたちは、毎日、海岸線に沿って並んだ屋台でりんご飴を食べながら、くじらはすごいよね、すごいよね、と歌うように口ずさみ、「すごいよね」の「ね」のところで一齐にジャンプした。一番よく飛べる子は三メートル先までジャンプした。そして夕方までけたけた笑った。くじらや子どもたちと比べ、街そのものは、もちろん祭りであることは確かなのに、どこかそっけない気持ちが拭えなかった。ここはくじらにとっては通過点でしかないから、くじらのやってくるその日だけで騒ぎは終わり、また明日になるといつも通りにつらく繰り返される漁がはじまる。子どもたちはもうすぐ夏休みだから山に遊びに行けるのがうれしかったのと違い、街には旅ができなかった。子どもたちが祭りの準備をしなくても、母親から今日だけの特別のお小遣いとして三百円もらい、みんなで屋台のいろんな種類の食べ物を買って分けあい食べながら、くじらを待つのを誰も咎めたりしなかった。

漁師の男たちはビールを片手にぼんやり空を見ていた。女たちは港の飾りつけをするためにいくつかの家で集まり、男たちへの愚痴を言いながら、ひたすら色紙を切っては貼りつけて輪にして繋げるのを、夜通し続けていた。ようやくすべて作り終えたときにはもう当日の朝が来て、カーテンを開くと、空は生ぬるく濁って今にも雨が降りそうだった。昨日の段階では今日が晴れだとテレビのニュースは予報していたのに、今朝の新聞では今日は朝から晩まで雨がずっと止むことがない。せっかく徹夜で飾りを用意し、朝一番に港から山への商店街を通る一本道を、今まで街が経験したことのないくらいきれいに鮮やかに飾り付けてあげようと思っていたのに。くじらは寂れた街の様子を記憶するのだろう。諦めてぼったり床に倒れて眠る何人かがあらわれはじめた昼前ごろ、なんの前触れもなく急に雲は沸騰し、とぐろを巻き、渦の中心が青空に向かってめくれ上がると、太陽が三分の尖った光で室内に刺さって来た。あまりの熱さに目尻が焦げはじめ、驚いて飛び起きた主婦の一人がテレビを点けてお昼のニュースを見ると、天気予報士が今日は昨日に引き続き例年通りの晴天で、たくさん子どもたちが熱中症でばたばたと倒れるでしょうと笑った。塩分を取るべきだった。

主婦たちは急いで各々の日焼けどめとサンバイザーを身につけに家に帰ると、子どもたちはついにやって来たくじらの日に傘を持たなくても怒られないことを知って廊下を駆けまわり、夫は漁がどちらにしろ今日も休みになるのを知っていたから昼までずっと眠っていたけれど、妻が帰ってきて足を何度も踏むからようやく目を覚まし、GOBACKと書かれた下にネズミの落書きのような絵が入ったよろよりのTシャツに、ジーパン、紐の千切れた紫色のスニーカーを履いて外に出た。茶色く焼けた皮膚がちりちりと蒸発した。いたるところから太鼓の音やカセットテープの祭り囃子が反響して聞こえた。街は心を決めて、一日だけの祭りを楽しむことにしたようだった。途中から晴れるのではなく、最初から雨の予感もなく晴れていたのだったら、ここまで潔くあれなかったかもしれない、そう考えると一喜一憂した自分の疲れも無駄ではなかったと、主婦たちはみんな穏やかな気持ちで色紙の飾りを入れたダンボール箱を抱えた。漁船の一隻も浮かんでいない海は、水面が震えるたびに光の砕けた角度がいくつも集まってきらめき、ふやけた日差しが海の底のくじらの背中にまで届くと、くじらに今日がとうとう陸に上がる日だということを知らせた。

子どもたちは慌てる母親からひとまず持たされた塩のかけらを互いに投げあい、頭からつま先まで塩で痒くなってしまったけれど、おかげで熱中症は子どもたちを見放した。そのかわり、防波堤に並んで座り、ビールを四杯も五杯も一息に飲む父親たちの頭は熱中症にやられた。気持ち悪くなって海に嘔吐したり、寝転がったりすると熱せられた防波堤が鉄板のように硬く頬の皮膚にめり込んでいって、起き上がれなくなってしまった。じたばたしているうちに、いつもはお昼の十二時と夕方の五時に鳴るサイレンが急に鳴った。くじらがやってくるのだった。防波堤に張り付いた男たちはいつそうじたばたするけれど、どこからどこまでが皮膚で、どこからどこまでが防波堤なのかわからないくらいに張り付いているために動けず、必死に目だけを海原に向け、海に吐くだけで寝転がらなかった男たちは、おかしい姿勢で助けを求める男たちを尻目に、気持ち悪くても飲み続けていたビールをまた一息に飲み、新たにジョッキのいっぱいまでビールを注ぐと、こぼれそうな泡を吸いながらぞろぞろと砂浜に向かって駆け出した。それを見て子どもたちは、まだまだ口三つ分くらい大きいりんご飴をすぐさま噛み砕き、女たちはカラフルな飾りつけの途中だったけれど、商店街はくじらの通り道ではなかった。

砂浜に集まった男たち、子どもたち、おじいさんやおばあさんたちのすべての耳に、空白がへこんで跳ねるような、パコンという音が連続して五分間聞こえたけれど、最初はその小さい何気なさのために誰もが空耳と考え、しかし次第に子どもたちの足がパコン、パコンのリズムにあわせて地面をけつりはじめると、大人たちもパコン、パコンという音がどこからともなく実際に響いているのだと知った。互いに顔を見合わせ、地面をうろつき、空を覗き、海と空の貼りつく沖合へと目を細めると、それを合図にして水面はきらめくのを止め、広大な一枚の塗装されたプラスチックとなり、港から水平線のかなたへと一本の直線が、一瞬でどこまでも途切れることなく引かれた。真っ白に充血した直線は、海を右と左にぱっくり区分けしてしまい、右の面と左の面が直線を境にして、それぞれ内側を高めるように傾き、ぐんぐん陸地を越え、山を越え、地面と海面の角度が四十五度を越えたあたりでパコンと、またもやあまりに軽すぎる音が街中に響き、海の表面が割れ、斜めにスライドするような動きで底に沈んだ。そして直線のあったあたりから、くじらが三頭砂浜にあがった。

そのうち一頭が、人間の手足を持ったくじらで、残りの二頭は手足を持たず、巨大ではあっても形としては、図鑑で見たことのある通りのくじらだった。間違えてついてきてしまった。他にも四十頭ほどのくじらが、海面から顔を出し、今にも砂浜に上がってこようかというくらい、手足のあるくじらを見守っていたけれど、手足のない二頭のくじらが、男たち、子どもたち、おじいさんやおばあさんたちに囲まれながら、砂浜の砂や空き缶や、乾燥したわかめやポリ袋にまみれて、ずー、ずー、と息のない呼吸をしているのを見て、なんとか見守るだけに自分をとどめた。初めて出会うくじらに興奮してぐるぐるくじらのまわりを駆ける子どもたちを尻目に、男たちは、くじらが砂浜に座礁して死ぬと、翌年にはどれだけ船を出そうとも、どれだけ網を投げようとも、一匹も魚がかからず、網の中には赤黒く太ったタコばかりが埋めつくし、あまりにも獲れすぎたタコの重みは、漁師の船を一隻残らず沈没させるという言い伝えを、ろうとで注ぎ込まれるように全員が思い出し、慌てておじいさんやおばあさんたちに確認すると、曖昧に頷くが、誰一人としてそんな言い伝えを息子たちに話した覚えなどないのだった。

男たちは血の気のない植物のような顔のまま、急いで二頭のくじらを海に帰そうと必死になった。すっかり陸地の生活がこれからはじまると思っていたくじらは嫌がったが、二人や三人ほどの男たちをひれで弾き飛ばしたり、押しつぶしたりしても、男たちはどこからともなくあられ続け、二頭のくじらの体を海面に押しもどした。ようやく男たちの目にくじらの姿が見えなくなり、一息ついたころ、あまりにばたばたと陸地で暴れすぎたくじらは、自分の進みたい方向と逆の方向へ進められた経験など一度もなかったからか、ひどく衰弱していて、あっという間に死んでしまった。泳ぐ気配も、お腹を空かせる気配もなく、浅瀬の弱々しい流れにくるくると上下を反転させながら、ひたすら沈み、海底に着地したくじらの骨には、

三年も経てばびっしりと、他では見られない珍しい種類の二枚貝が住むようになった。彼らもかつては海岸の岩場に住んでいたのが、ある日見つけた流木になんとなくくっつき、そのまま海底に沈んでいってしまったのだ。流木は真っ暗な海水を転がり、徐々に分解されていくなかで、硫化水素を発生させ、それを食べる細菌が流木のまわりに集まりはじめた。二枚貝は、細菌が硫化水素を食べると、体のなかで二枚貝にとっての栄養素に変え、ぷくぷく吐き出していることに気づき、細菌をえらの表面にくっつけてみた。うまくくっついた。細菌は知らず知らずのうちに二枚貝の満腹を支えるようになった。しばらくが過ぎ、流木が完全に海水に溶け込んだころ、硫化水素ももちろん途絶えてしまい、細菌は食べるものがなくなって息も絶え絶えになってきた。あたりを見回すと、いい匂いがした。沈んで三年目のくじらの骨だった。くじらの骨は、腐った木よりも濃度の濃い硫化水素を身にまとい、それを求めて群がるいろんな種類の細菌たちによって青白く光っていた。

二枚貝は細菌とともに引越した。青白い光のなかで、えらの表面の細菌たちがよりいっそう吐き出すようになった栄養素をもっと効率よく食べたいと考えた。二枚貝は細菌に、えらの内側にまで入って来てくれるよう頼んだが、細菌は目の前のあふれんばかりの硫化水素をせっせと口に掻き込むのに必死だったために聞いておらず、二枚貝はそれをいいことに、ゆっくりと時間をかけて細菌をえらの内側に取り込み、自分の体にし、よりよく空腹を満たしていけるようになった。青白い光はきれいだった。ずっとここで過ごせば幸せだと思えた。くじらの骨に住む生き物たち、二枚貝と同じように細菌といっしょになることを決めたくらげやナメクジウオたちは、みんな余すことなくそう感じていたのだったが、黄色いうさぎの耳のような形に進化したり、骨のなかに根を張り巡らされるように進化したりするうち、いつのまにか自分の住みたい場所ではなく細菌の住みたい場所を探すようになってしまい、ある晩、細菌にとってよりよい幸せな日々を求めてくじらの骨を飛び出し、青白い光のない、しかし硫化水素だけはうんと豊富な熱水噴出孔や湧出域に引越しを重ねることになった。空き家のできたくじらの骨には、新しい生活者がまたやってきて、細菌とくっつき、慣れ親しんだ自分の姿と青白い光を譲り渡した。

それを静かに見つめていた男たちは、ふと我に帰り、慌てて左右を見回すと、そこには子どもたちとおじいさんとおばあさんたちしかおらず、あつたとしてもびっしり濡れた砂浜くらいで、それもすぐに昼間の垂直な光によってみるみる内に乾いていった。山に向かった一頭の、あの不気味に手足の生えたくじらはどうなった？ どうなった？ と子どもたちに聞いてみても、子どもたちは今ではすっかり小さくなくなたくじらの足跡を見て、それから父親の二本の足を見た。父親は漁から帰ってきた夕方はいつも夏も冬も変わらず汗にまみれた全身に、市場のすみにおかれた雨ざらしのバケツのなかの、ハエやみみずがたくさん浮かんでいる水を頭からばさりとかぶってぶるぶると顔を振り、上着を脱ぎ、下着だけを履き、夕日にまみれた通りを潮くさい臭いを散らしつつ歩くなかでアスファルトに点々と残る足跡と、さほど大きさも形も変わらないくじらの足跡は、街の人々からすればひどく見慣れたものだった。二分後には子どもたちの足裏と同じになり、三分後には砂浜やアスファルトに埋もれた。

くじらは田んぼを走り、小学校のグラウンドを走り、お寺を三つ潰し、抜いたり抜かれたりを繰り返す二台の軽トラックの一方を道路を飛び越す際にぐしゃりと踏み潰し、すべって少し転んだあと、慌てて起き上がり、再び走った。黒光りする黒板消しのようなくじらの巨体は、どこかへ向かっているようでありながら、方角なんて、海の逆だということくらいしかわかっていなかった。開けた平野から林の、森の中へとどんどん進み、山を巡り、川を弾き、岩をけつり飛ばし、木々をなぎ倒しつつ進み、その音は遠くで突然あらわれる夕立ちの近づきのようにさえ感じられたが、くじら自身にもうるさかったため、耳を両手で塞いで木々をなぎ倒した。黄色いゴミ袋の頭にヘルメットをくっつけたかかしが、斜面一帯にずらりと並んでいた。木になるみかんのひとつひとつを茶色い紙袋が包んでいた。氷の張った沼ではザリガニ釣りをする子どもたち五人が一踏みで潰され、子どもたちから出た血や骨や皮は、くじらの重みによって余す

ことなくくじらの足裏にへばりつき、沼のまわりには一滴たりとも子どもたちのザリガニ釣りの痕跡は見当たらなかった。気圧が変化してきた。耳が詰まってきた。皮膚が少し張ってきた。まともや道路に出たが、ほとんど車は走っておらず、トンネルも生まれて初めてくぐったため、月夜に道がうねうねと曲がり狂うのが厄介な以外はずっと快適に山を走ることができた。産業廃棄物最終処分場への道のりを示す看板があった。「この先 徐行」と赤く光る電光掲示板があった。道沿いにいつまでも並行する白く高いフェンスには、スプレーで描かれた麦わら帽子と双眼鏡とへびと花火があった。ロケットもあった。色褪せて炎が出なかった。

くじらは三度の眠りの果てに山奥の村にたどりついた。同じような村にはすでに六度も出会っていたが、立ち止まろうと思えなかったので立ち止まらず、今回はなぜか立ち止まる気持ちになっていた。見覚えのない村だった。古い、もう何十年も前に使われなくなった小屋の中を覗いていると、後ろから叫び声があった。出産直後の若い女の人だった。夜に、ようやく眠ってくれた息子の添い寝を夫に預け、ちょうど半年前に村にできたコンビニへアイスを買に行くのが日課だった。くじらはこの時はじめて人間を見た。なんだろうこの動物は、とのんびり思った。くじらは自分が人間だった。海で人間を見ても、ふやけていて、こんな形はしていなかったし、そもそも船に乗っている人間を船抜きに見ることはなかった。船の体の一部がぼろぼろと削れ落ちたものだと考えていた。やぼったい目の前のこの動物は、とうてい海のあのごつごつとした船とは結びつかず、どちらかといえば生まれてすぐの幼いシャチや、深海の巨大なイソギンチャクと同じに見えた。くじらは固まっていた女の人を啜え、右腕と、お腹から両足の膝あたりまでを食べると、残りを片手に握ったまま、村の役所を探した。

しかし、村の人々の方がくじらよりもそこで長く暮らすすべを知っていた。役所は朝の九時まで開かず、役所の入り口の前にある池の中の鯉を数えながら、朝焼けが村のどれも同じように古びた建物たちを塗り、小鳥の声が電線の影にあらわれるのを待った。そのうちにいまだ湿っていたくじらの皮膚は乾燥し、ひび割れ、片手に握っていた女の人顔が目覚めた。女の人が、赤ちゃんは、赤ちゃんは、というのを聞いて、くじらは女の人を池に落とした。鯉が餌と間違えて口をぱくぱくさせていた。

九時に開くため、職員は八時にはやって来た。田舎だと車の免許が欠かせない、トラクターを運転することもある、軽自動車ならなおさらだったが、村の人口からして不必要に大きな職員用駐車場に車を止め、役所に勤めて今年で三十年になるおぼさんが、かたかたと両足を小刻みに動かしながら裏口から入った。自転車で通勤する定年退職直前のおじさんも裏口から入った。入り口で待つくじらに気づけば九時を待たずとも扉を開いてくれたのに、職員の誰もくじらが役所の前にいるなんてことは想像しなかった。信じようとしなかった。だが、午前九時のサイレンが鳴り、村中が目覚め、自動扉が開くようになると、職員たちは無理やり体を役所にねじ込んで来るくじらの姿を信じずにはいられなかった。事前に話をうかがっていなかったから戸惑いを隠せない対応になってしまったが、勤続三十年のベテランのおぼさんが、慌てる若手職員を救った。村長に電話した。役所の電話のすべてには、緊急時に村長に通じる特別なボタンが用意されていて、これを押すのはまだおぼさんが新人だったころ、革命家を名乗る六人の学生が、自分たちで作った爆弾と、親の鍬を持って役所に押しかけ、村の全村民の戸籍情報を要求した。そのころ、今のおぼさんと同じような立場だった、勤続三十三年のおじさんが、村長に電話した。村長は軽トラックでさっそうとあらわれ、革命家たちに戸籍情報とは何かをたずねた。革命家たちはみんな顔の表情を濡れ布巾で隠していたが、たちまち顔が緑色に染まっていくのをおぼさんは後姿だけでもわかった。革命家たちは村長の腕を二本、鍬で引きちぎった。職員たちは革命家たちの少なくとも一人が死刑になることを確信したものの、そのころはまだ村長の腕は六本あった。村には村長よりも多くの腕を持つ人はおらず、四本になってもそれは同じことだった。あのと時の村長は五年後の農作業中の事故で腕の一本を失い、もう一本を、公園で昼寝をしていた村長を羨んだカラスの親玉に盗まれ、村長は後世に席を譲ることになった。新たな、今の村長は、

もう二十六年も四本の腕のままでいる、それが信頼の証でもあった。革命家たちは、鋏で村長の腕を削ぎ取った男も含め、村から追い出された。二度と帰ってはこなかったが、革命家たちの持っていた爆弾は偽物ではなく、村を三つくらいは簡単に消し去ることができるくらいの本物で、なぜならそれを作った革命家の一人はまだ新人だった、今ではすっかりベテランのおぼさんの、年の離れた兄だった。兄はあれから飛行機のパイロットとして名を馳せたが、つい最近極北で行方不明になっていたことを親戚に教えられた。

村長は、子どものころから朝ごはんとして食べ続けているほどお気に入りの、かぼちゃ入りのホットケーキを右手の二本で食べながら、左手の二本で軽トラックを運転して役所に駆けつけた。まだ九時四分のことだった。これだけ早く、村長がズボンもうまく履けていないくらい早く駆けつけられたのは、あなたのおかげだと、村長は勤続三十年のベテランのおぼさんを褒め称えたあと、待ちくたびれたくじらを見やった。すっかり干からびてしまっていたが、くじらであるのは村長にはすぐにわかった。

「お待ちしておりました！」

くじらは村に、コンビニと同じ半年前に建てられた五階だてのホテルを三部屋も貸してもらえた。村は五階だてなのにホテルを高層ホテルと呼んだ。村長の計らいで三部屋のそれぞれの壁を一時間で取り除かせ、ダブルベッドを四つつなげ、それでも足りないから部屋を五つにし、横幅は確保したものの今度は天井が低く、結局は四階の天井、つまり五階の床まで取り除かれ、ダブルベッドは八つつなげられ、高層ホテルは高さは変わらずとも四階だてに落ちぶれた。それくらいの手厚い配慮がなされた。シャワーを終え、さっぱりしたくじらは三つ編みの少女二人と黒猫を十匹平らげたあと、眠くなってきた体を窓に近づけると、そこから眺める景色は、四階のものだったから最高とまではいかなかったが、ホテルは高台の墓地を僻地に追いやって建てられた最新鋭のホテルだったから、村の至るところが見渡せるし、山を越えた隣町や、都会の巨大な電波塔まで探せば見つけられ、しかし海は遠すぎて見えるはずもなかった。ホテルは都会の若い会社が墓地を買い取り三年がかりで建設した。海での生活を懐かしむような不便さがどこにもない、快適な生活が保証された。

しかし、体が縮んでいくのを誰も止めることができなかった。ベテランのおぼさんが定年退職し、ホテルの外壁に苔が生えはじめ、くじらの食べものが村だけでは補えなくなってきたから仕方なく遠くの街から大量生産された牛の肉を運んでもらい、村にはひっきりなしに肉を積み込んだトラックがやってきた。牛はだんだん安物になっていった。もはや村の端のホテルが五階だてだったことはすっかり忘れられ、コンビニも山に馴染んでいき、ホテルの一階から三階までの客室のベッドにすら苔が目立ちはじめたころ、くじらは山の低すぎる気圧によってかつてないほどに外観からして老いてしまい、あれだけ海をさっそうと駆け、山を三メートルくらい横にずらすほどの速度を放っていた脚力はどうにしばみ、今ではかえるのように飛び跳ねてホテルの四階から五階のスペースを朝に一度、夕方に二度、運動した。ここはどこなのか、陸地なのか空なのか、それとも海の底の洞窟の中なのか、くじらの耳の気圧計はくるくる回り、眠って夢をみるたびに確信が変わっていく日々の季節が再びめぐり、外が雪で白く輝いていた朝十時、コートを着込んでマフラーをし、四本のすべての手に丸い手袋をはめた村長が扉をノックした。くじらに餌と間違えられないように、扉の外から村長は名乗り、くじらが返事をする、あのとき初めて出会った村長とは似ても似つかない生き物が部屋に入ってきた。声は同じようだった。目も同じようだった。しかしくじらは薄着と厚着がよくわからなかった。季節によって姿を変えるホッキョクグマも、夏と冬では同じ生き物だとは微塵も思わず、草のところどころ生えた夏の南極と、巨大な氷の絶壁の崩れる水しぶきがきれいな冬の南極は、それぞれ、くじらの惑星の違う座標に位置した。村長の姿を見たとき、くじらの頭には、薄着をしたかつての村長の腕が不健康か火遊びで失われ、若い腕の四本ある厚着をした男に村長の役目が引き継がれた様子が、輪郭のくっきりとした事実としてささやいた。くじらはまだ若手の村長に出会うのは初めてだと思い、自己紹介をした。わかっています、わかっています、と村長は優しく言った。くじらが村にやって

きたあのときから一度も村長の席を譲ったことのない自信満々な彼の目にも、くじらの姿はかつてとはどこにも同じところを見つけることができないほどに変わって映ったが、ここから出たところを村の誰一人として見たことがなかったため、これがあのクジラなのだという確信に揺らぎはなかった。

「いかがですか、体調の方は」

「だいじょうぶです、お気遣いありがとうございます。いつもご飯がおいしいですね」

「ならよかった。特注の肉ですから。」

それで、くじらさんに少し見ていただきたいものがあって」

「なんですか？ ご飯を変えるのはあんまり気が進みません。猫と女の子の肉の味にこれだけ慣れ親しんでは、いまさら鳥や牛にもどるなんて難しいです」

「ご安心を。すぐに済みますから」

くじらは村長に促されて久しぶりに部屋を出た。入るときにはあれだけ苦労したものだったのに、縮んだくじらはなんの注意を払わずとも扉をくぐることができていた。外は今まで体験したことのないほどの寒さだったが、海や山での数えきれないほどの年月と、まだ体の大きかったころ誇っていた広大な面積がぎゅっと小さく凝縮された、現在のくじらの皮膚は、もはや人工物のように硬く、地層のように分厚く、室内との温度差を感じることはほとんどなかった。

村は建物も木々も風も、かつての村と変わりなかったが、やはりくじらは、降り積もる雪の輝きと足裏の感触、木々から落ちてきて頭に当たった冬眠中のとかげのやわらかさによって、すっかり村も変わってしまったものだとしみじみ感じた。失われた姿に懐かしみを覚えた。村長は冬の村を慣れた様子でずんずんと歩き続け、くじらがかえるのように飛び跳ねて移動するのも疲れてきたころ、雪の重みで今にも壊れそうな小屋にたどりついた。ここです、と村長はくじらの目を見つめながら扉を開いた。雪のかけらがどさりと裏手に落ちた。

酸っぱいにおいのする小屋の中には、村の崇める石像が、ぽつんとおかれていた。くじらの石像だった。天井の斜め奥にひとつだけ弱々しく照らすライトによって、ぼんやりと、しかし表面が粘ついた光を反射する奇妙な材質でできているのが一目でわかるその石像は、もちろんこの世界の最初に含まれていたわけではないものの、世界がはじめられて早いうちに、あたり一帯の山々が、自然が、まるで自分の肉体を削ぎ落として放置するかのように、ある春の大豪雨の一週間に生み出したものだった。斜面を転がり、川をさかのぼり、平らな草地に出てもまだ転がり止まず、渦を巻き、風雨の過ぎ去った朝、ようやく止まった石像は、きらびやかな晴れ間の雲の下にその身をさらして以来、一五〇〇年後の今に至るまでずっと、村の種として機能することになった。

石像は、本来持つ力とは裏腹に、ただそこにあるだけでなんら周囲に働きかけようとはしなかったが、それでも村は石像を中心に、ぶつぶつとあらわれる発疹のやり方で地図上に線引かれ、たった二日のあいだに村は、天候の助けを借りずとも鼓動のリズムを生存に適した音階にそのつど微調整できるようになっていた。村の人々や動物たちは、石像を、なにかしら必要なものとして、薄れつつある、もはや自分の夢によって書き換えられたかもしれない伝承のなかに登場させ、ヤマタノオロチと戦わせたり、地震を七度止めさせたり、いたずらする鹿を空に吹き飛ばして星座を作らせたりした。はじめはおおいのししと名づけられ、それにちなんだ祭りやほこらまで建てられたが、外国からやってきたくじらの写真が、村におおいのししの偉大さを忘れさせ、石像はくじらになった。くじらの石像として村に多くの、主に観光に関わる貢献をした時代のあと、村がひたすら都会の急流から身を守り、萎み切ってしまうようなるべく物音を立てずに日々を過ごしはじめてからは、なんの手を加えられることも、また石像内部に刻まれた、未だかつて一度も起動されたことのない本来の機能の作動要因が見つけれられることもなく、ただ村そのものとして、村自身によって石像は忘れ去られていた。

くじらは石像を前にして、これはなんですか、と言った。このおかしい生き物はなんですか？

村長はそれには答えず、石像を指さして、

「あなたはかつての私たちとともにいたのです、あなたは どうお思いですか」

と言われた瞬間、くじらは石化し、一五〇〇年前の、その石像になった。

この日の夜、村の中心の広場には、四十年ぶりにくじらの石像が置かれていた。人々も動物たちも山も木々も、冷たい空気に身を潜め、眠りにつき、雪の結晶と結晶がぶつかりあう衣擦れのような音が、遠近感のない、どれも近しく並べられた景色に響くころ、月の光の下に、サササッ、サササッ、と素早く移動しては止まる、一匹の影があった。林の中から、冬眠中のトマト畑を抜け、家々の間を抜け、凍結した配水管を三本飛び越えて、足跡の一つもない、新品のような広場を駆け回った。くじらの石像の上に乗る、体中にまとわりつく雪をぶるぶる振り払うと、一匹の影は、川で溺れ死んだハイエナだった。

くじらの石像に積もった雪も前足で払い、あらわれた石肌のにおいを嗅ぐと、甲高い鳴き声を二度あげてから、死んだハイエナはくじらの石像を食べはじめた。前歯を突きたて、肉を引きちぎり、顔を上下させて喉に押し込むと、また貪るように歯を突きたてた。血は一滴も出ず、ぼさついていたが、渇きを覚えれば、雪を食べて潤うことができた。あまりに空腹だったのか、荒っぽく食べ、くじらの石像の肉は死んだハイエナの胃袋だけでなく、広場のいたるところに散らばったが、どこからともなくあらわれた、死んだハイエナの仲間たちが、無言のままくじらの石像の散らばった肉を食べていた。一匹でいるわけがなく、群れだった。またたくまにくじらの石像は広場から姿を消し、そこにはくじらの石像のかたちにと雪の厚さが薄くなっている部分と、そこで立ちすくむ、死んだハイエナたちがいて、死んだハイエナたちのすべての体を合わせても、本来のくじらの大きさが縮むに縮んだ結果としてのくじらの石像よりも、さらにいっそう小さかった。

だんだんと、星空に反射して光る雪の村が暗くなった。それに応じて、ぼやけていた建物や木々の輪郭は、鋭く、くっきりとしてくるものの、暗さがある閾値を超えると、その輪郭すらもよく見えなくなってきた。星空もそうだった。月明かりや星座たちは、なりを潜め、なにもかもが些細な空気のごらつきによって想像されるだけになっていた。暗闇の粒子が、いたるところを舞っているのが初めて見つめられた。

すると、地中のどこか、惑星の中心からなのか、それとも惑星の反対側からなのか、さらにはもっと遠いどこかからなのか、はじまりはわからないが、恐ろしい速度で地表を目指してくる光があった。その光は、あたりを照らすようなことはほとんどしないために、誰の目にも、小さな輝きが動いているようにしか映らなかったが、実際には、眼球や双眼鏡はもちろん、ダイヤモンドでできた鏡や、顔を向けることなく歩いていた子どもの骨格でさえも、瞬時に眩まし、ばらばらにしてしまうほどの光だった。あらゆる光がその一点に寄り集まっていた。そしていくつもの層を貫いた軌跡の延長線上は、とある山奥の村の広場の、くじらの石像があった場所、今は死んだハイエナが立ち尽くしている場所をも、光速のわずか手前の速度で貫いた。村の広場も畑も田んぼも民家も市役所も小学校も、川や池や山、遠く離れた港や街や海まで一瞬沈み込ませ、次の瞬間には跳ね返るようにして吹き飛ばし、質量を持った巨大な台風のような渦が生まれ、なにもかもをぶつかりあわせ、そこでもまた衝撃とともに光が生まれ、渦の中心に位置する、小さな光の一点に余すことなく引き寄せられていった。星空も光りはじめた。月に細かな粒がぶつかって光りはじめるのがわかった。死んだハイエナは光に乗せられて雲を抜け、成層圏を抜け、真空状態にまでやって来てもなんとかハイエナの形を保ってはいたが、徐々に光は死んだハイエナのお腹の皮膚を突き破っていき、胃や心臓はもちろん、あらゆる内臓、血管、骨、皮に染み渡ると、死んだハイエナ自体が光りはじめ、そしてくじらの石像とないまぜに、炸裂、放射した。どこからどこまでが死んだハイエナで、どこからどこまでがくじらの石像で、どこからどこまでが雪に包まれた村の明かりなのか、区別をつけることは許されなかった。すべてがすべての方向、内向きにも外向きにも、放たれていった。

そんな拡散が、世界にはいくつも生まれ、各々の時間で、何度もぶつかり続けていたのだった。

衝突点、そこには一度に全体を見渡すことが決してできないくらい、ものすごく小さな、数えきれぬほどの系統樹が、隙間を埋めつくすようにして、宇宙に浮かんでいた。あらゆる星座が自らを信じ切ってしまうほどの、それは美しさだった。

遠くの銀河があった。近くの星屑があった。ごくたまに惑星があったが、それも旅の縮尺からすればありふれたひとつの想起だった。これまでのすべての惑星と比べ、どのように違ったのか、同じなのか、近づいたのか、遠のいたのか、それすらもわからなくなって、もはやどれだけの月日が経ったのか。ハイエナや村やくじらと同じ情報の拡散のひとつでもあるエビは、宇宙の停止と進行の蓄積を、初動にただ従って、どこまでも飽きることなく広がり続けていたのだったが、あるとき、なんの前触れもなく訪れた衝撃に反射的に背中を丸め、縮こまった。エビの持つ反応の総体が、閾値を越えて単なる平原化した受動態に落ちぶれてしまう直前の状態で、なんとか耐え抜き、衝撃が過ぎ去ってエビが全身をぐっと反り返したとき、エビの目の前には、先ほどまでの宇宙ではなく、ネコ科の系統樹が、内臓と皮膚をぐわんぐわんと反転させながら、きらめいていた。

その小さな周回運動のなかに、エビは、エビという旅行者が自分だけではないことを知った。いくつもの海があった。脱皮の殻があった。それを遡ればもといたところに帰ることができると思った人間がたくさんあった。エビもその一匹だった。小惑星がネコ科の系統樹の尻尾に当たり、にやーと耳を逆立てた。耳からくじらが顔を出した。くじらの背中には蟻たちがいて、山積みの角砂糖を支えていた。ヨットがくじらの横を並走し、後ろからクロールで追いかける水泳選手がネコ科の系統樹の背中を這っていた。山積みの角砂糖の頂上には、優しい赤色の家があった。平屋だった。庭がとても広く、そこには山があつて、村があった。村はどんどんと成長し、港と混ざりあい、街となったが、そのなかのアパートの一室で、水槽に飼われたエビたちがいた。エビたちのどれもが、エビたちからしてみれば、ねこと仲がよかったり、トリケラトプスを喉仏に蓄えていたり、たこの吸盤を触覚の先に宿していたりするものがすぐにわかったが、エビでない犬やくじらや男の人、女の人からしてみれば、そのどれひとつとして区別はつかず、同様にエビからしてみても、どれだけ年齢や笑い顔の違う男の人、女の人を見たとして、それは図鑑通りの分別でしかあれなかった。骨格標本は、自分たちを飼う男の子の成長した姿となんら変わりなかった。

しかし、少なくともエビには、赤色が見えていた。黄色が見えていた。熱さが見えていた。冷たさが見えていた。触感が見えていた。途切れない波の伝達が、静まりかえった画用紙の上を転がる毛糸のように、どの宇宙にも共通して見られていた。エビは、そこにいた。バッタもいた。トンボもいた。ネズミもいた。蝉も、キツツキも、鮫も、ラクダも、ダンゴムシも、海水の一滴や山肌の石ころとは違って、いくつもの色と触感にまたがっていた。地図だった。タイムマシンだった。時間が飛ぶ。可能性が飛ぶ。ふらふらと揺れ動く太い線がある。その影に覆われ、似たもの同士の終わらない転生を避けること。小さな瞬間に幽閉されることも、また、すべてを抱えることもなく、順番に世界を迎えていると信じられたなら、はじめて悲しみは失われ、一秒前の赤色につながり、怯えは失われ、一秒後の赤色につながるができる。エビは、自分よりも小さな幅の穴を感じ、吸い込まれるように潜って行った。ネコ科の系統樹が眠った。くじらが三センチのジャンプをした。巨大な波が前足のつま先から広がった。エビは、いつからか、宇宙にいながら動物園にいた。よく晴れた春空が雲を包んでいた。暖かさが人々を、動物を、みんな空腹にしていた。エビははじめ、動物園の全体に訪れていたが、時間がコマ送りの的に進むにつれ、存在の範囲は絞られていき、動物園の北半分、西半分、その南半分、西半分、とエビの輪郭ははっきりしてきた。それにともない、ぼやけた体がもぞもぞと震えはじめ、半径一メートルくらいに絞られたころ、宇宙のひずむような音とともに、背中の中の殻が、縦に一本、まっすぐ裂けた。殻と中身のあいだにできたわずかな隙間には、動物園中のざわめきが、ヘビのあくびやカメの甲羅の中でのいびきはもちろんのこと、バナナみたいな鳥の鳴き声や、アルマジロのげっぷや、一日三十回分のペンギンの飛び込みの水しぶきや、トラの出産や、猿のため

の餌を欲しがる子どもたちの駄々こねや、スキップする猿山の猿たちの歌声や、動物園を風変わりな公園だと勘違いする上空のカラスの羽ばたきが、ひとつ残らず殻と中身のわずかな隙間にするすると入り込み、殻が白く濁りはじめたかと思うと、顔から尾までが外れ、すべての足が外れ、中から赤いランドセルがのっそりと這い出てきた。フラミンゴの檻の前のベンチに置かれていた。それと交わるようにして、エビがいた宇宙空間には、赤いランドセルがぶかぶかと浮きはじめた。どちらがどちらにも含まれていた。陥入していた。エビは宇宙空間にいると同時に、動物園のベンチに置かれていて、赤いランドセルは動物園のベンチに置かれていると同時に、宇宙空間を旅していた。フラミンゴたちはエビにも赤いランドセルにも気づくことなく、客からもらったタバコの吸殻をくわえていた。

動物園の地図からしても、フラミンゴの檻の前の道は、ほとんど人が通らなかったが、昼中ごろになって、ようやくひとつの生き物が歩いてきた。きよろきよろと、動物を手当たりしだいに探しているようだったが、それは近づいてくるにつれ、エビには紛れもないカズナだとわかった。とはいえそのカズナは、高校生でも大学生でも中学生でもない、五歳の男の子になっていた。

誰かが動物園に忘れていったランドセルを、カズナは拾い上げ、どこかに持って行こうとしたけれど、カズナが二年後背負うことになる黒いランドセルよりもずっと重かった。かといって赤いランドセルを背負うのは、先生や友だちから怒られそうだったため、きりんを見ようと集まる人だかりの真ん中で、ひとまず止まり、座り込んで中身を確認してみた。カズナは驚いた。ひゅっと息を吸った。背骨が八センチ後ろに下がった。慌てて蓋を閉じたが、周囲にいた大人たちは、せっかくキリンが目の前にいたのに、座り込む男の子が気になって、赤いランドセルの中を覗いていた。少なくとも七人ははつきりと覗いたが、赤いランドセルの中には何も入っておらず、空っぽだった。カズナは蓋を閉め、ずるずると赤いランドセルを引きずりつつも、全力できりんの観衆の足元に激突し、人ごみを駆け抜けて行ったカズナを、七人は、きりんと、その横にいたカバがりんごを食べる様子と切り分けることができなくなってしまった。動物園を考えれば、きりんとカバと赤いランドセルが思い出され、きりんを見れば、カバと動物園と赤いランドセルが思い出されたが、赤いランドセルを背負っている女の子たちの下校姿を見ても、動物園やきりんやカバを見たことにはならなかった。

カズナは引きずりすぎた。赤いランドセルの底とぎらついたアスファルトがこすれあい、底の金属の留め金と赤色は、少しずつだが削れていった。出口を探しているのか、お父さんお母さんを探しているのか、カズナにはわからなかったが、まわりから見れば今にも泣きそうな迷子に見えたし、このままではいけないことだけはわかっていた。一步進むたびにガリガリと大きな音が動物園中に響いた。赤い汚れたボールで遊ぶアシカたちや、人々の頭上に張り渡された紐を伝ってバナナを取りに行くオランウータンは、三日に一度はそういった音を鳴らす客もいたので特に気にせず、暖かな日中を過ごしていたのと比べ、久しぶりの休暇で家族と訪れた父親や母親は、子どものためを思って苛々とカズナを見つめた。なるべくカズナと逆の方向へ逃げようとした。だが、子どもたち自身はといえば、カズナの赤いランドセルに目が惹かれ、いつもは図鑑でしか見ることでできていないたくさんの動物たちの実際の動きや鳴き声よりも、子どもたちが小学生になったときに自分もみんなも背負うことになるランドセルが、どう考えてもいま目の前でそれを引きずる男の子よりもはるかに大きすぎることにわくわくした。昼までの学校を終え、仕事場へ向かっていた○×さんもその一人だった。遠目で見て、あれ、どこかで見たことのある赤だな、と思った。○×さんは、先に働いていて、ちょうど休憩中のシャライに出くわすと、
「さっきさ、おもしろいもの見ちゃったんだけど」

と、いつになく楽しい顔つきで話した。シャライは、白黒の写真集を鞆から取り出し、眺めていた。
「どうしたんですか？」

「いやなんかね、子どもがずるずる赤色のバッグを引きずっててさ。まわりがみんな見てるのが変でね」

「キャリーバッグですか？」

「どちらかというと、スーツケースかな」

「どう違うんですか？」

「わかんないけどね。車輪がついてるような音がしてたから。ガラガラガラって」

「それじゃあキャリーバッグでもあるじゃないですか」

「そっか？ わたしスーツケースもキャリーバッグも持ってないからさ。修学旅行とかも、大きな布のバッグだったし。毎日ガラガラ引きずっていられたらうれしいよね」

○×さんは、そう言った自分の言葉に、聞き覚えがあったが、それは決して別の人生の、別の○×さんの言葉の記憶が垣間見えたわけではなく、同じような、しかし意味としてはまったく違うかもしれないかつての誰かの言葉が、その声色と場を失い、皮膚に刻まれた音程のみの楽譜として、○×さんの口に感染し、一瞬前に発した言葉を形成しては、言葉によって記憶が排出された。それは、昨日まではもちろんのこと、一時間前に学校の教室で午前の授業を受けていた時や、赤いランドセルを引きずる男の子を見たとき、さらにはシャライに向けて声を発した時点ですら、まだありえなかった時間の発見として、○×さんにはぼんやりとした感覚ではあるものの飛来したのだが、それは繰り返しでも前世の記憶でもなく、あくまで物理的な忘却であり、錯覚だった。つながりではなく、断絶だった。シャライも○×さんも、特に気にすることなく、接客の仕事にもどった。夕方の五時になって、シャライが退勤した。六時になると、○×さんも退勤した。日が沈んでいき、昼間にはありえなかった直射日光の差し込みが、街の建物の上辺を滑りつつ電車の車内に訪れ、まぶしさとオレンジ色に、車体も線路もつり革も染められた。座席には、赤いランドセルを抱えて座るカズナが、一人だけいた。シャライも○×さんも、いつも電車で家に帰ったが、カズナの乗っていた電車に乗ることはなかった。

翌日、七年に一度の大雪が降った。日曜日だった。シャライは午前中はアパートの部屋から雪が降るかどうかを見ていて、○×さんは朝から動物園で働くために家を出た。シャライのお母さんも百貨店で働くためにシャライが起きてすぐに家を出た。お昼は冷凍のたい焼きを食べるように言った。ハルは午前中は眠っていた。十一時ごろ雪がちらつきはじめ、またたく間に街中が白くけむり、ハルが昼過ぎになって目覚めると、窓の外が一面に真っ白に昂ぶっているのに気づいて驚いた。あわててテレビをつけた。各地の交通網が遅延していた。動物園にはほとんど人が来なかったが、昼前から何人かが雪の動物園をわざわざ見たいがために動物園にやって来た。明日以降、雪が積もっている状態になってからならまだしも、今日のうちは空中を斜めに吹きすさぶ雪の点線ばかりが近くを覆い、遠くは震える白色のテレビの砂嵐となって、シロクマやペンギンなどを除くすべての動物を暖かな室内に追い立てた。風はますます強まった。夜になれば雪が止み、風だけが強まる日だった。道路のさまざまな箇所が凍って車のタイヤを空回りさせた。マンションの屋上から滝のように雪が落ちてきた。ハルは家を飛び出し、公園で雪にまみれながら雪だるまを三つ作った。トラックが作った轍を iPhone の写真に撮った。動物園のファーストフード店には客が五人しか来ていなかった。シャライは午前中から天気予報を何度も確認していたが、天気予報は十パーセントの確率で大雪になると言い、九十パーセントの確率で雨に雪が混じると言った。カズナと久しぶりに会う約束をしていた。カズナは、たぶん大丈夫だと思った。この街に住みはじめてまだ大変な雪に出会ったことがなかった。シャライは手袋をはめ、マフラーを巻き、コートを着て、ふわふわな帽子に頭を包み、長靴がわりのブーツを履き、青色の傘をさして駅に向かった。あまりの寒さと雪の外によって、部屋の鍵をすべて確認して回るのを忘れてしまい、シャライは駅とアパートのまんなかまで歩いてようやく忘れたことに気づいた。今からアパートに戻るといつにも増してカズナとの約束に遅れてしまうから、アパートに引き返すことはなかった。吐きそうになった。子どもたち四人とすれ違った。二人がこんもりと厚着で、一人が長袖に手袋、一人が半袖に半ズボンだった。くるくる走り回りながら、地面を蹴り、ふらふらの配

達ピザ屋のバイクを追い、工事現場のクレーンをいくつも指差しては、東京タワーだ！ 東京タワーだ！
と叫んでいた。それぞれの東京タワーには展望台で雪景色を楽しもうとする人がたくさんいた。外国人も、子どもも、鳥も、握って取り外せるような街の細部を見渡していた。なんだか地図みたいだった。小さく見えるあそこの交差点をさっき歩いて来た。ビルの看板の文字を覚えていた。近いところよりも遠い海の先の、ちらちら光る点の方がきれいだった。夜だった。電車が走っていた。夜景は鉄骨を尖ったクモの巣の重なりにした。隣の人が電話をしていた。土曜日に映画を見に行きたくなかった。水族館がよかった。あの学校の校庭にわたしがいたら、毎日こっそり寝転がってここを眺めているのに。エッフェル塔からも見てるかな。エッフェル塔はそんなに高くないかな。昼間に公園でサッカーをしている人がいた。赤い信号機も青い信号機も黄色い信号機もみんなあった。飛行機がなくなっても船は速度が遅くてずっと景色の中に光っていた。そのようにして子どもたちが通ったあとは、小さなでこぼこや足跡や○や△や□や×、うねうねと行き交う迷路のような線が道路を覆いつくし、そのまま固まり、一週間後になっても断片的な氷として残った絵は、シャライが吐きそうになることまで忘れさせた。雪嵩の低いところも高いところも、その高低差のまま降り積もり、絵は厚みを増した。排水溝を通う、ほんのわずかだけ暖かな空気によって、側溝の金網の上では雪が内側から削ぎ落とされ、小さなかまくらが作られた。ねずみには大きすぎたが、白うさぎにはちょうどよかった。シャライは電車に乗って街中の百貨店に併設してある駅で降りた。喫茶店で待っていた。地面からは、街に青色の傘が見えなくなった。ハルは真っ赤な手で家に帰り、こたつで暖めた。白うさぎがビルとビルの隙間から這い出てきて、公園でハルの落とした手袋を半分食べた。雪だるまが踊っていた。すべて転ぶと頭が外れてお腹が潰れた。すべり台にぶつかった。動物園のペンギンは雪を見たことがなく、今日も室内で南極の壁画に囲まれながら、北極の空を探していた。ヘビは冬眠中だった。トラも冬眠中だった。猿たちは寄せ集まって猿の塊に進化した。雪の上のあの東京タワーからは動物園が見えるだろう。○×さんが退屈そうに店裏にゴミを捨てていた。

喫茶店の隣の席では同い年くらいの女の子が外国語の勉強をしていた。寒そうだった。イヤホンの片耳が外れていた。カズナの制服を着た人が店の前を通ったが、店に入って来ることはなかった。代わりに、カズナが三分後に店に入って来た。シャライが気づいたときにはもうカズナはこっちを見つけていて、軽く手を振りながら、カウンターでカフェラテを注文した。

ごめんね、お待たせ。いいよ、はい、これ。カズナはシャライから写真集を受け取ると、ぺこぺこ頭を下げながら、向かいの席に座って言った。

「もう高校が終わって八ヶ月くらいになるんだっけ？」

「あっという間だったよね。逆に幼くなった気分」

「そう？ でも、そんなところもあるのかもね」

「だってさ、タイムマシンみたいだよ、本当に。あっという間に毎日が過ぎていくけれど、何年も前が、ほんの昨日みたいでさ。一週間前も三年前も、同じ感じの距離になってる」

「でもそんなに覚えてないでしょう？」

「いや、覚えてるよ！」

「じゃあ、むかしさ、わたしがカズナの高校にうらやましかったこと、なんだったかわかる？」

カズナはカフェラテを一口飲み、五秒くらいを悩んでから、早口で答えた。

「食堂があること」

「ざんねん、制服でした」

えっ、制服？ うちには制服なんてなかったよ？ と自信満々に言うカズナに、思わず笑ってしまった。店の奥では、ノートパソコンを間髪いれず打ち続ける眼鏡の男の人と、白い割烹着のような服を着たおばさんが、同じ机に向かいあう形で座っていた。おばさんは紙ナプキンを折って紙飛行機を三つも作り、せつ

せと並べていた。

「まあ、いいや。ほら、覚えてないでしょう？」

カズナはまた顔をしかめながら、カフェラテを飲んだ。シャライよりも後から来たのに、もうすぐなくなりそうなくらいだった。

「いや、それは難しかったんだって。えっと、じゃあ、たとえばさ、覚えてる？ シャライって名前の由来」
「え、なんだったっけ……」

言葉につまっていた。シャライは自分のことなのに、思い出せそうで思い出せなかった。店内には客が少しずつ減り、ジャズのような曲が大きく聞こえるようになってきた。みんな天気予報を気にしていた。隣の席の女の子は、イヤホンをコートポケットに丸めて押し込んだ。

「カズナは覚えてるの？」

「もちろん。えーっと……」

カズナは表情を変えぬまま、きよろきよろとシャライのうしろを見た。それから窓の外を見ると、人通りの少なくなった雪の道のなかを、傘をさす人たちの多くとすれ違うようにして、赤いカバンのようなものを引きずるカズナが歩いていた。思わず目で追ったが、頭に積もる雪にまるで気づいていないように、大きな足取りで進み、ちょうどカズナとシャライの座っている席の横のあたりで、立ち止まった。シャライも、何気なしにカズナが見ている方向を見つめた。二人に確かめられながら、幼いカズナはうしろを振り向き、今まで引きずってきた、底の金具や赤色が剥げ落ちて傷だらけのカバンの蓋を開けると、中に手を差し込み、それだけでなく頭や上半身まで差し込み、ひどく重たい荷物を取り出すような動きで、また顔を上げた。手のひらには、たくさんの生き物があつた。それらはすべて、実際にそこにいて、そこで生きていた。気温が下がり、牡丹雪になってきた雪片が、生き物たちの背中や頭や葉にも積もり、生き物たちの体温でやんわりと溶けていった。そしてカズナは立ち上がり、こちらに向けて、しかしシャライやカズナの座っている席ではなく、どこか斜め上のあたりに向けて、ぐっと片手で指さした。腕が引き裂けるほど強く指さした。両手で抱えられていた生き物たちは、片手だけで支えられるようになったことで、ぽろぽろと地面に落ち、一斉に散らばった。それでもカズナは指をさすのをやめなかった。シャライは目の前に座るカズナが急にこっちを向いて、にこにこしながら自分に話しかけるのを聞いた。

「そうだ、ぼくが子どものころからいろんなものに見境なくつけてた名前だよ！

って、これじゃあシャライにはわからないのも無理ないか」

「いや、覚えてたよ」

「うそ？ っていうか、それは覚えてたんじゃなくて、いま思い出したんじゃんか」

「そうかもね」

シャライは少し考えたあと、しばらくずっと笑いつづけた。

店を出たときも、幼いカズナは、店内のどこかを指さしたままでいた。傘をさした通行人たちがすれ違うたびに、じろじろと、傘を上げてカズナの方を見ていた。

シャライは近づいた。後ろからカズナもついてきた。

「だいじょうぶ？」

声をかけると、はっとした表情でこっちを向き、赤いカバンをそのままに、振り払うようにして駅とは逆の方向へ駆けて行った。転ぶよ！ と思わず大きな声が出てしまったシャライを、まわりの通行人たちが一斉に見た。

二人は駅の方向へ歩きはじめた。店の前の歩道には、赤いカバンが置かれたままだった。だんだんと、まだ昼間なのに薄暗くなっていき、雪はそこまで強まらずとも、強い風が頻繁に吹くようになっていた。通行人も減っていた。喫茶店には、雪が止むだろう夜になるまで店内にこもり続けることを決めた五人の客

だけが、中身のなくなったカップを片手に、昼寝や読書をつづけていた。十五分の休憩に入ったアルバイト店員は、自分のシフトが夕方に終わったとき、無事に帰ることができるのかどうか、電車やバスの運行状況を携帯電話でこっそり確認した。これ以上、雪がひどくなることはなかった。遅れていた電車もバスも、徐々に遅れを取りもどすことになっていた。安心して店の外を見た。今は激しく降りしきり、道路を歩きづらくさせている雪も、子どもたちは降るだけで飛び跳ねた。天気予報で雪だるまのマークを見つけ、翌日の朝には友達と盛り上がり、国語の時間も算数の時間も理科の時間も、十秒に一度は窓の外を見て、グラウンドを見た。雪が降るような天気だとは思えなかったし、この地域には雪が降ることなんて一年に一度しかなかったから、先生は生徒たちに、授業に集中するよう怒ったが、四時間目のはじまってすぐに、窓際の女の子が

「雪だ！」

と叫んだ。みんなはすごい勢いで椅子から立ち、鉛筆を握ったまま、窓に駆け寄って行った。外には、光を遮るものがなければわからないほど、細かな、ふらつく雪の粉が舞っていた。視力の落ちた先生の目には、雪が降っているように思えなかったが、今朝見た天気予報と、子どもたちの騒ぎにより、黒板に描いていた三角形の面積の図を途中で描きやめた。そして、別の小学校に通う自分の子どもも、雪を吸い込もうとするくらい笑って大声で呼吸しているのだと考えた。雪は夕方になっても夜になっても止まず、次の日の学校は休みになり、公園は子どもたちでいっぱいになった。

雪だるまや雪山が、街のあちこちで作られていた。こうして毎日、雪が降り、雪だるまがどんどんと大きくなっていくことを望んだ。飛行機は空港にとどまった。自動車も車庫にとどまった。大人たちも家にとどまった。街はこのときだけ、動きを重く、ゆっくりとさせ、それによりたくさんの目には、まばたきとまばたきの間には、長い時間、複数の光が、それぞれの風景の輪郭を保ったまま、ぶれることなく注ぎ込んだ。いつもの昼や夜では考えられないくらい、長く目は開かれ、強く、一層の光と影の凹凸が街には刻まれた。

それをたよりにして、線路や駅や道路や駐輪場のすみずみには、折り目がつき、展開図となって、パタパタと風景が折りたたまれていった。街は、カバンの内側、エビの背中の殻の内側に、小さな四角として収まった。四角の表面には、濃淡の形で、割合が生まれた。風が吹くとき、風が止むとき。雲があるとき、雲がないとき。シャライとカズナがここにいるとき、あそこにいるとき。それらが赤いカバンのなかで、生き物になった。そして次々と沸き立ち、赤いカバンからあふれ出た生き物たちは、雪の上にこぼれ、熱によって雪を溶かし、ひとつの穴ぼこを作った。穴ぼこにはたくさんの直線、音や光やにおいや物理法則などといったたくさんの直線が落ち込み、窪みのなかで交わり轟いた。穴ぼこは何層もの宇宙を貫いていた。この世界でも、あの世界でも、誰もがみなかけがえのない宇宙に自分は生まれたのだと思っていたが、宇宙はたった一人で組み立てられるような、勝手きままに世界を一本の系列で捉えることで組み立てられるような形を取ることはなく、あくまでそれは、熱せられ溶けた雪の中で反復する救いであり、信頼であり、祈りだった。生き物たちは雪の上で冷えたあとも緩やかに動き、分裂し、とはいえ雪に溶け込んだり、熱がまんべんなく平らになってまわりと見境のつかなくなることもなく、姿を保ち続けた。穴ぼこに貫かれた宇宙は、みるみるうちに幼くなって、親を忘れた。土地を忘れた。街の季節を忘れた。そして穴ぼこの深さを通じて互いに交わり浸透し、自分とは違う自分として、なんら関係のない生き物たちを赤いカバンの中に産み、それぞれに名前をつけた。カマキリ、トビウオ、クスノキと、順々にとめどなくつけられていく名前は、拭い去られることのない、しかし実際には動くこともない特殊計算機から委ねられ、その意味を問われることなく、それがどこからやってくるかも正確な地点として把握できず、ただ名前であることはわかった。赤いカバンの中で生まれ、あふれ、穴ぼこに轟き、そしてまた赤いカバンを作り上げる部分としての無数の生き物たちの中には、もちろんくじらもいたし、ハイエナもいたし、エビもいた。どれだけたくさんの偏在する循環の軌跡があろうとも、エビはまだエビであってくれた。宇宙にまた来ることができてい

た。甲殻類でも足がたくさんあるのでなく、水槽に飼われているのでさえもない遠くであったとしても、ここに来た。

シャライとカズナが駅の改札で別れたあと、電車を待つホームにいたシャライは、なにかに気づいたようにカズナに電話した。ベンチには犬をつれた、青色のチョッキを着たおじいさんと、眠っている赤ちゃんを背負ったお父さんが、寒そうに体を揺すりながら電車を待っていた。電車は遅れていた。ちょうど一本分遅れていたから、時刻表通りに電車は来る予定だった。

二度のコールのあと、カズナの声はすぐに聞こえた。向こう側は静かだった。

電光掲示板の文字の点滅で、電車が近づいていることを知らされた。

「さっきの写真集さ……」

「さっきって？」

アナウンスが注意を呼びかけた。電車のライトが雪に白む線路を照らし、車輪の音もシャライの声に混ざりはじめていた。犬が吠えた。おじいさんはまだベンチから立ち上がらなかった。

「いや、さっきはさっきだよ」

「何かメールした？」

「渡したじゃん、写真集」

「いつ」

「だから、さっき」

「今日は家から出てないよ？ こんな大雪の中で、出かけるわけないじゃん」

「カズナが言ったんだよ？」

「なにを？」

その時、電車はホームに止まることなく、猛スピードで目の前を通り過ぎて行った。残像まみれの窓から、車内の人たちがぼんやりと見えた。風が目を打った。電話の声が断ち切られた。電車の最後尾が過ぎ去れば、アナウンスは止まり、電光掲示板の文字も点滅をやめた。ホームはまた静まり返った。シャライは電話が通じているのかどうか、確めた。電話は通じていた。向こう側からの音も聞こえる気がした。なのに、何を言うべきなのかわからなくなってしまった。考えることができなくなってしまった。さっきまで自分が話していた写真集のことも、喫茶店で待っていたことも、カズナと会っていたことすらも、うまく並べられなくなり、ほつれ、散らばる毛玉になって、ぽろぽろと線路に落ち、雪に混じり、冷たさでゆっくりと溶けていった。

どうしてカズナに電話したのか、シャライにはもう微かなしるしすらもなくなっていた。ただ、またなにか言われれば、すぐにでも思い出せるという自信だけが残っていた。



家に帰ると、まだ帰っていないようだった。洗濯物を入れた。寒いときには暖房を入れた。コートを脱ぎ、紅茶を沸かしながら、机の上のノートを見ると、朝に書いた夕飯の材料の並びの下で、うさぎがサッカーボールを蹴っていた。鉛筆がノートの横にあったから、サッカーボールに手足を持たせると、うさぎからせつせつと逃げはじめた。うさぎは追いかけた。カーテンを閉めた。外は一週間前ならまだ暗かったのに、今ではこの時間でも明るい季節になっていた。

もうすぐ帰ってくるだろう。自転車のベルが何度も鳴り、それとともに男の子の唸り声が聞こえて来た。アパートの前の道で消防車を追いかけていた。消防車は右に曲がり、自転車は轢かれそうになりながら左に曲がった。近くの消防署では、昼間に消した一軒家の火事の後始末に追われ、消防署の正面の公園では、男の人の膝の上で、女の人が公園のベンチに座っていた。恥ずかしそうな表情で、こっちから見られていることに気づいていた。タクシーのおじさんたちが、そろそろ日も暮れてきて、退屈な休憩から仕事にもどっていった。子どもたちも暗くなった外では遊べなくなり、家に帰っていった。雲の裏側から、月がゆっくりと目の前の雲を流しながら、建物の屋上や屋根を照らしていた。空にはまだ、飛行機が飛んでいた。オオカミが乗っていた。初めての海外旅行の時、緊張した。情報収集衛星が、惑星の自転にあわせて周回し、三日に一度、二十秒間だけ街の上空を通過して、街の画像データを送った。曇りや夜間でも、惑星表面上にある一メートル以下の物体が識別できると推定されたが、それから三年足らずのあいだに、四十センチ以下の物体を識別できる新たな情報収集衛星が三つ打ち上げられ、惑星上を周回し、一日に一度、街の画像データは送られることになった。

翌日、春と冬の往復する境目にあって、空だけは、雲ひとつない冬空のまま、巨大な赤と白のクレーンを浮かび上がらせていた。いくつものきれいな部屋が、ベランダのない窓だけの四角のマス目として、遠近法の消え失せた空を背景に、ぐにやりと斜めに歪んで伸び、その真っ白なマンションの壁の下、敷地の中で、鋼色の糸くずと石盤が絡み合って、動くのか動かないのかわからないシヨベルカーと、動くのか動かないのかわからない青色のビニール服を着た作業員を、絡み合いの屑山に埋めていた。マンションの裏側では、ベランダでバスタオル二枚と靴下二足とカーディガン一枚が、風で地面と平行になるほどにまで揺れ、同様に屋上の貯水タンクも震え、がたがたと軋み、ついには耐え切れず破裂して、近くにいた一羽のカラスを吹き飛ばしながら、窓という窓、ベランダというベランダで、洪水がここにもあそこにもあふれていき、貯水タンクにたまっていた幾億匹ものタガメが、早いものは一瞬で、遅いものは半日かけて地面に落下した。かつて隣の家の庭から、少なくとも十一体分の人骨が見つかったが、どれも一万三千年前の人骨で、DNA検査による家族構成の調査とともに、顔の分析が行われた。一体は屈葬だった。三体は男女が判明した。情報収集衛星は街ごとに四つずつ打ち上げられたことで、太陽から見れば、惑星を覆う膜のように衛星が飛び交っていて、惑星はいつのまにか一回り大きくなったかと思われた。子どもの死体もそのうち大人になった。学校もバイトもない日だった。量子力学コンピュータが世界で初めて作られた。

「これってすごいこと？」

何気なく聞かれたけれど、言い淀んでしまっていた。すごいことだけはわかった。舌には黒いほくろの

ようなものができた。三日後に壊死し、五日後に回復した。夜の公園では、葉の落ちた木の先端に、ミッフィーの描かれた凧がひっかかったままで、夏まであった。今から思えば動物園の写真はためておいても仕方がないのだから、ときどき見せればよかったのだった。バイトは十九歳の時にやめた。あの動物園にはしばらくのあいだ行っていなかった。それでも、たまにはテレビで様子を見た。ぞうの出産やヤマアラシの部屋の増築や、そんな放送も地元に住んでいたからであって一度都会に行った夜にはこんなニュースなんて流れなかった。動物園のない、線路だらけの街に住んでいればなおさらのことだった。そもそもテレビが家がない、お金はないわけではないにしても不安はある、船の解体作業は環境問題に関する行政指導によって徐々に減りつつも、うちの会社は当分のあいだ仕事を続ける気だった。iPhoneは非正規の修理店で、割れたフロントガラスだけを安く交換してもらった。地図が使えないから、修理店に行くまでの道に迷うことになった。陸橋の上から、立体交差点の真下にとまるパトカーを写真に撮った。パトカーは模型のように動かなかった。中学生のころ、自転車通学をしていたけれど、行きは三十分、帰りは四十分だった。小高い丘になっている住宅街の奥に、七階建てのアパートがあった。その三階の角部屋に、お母さんと二人で住んでいたから、坂道を下る行きは速く、帰りは遅くなった。教室には時計がなく、腕時計をしていたのは人生でもあの時期くらいのことだったが、学校のチャイムの鳴る音と、腕時計の針が、何度あわせても一ヶ月ほどで、半周ずれてしまった。坂道を下る時、車ほどにも速い自転車に乗った腕時計は、相対性理論によって、時間が学校のチャイムよりも遅くなった。パトカーは、二車線道路に左右を挟まれながら、絶え間ない交通にうまく入り込めないのか、入り込む気持ちがもともとないのか、夕方になっても、立体交差点の真下に放置され続けていたが、昼間は影になっている所こも、夕方になれば夕日が差し込み、後ろからも、ガラス張りのビルの壁面に反射した太陽が照らした。それにより、パトカーに積もった埃が、拡大すれば産毛のように全身を覆っているのが見えた。

割れたiPhoneで撮影したパトカーを、修理して、非正規のフロントガラスになったiPhoneの、斜めに見ればうっすらと青白い画面の上で、加工し、ミニチュアのようにしたり、赤く褪せた色に調節したりして、実際に見たパトカーと同じにした。これを昨日までのiPhoneの画面から見れば、青白さが薄まって、もう少し強い、早めの時間の夕日になっていた。それは、ネット上にアップした時に、そう思った。まぶたの血管がきれいなことを、誰にも言っていなかった。手首の血管の色が一番好きだった。特に冬の腕はすごくいい色だった。

人類がいなく、惑星はかろうじてあっても、動物はおろか、植物や微生物までいないとき、誰がこんな冬の白い肌の奥の血管を見ることができただろう。家の近くに消火器屋さんがあったことを、住みはじめて八ヶ月経ったころにようやく気がついた。二月になっても地面を掘ればセミの抜け殻がたくさん出てきた。生まれてから一度も散歩させてもらうことのなかった柴犬は、それでも家と庭だけで生涯を終えた。来世では野良犬として過ごした。

子どものころ通っていた散髪屋にも犬がいたし、アパートに住みはじめたあの街でも、学校と家のあいだにある三つの散髪屋のうちの一つで犬がいた。旧暦の月末に犬を食べると厄よけになるため、犬を盗もうとする人々と犬を守ろうとする人々が殺しあうほどに、犬は街にあふれていた。店では一日五十匹を仕入れては、茹でたり焼肉にしたり腸詰めにして客に出し、客は発酵させたエビのソースにつけたり香草に巻いたりして食べ、酒のつまみにもなった。海沿いの市場で皮を剥がれ、お腹を開かれ、洗濯物のように吊るされたり、もしくは肉の切り身を部位ごとにタッパーにつめて並べたりしている隣で、子犬が血統書つきの声で鳴き、人々は毛並みのよさと人懐っこさ、そしてなにより言葉ではうまく言いあらわせないものの、わずかな笑顔の違いが、犬たちの一生を左右した。食べるものも、朝昼晩も、春夏秋冬も、死んだあとも、死に際も。店と店の間にある下水パイプから、ねずみが顔を出し、犬料理とイタリアン料理で悩む通行人の足下をくぐり、信号待ちをしていたタクシーのボンネットの上に飛び乗った。小学生の夏休み

に初めて行った街中の駅前のロータリーで、目の前を駆け抜けたねずみと同じねずみだったが、すぐにタクシーが走り始めると、行方をたどる術は失われてしまった。ビルの窓から双眼鏡で追っているか、衛星に位置情報を逐一伝えてもらわなければ、いつかまた偶然出会うことにならざるをえない。駅と併設された百貨店の屋上に、カラフルな観覧車があった。そこからなら、街全体が小さく、どこまでも広がっているように見えた。遠くに海があった。島があった。友達の家があった。隣街との境界線が圧縮され、建物と建物の重なる群れに要約され、すべての道や人々がこの街の建物になっていた。商店街の屋根の赤い直線が、骨の浮き出た蛇のように横たわり、ブロック状のビルとビルの隙間から、家と百貨店を結ぶ路線バスがあらわれた。バスの屋根の上には、風で運ばれてきた別の国の砂漠の砂が模様を描き、三重の波がよろめき、バスとバスがすれ違うたびに波は飛沫をあげて、道路の白線を隠すようにちょうど細くこぼれた。粗大ゴミの回収業者の声が聞こえた。自転車のベルが二度鳴った。観覧車の窓には爪で引っ掻いたような傷がいくつも残っていて、写真を撮ってあげると、ピースをしている背景には、街の風景ではなく、白に濁ったゴンドラが、内側に反射する太陽の光だけを媒介にして写っていた。外にはそれしかなかった。

空爆された車体が逆さまになり、土色の建物の壁はパイ生地のように割れて、大きなかけらとして山積みになっていた。対空砲や機関銃を載せたトラックがコンビニの側面に突き刺さり、公民館の駐車場には直径七メートルの穴がぼっかりと空いていた。爆弾が炸裂し、高校の校舎が吹き飛んで、ノートや筆箱や黒板が川面に降り注いだ。魚たちは驚いた。もはや世界の終わりだ！ 心配性の彼らは茶色いカササギの群れの襲来を信じた。今なら釣り針が降りてきても啜えることなんて決してない、その覚悟が日夜、水中を照らした。カササギたちはこの街に帰ってくるだろうか？ 犬は苦手だけれど、散髪屋の前にいた犬は好きだった。黒くて落ちついていて、大きな犬だった。iPhoneを落としたのも、ちょうど散髪屋の前だった。あの時、犬はいなかった。夜だった。学校の帰りだった。気温は四度を下回った。玄関の扉の鍵が開こうとしていた。靴を脱ぎ、部屋へ入っていくと、作りたてのシチューとパンが机に並んでいた。コートを着て寒そうだった。部屋にいたから寒くなかったものの、暖房をつけてあげた。洗濯物も入れておいてくれた。ふたりで食べた。うれしかった。食器を片付け、少しテレビを見た。明日の天気予報を確認した。晴れだった。本を読み、紅茶を飲み、絵を描いた。逃げるサッカーボールを追いかけていたうさぎのまわりに、地面と雲とひまわりを作ってあげた。ひまわりには色も塗られた。花びらが赤だった。部屋の外では水の泡立つ音が柱のかたちで浮き上がり、巨大な潜水艦の軌跡と交錯した。死体が沈んでいった。あくびをした。お風呂に入った。歯磨きをした。眠る前、天井をぼんやり見ているようだったから聞くと、まるでさっきまでずっと考え込んでいたかのような表情で、隣を向き、なにかを答えた。一瞬間のあと、すぐよろこばれ、今まで聞いたことのないくらい広やかな声で、
「どれだけうれしいと思う？」

はじめて猫を飼ったときくらいうれしい！」

と言った。